

全權委員ノ爲シタル右宣言ヲ更正スル爲宣言スル所アリタル猥褻刊行物ノ流布及
取引ノ禁止ノ爲ノ國際條約ヲ閱覽點檢シ右帝國政府ノ宣言ニ依リテ更正セラレタ
ル帝國全權委員ノ宣言ヲ存シテ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百九十六年昭和十一年二月二十四日東京宮城ニ於テ親ラ
名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣 廣田弘毅

官報

昭和十一年十月三日
第二千九百二十八號

土曜日

條約第七號

勞働者職業病補償ニ關スル條約(千九百三十四年改正)(條約文)

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル大日本帝國天皇御名此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣
示ス

朕昭和九年「ジュネーヴ」ニ於テ開催セラレタル第十八回國際勞働總會ノ採擇ニ係ル勞
働者職業病補償ニ關スル條約(千九百三十四年改正)ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百九十六年昭和十一年四月三十日東京宮城ニ於テ親ラ名

ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣 有田八郎

第二節 敬語及び書式

第一款 敬語

天皇の御一身、御動作其の他總て事の天皇に關するものは、古來常
に特に崇敬の意を表す特殊の語を以て之を稱し奉るを常例とす。
天皇に關する此等の敬語は、上代には専ら我が固有の國語を以て
せしが、支那の文物の我が國に傳はるに及び、國風及び漢風の兩様
の敬語が並び行はるゝに至りたることは、帝號に付き述べたる所
に同じ。

我が固有の國語に於いては、事の天皇に關するものには普通の國語に特にオホミの語を冠し、以て敬語と爲すを例とす。オホミマ(御身)、オホミキ(大御酒)、オホミケ(大御食)等の語は是なり。或は單にオホ又はミの語を冠するに止まるものもあり。オホニヘ(大贄)、オホトノ(大殿)、ミコト(御命)、ミハカシ(御佩)等は其の例なり(一)。

漢風の語に於いても、事の天皇に關するものを稱するには、普通の言辭に特に崇敬の意を表す特殊の文字を附し、以て敬語と爲すを例とす。此等の文字は、其の種類甚多様なれども、之を大別すれば、第一、尊貴の意義を有するもの、第二、尊貴なる事物の名稱たるもの、第三、皇居又は其の他天皇に關する事物の名稱たるもの、三種と爲すことを得べし。此の外、本來の語義に於いては崇敬の意を表すものに非ざるも、尙天皇に關してのみ用ひられ、随つて等しく敬

語として見るべきものあり。

敬語として附せらるゝ文字の中、尊貴の意義を有するものには、聖、叡等を擧ぐることを得。聖は至徳の義にして、聖躬、聖壽、聖慮、聖斷、聖德等、叡は深明の義にして、叡慮、叡旨、叡覽、叡感、叡聞等の語あり(二)。尊貴なる事物の名稱たる文字には、天神、龍、鳳、玉、寶等あり。天は高きに居りて下を理むる者の稱にして、天顔、天氣、天裁、天恩、天聽等、神は靈妙不測の力ある者の稱にして、神筆、神慮等、龍は鱗蟲の精なるもの、稱にして、龍顔、龍姿、龍駕等、鳳は神鳥の稱にして、鳳詔、鳳輦、鳳闕等、玉は石の美なるもの、稱にして、玉體、玉座等、寶は珍貴なる玉物の稱にして、寶祚、寶算等の語あり(三)。

皇居其の他天皇に關する事物の名稱たる文字には、宸、禁、闕、紫、袞、宸、鸞、鑿、詔、勅、綸、御、欽、親等あり。宸は帝居の稱にして、宸襟、宸筆、宸翰、宸

遊、宸居等、禁は天子居る所の稱にして、禁裏、禁中等、闕は帝宮の門觀の稱にして、宮闕、闕下等、紫は星座紫微宮の略稱にして、紫闕、紫庭等、袞は御服の文様卷龍の稱にして、袞龍、袞冕等、辰は帝座に用ふる障屏の稱にして、負辰、丹辰、玉辰等、鸞及び鑾は乘輿に附したる鈴の稱にして、鸞輿、鑾駕等、詔は告、勅は誠、綸は絲、皆天皇の命令の意にして、詔書、詔旨、勅語、勅書、勅裁、勅許、勅使、綸言、綸命等、御は進、欽は敬、親は自、皆天皇に關する事物に用ふる敬稱にして、御製、御衣、出御、還御、欽定、欽差、親臨、親征等の語あり。

本來の語義に於いて崇敬の意を含まずして而も天皇に關して用ひらるゝ敬語には、降誕、不豫、崩、逆鱗、行幸、車駕、鹵簿、内裏、宮城、行宮、倚廬、陵等あり。

稱としての朕の語を擧ぐることを得。

一 古事記

上

是以、伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米。上志許米岐此九字、穢國而在邪理、此二字、以音、故吾者爲御身之禊而、到坐竺紫日向之橋小門之阿波岐。此三字、原而禊祓也、

古事記傳

六

御身は意富美麻と訓べし、貞觀儀式、奏御體御卜條に、奏云、宮内省申久、御體保美麻、御卜供奉禮留事申給牟止、神祇官姓名候止申、とある。四時祭式、宮内省に依れり、身は古言に牟とも多く云れば、麻とも云しにこそ、

法隆寺藥師像光背銘

(用明)

池邊大宮治天下天皇、大御身勞賜時、歲次丙午年、召於大

儀式

五奏御卜儀

奏云、宮内省申久、御體保美麻、御卜供奉禮留事申給牟止、神祇官姓名候止申、勅曰、喚之、稱唯退喚之、

延喜式

一四時祭上

神祇一 卜御體保美麻、

古事記

中

(應神天皇)

品陀和氣命、(中略)又吉野之國主等、(中略)又於吉野之白檮上、作横白

國風の敬語
オホミの語
を冠する敬
語オホミ

而於其橫白釀大御酒獻其大御酒之時、擊口鼓爲伎而歌曰、加志能布邇、余久須邇、余久須邇、余久須邇、迦美斯意、富美岐、宇麻良爾、岐許志母知衰勢、麻呂賀知、此歌者、國主等獻大贊之時、恒至于今、詠之歌者也、

古事記 中 故獻大御饗之時、其女矢河枝比賣命、令取大御酒盡而獻於是、(德神)天皇、任令取其大御酒盡而御歌曰、(御歌省略)

古事記 下 又天皇、坐長谷之百枝槻下、爲豐樂之時、伊勢國之三重、(略)採指舉大御盡以獻、爾其百枝槻葉落、浮於大御盡、

萬葉集 雜歌 幸于吉野宮之時、柿本朝臣人麿作、

山神乃、奉御調等、春部者、花挿頭持、秋立者、黃葉頭刺理、逝副川之神母、大御食爾、仕奉等、

萬葉集 二十 陳私拙懷一首、并短歌、

天皇乃、等保伎美與爾毛、於之亘流、難波乃久爾爾、(中略)安麻乎夫禰、波良良爾、宇伎且、於保美氣爾、都加倍麻都流等、

古事記 中 (神武天皇)神倭伊波禮毘古命、(中略)故到豐國宇沙之時、其土人、名字沙都比古、宇

沙都比賣、(此十字以音)二人、作足一騰宮而獻大御饗、

續日本紀

光仁天皇

寶龜三年三月癸未、皇后井上內親王坐巫疊廢、詔曰、天皇御命

良麻宣御命乎、百官人等天下百姓衆聞食倍止宣、今裳咋足嶋謀反事、自首之、(世利、中略)

別宣久、謀反事、爾預且、隱而申、佐奴奴等粟田廣上、安都堅石女波、隨法斬、乃罪爾行賜倍之、

然思、保須大御心坐、爾依而免賜、比奈太每賜、比且、遠流罪、爾治賜、波久、宣天皇御命乎、衆聞

食倍止宣、

三代實錄

清和天皇

貞觀十四年五月十九日戊子、勅遣參議正四位下行左大辨兼

勘解由長官近江權守大江朝臣晉人、向鴻臚館、賜渤海國使、授位階告身、詔命曰、(中略)然

常都例波、大宮乃內、爾召天治賜介理、此廻思、女須大心大坐、(麻須依毛、使乎遣天治賜久)

止勅天皇、我大命乎、聞食止宣布、

續日本紀

文武天皇

八月庚辰、詔曰、現御神止、大八嶋國所知天皇大命止、(良麻)詔大命

乎、集侍皇子等、王等、百官人等、天下公民諸聞食止、詔、

古事記

下

(履中天皇)伊邪本和氣命、(中略)本坐難波宮之時、坐大嘗而爲豐明之時、於大御酒

宇良宜而、大御寢也、

延喜式

八神祇八

龍田風神祭

第二節 敬語及び書式 第一款 敬語 一

皇御孫命詔久、神等乎波、天社國社止、忘事無久、遺事無久、稱辭竟奉止、思志行波、須誰神會、天下乃公民乃作作物乎、不成傷神等波、我御心會止、悟奉禮止、宇氣比賜支、是以皇御孫命大御夢爾、悟奉久、(下略)

古事記 下 於是天皇大驚曰、(中略)賜御歌其歌曰、(中略)爾赤猪子之泣淚、悉濕其所服之丹指袖、答其大御歌而歌曰、(歌省略)

古事記 下 大長谷若建命、(中略)於是答曰、(中略)吾先為名告、吾者、(中略)葛城之一言主之大神者也、天皇於是惶畏而白、恐我大神、有宇都志意美者、(中略)葛城之御刀及弓矢始而脫、百官人等所服之衣服以拜獻、

續日本紀 二十一 天平寶字二年八月庚子朔、高野天皇禪位於皇太子、詔曰、(中略)百官職事已上、及大神宮乎、始氏、諸社禰宜祝爾、大御物賜夫、

古事記 中 是日向喚上之髮長比賣者、請白天皇之大御所而、令賜於吾、爾建內宿禰大臣請大命者、天皇即以髮長比賣、賜于其御子、

古事記 下 大長谷若建命、(中略)後更亦幸行吉野之時、留其童女之所遇、於其處立大御吳床而、坐其御吳床、彈御琴、令為儻其孃子、

オホミユメ

オホミウタ

オホミタチ

オホミモノ

オホミモト

オホミアグ
ラ

オホミフネ

オホミハフ
リ

オホの語を
冠する敬語

オホニヘ

オホトノ

オホモノ

萬葉集

二 挽歌 天皇大殯之時歌二首

如有刀、豫知勢婆、大御船、泊之登萬里人、標結麻思乎、

八隅知之、吾期大王乃、大御船、待可將戀、四賀乃辛崎、

古事記

中 大帶日子淤斯呂和氣天皇、(中略)爾倭建命、(中略)歌竟即崩、爾貢上驛

使、於是坐倭后等、及御子等、詣下到而作御陵、即匍匐廻其地之那豆岐田、(中略)而哭為

歌曰、(中略)是四歌者、皆歌其御葬也、故至今其歌者、歌天皇之大御葬也、

古事記

中 品陀和氣命、(中略)於是、大雀命與宇遲能和紀郎子二柱、各讓天下之間、

海人貢大贄、爾兄辭令貢於弟、弟辭令貢於兄、相讓之間、既經多日、

延喜式

三十一 宮內省 凡神今食、新嘗祭、明日平旦大殿祭、(中略)輔入奏、諸奏事、皆其詞曰、

宮內省申、久、大殿祭、能保加比、供奉、奉登、神祇官姓名、率忌部、氏、候、登、申、

三代實錄

二十一 清和天皇 貞觀十四年五月廿三日壬辰、勅遣大學頭從五位上兼行文章

博士阿波介巨勢朝臣文雄、(中略)於鴻臚館、饗燕渤海國使、宣詔曰、客人倍波、常都例波、大

宮乃內、爾召、天饗賜、比音樂賜、比介而乎思、女須、大心大坐、爾依、天奈、使乎遣、天大物賜、布、

古事記

下 大長谷若建命、(中略)即幸阿岐豆野而、御蕩之時、天皇坐御吳床、爾蝸咋

御腕、即蜻蛉來、咋其蝸而飛、(註略)於是作御歌、其歌曰、美延斯怒能、袁牟漏賀多氣爾、志斯布須登、多禮曾、意富麻幣爾、麻袁須、夜須美斯志、和賀淤富岐美能、斯志麻都登、阿具良爾伊麻志、(下略)

萬葉集 六 雜歌 讚久邇新京歌二首 并短歌、(中略)

反歌五首

泉川、往瀬乃水之、絶者許曾、大宮地、遷往目、
布當山、山並見者、百代爾毛、不可易大宮處、

萬葉集 六 雜歌 (神意) 四年丁卯春正月、勅諸王諸臣子等、散禁於授刀寮時、作歌一首 并短歌、

天皇之御命、恐百磯城之、大宮人之、玉梓之、道毛不出、戀比日、

萬葉集 二十 天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

可之古伎夜、美許等加我布理、阿須由利也、加曳我伊牟多禰乎、伊牟奈之爾志耳、

右一首、國造丁長下郡物部秋持、

日本書紀 三 神武天皇 己未年三月辛酉朔丁卯、下令曰、(中略)夫大人立制、義必隨時、

苟有利民、何妨聖造、

オホマハ

オホミヤト
コロ

ミの言を冠
する敬語
ミコト

ミコトノリ

ミハカシ

ミトラシ

ミアラカ

漢風の敬語
尊貴の意を
有する文
聖敬字を附
する

四年春二月壬戌朔甲申、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕躬、

萬葉集 十三 相聞 御佩乎、劍池之、蓮葉爾、淳有水之、往方無、我爲時爾、應相登、相有君乎、

萬葉集 一 雜歌 (神意) 天皇遊獵內野之時、中皇命使間人連老獻歌、

八隅知之、我大王乃、朝廷取撫賜、夕庭伊緣立之、御執乃、梓弓之、奈加弭乃、音爲奈利、朝獵爾、
今立須良思、暮獵爾、今他田渚良之、御執能、梓弓之、奈加弭乃、音爲奈里、

延喜式 八 神祇八 大殿祭

皇御孫之命 乃天之御翳、日之御翳 止造奉仕 禮流 瑞之御殿、(古語云、阿良可、)

二 文華秀麗集 中 述懷 奉和臥病重陽節之作、一首 野岑守

聖躬違和日數廻、令節重陽、儵忽來、時菊不知高宴罷、黃花一兩殿前開、

三代實錄 十二 清和天皇 貞觀八年三月二日戊寅、(中略)是日、勅沙彌深寂、賜姓貞朝、臣

名登、敍正六位上、貫右京一條一坊、先是貞觀五年九月廿日、三品行中務卿諱、(光孝親王、中

略)等奏言、深寂、是仁明天皇更衣三國氏所生也、承和之初、賜姓源朝臣、預時服月新、厥後依
母過失、被削屬籍、仍出家入道、嘉祥之末、更垂優矜、同於法榮、尋道之列、預時服月新、聖躬不
豫之間、與諱等共侍嘗藥、登遐之時、緣身出家、不預處分、

聖壽

三代實錄

三十九天 陽成天皇

元慶三年十一月丙辰朔旦冬至，右大臣已下參議已上抗表賀

曰：臣基經等言、(中略)臣等詣闕之誠何切、聖壽無疆、明時有瑞、不勝抃舞、拜表以聞、

紀光卿記

實曆十二年七月十二日癸酉、午下剋、又有大急召、倒衣裳馳參、(中略)已崩

御後也、(中略)御在位十六年、聖壽纔廿二、

菅家文章

九奏狀 爲源相公重請罷右衛門督狀

右臣生、去十五日修狀、伏請罷右衛門督、(中略)伏望、特播弘仁、再廻聖慮、恩詔一降、察臣累聞、不堪懇至、重修表狀、臣生誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

貞觀十二年

示羊記

嘉永元年十二月廿五日乙丑、(中略)是皆先帝叡旨、是日所遂行也、聊爲奉安

聖慮、今日差使齋幣帛、奉告弘化廟前之旨、

御產部類記

二利三十五 伏見宮御記錄

冷泉院 九條殿記 天曆四年六月十五日、參

內、召御前仰云、儲宮事、往代之例、速以行之、於大臣心如何者、復命云、左右只在聖斷、非愚臣

之可定申、

勤仲記

正應五年九月廿六日甲申、(中略)今日又被仰下綸旨於長者、其趣云

聖慮

聖斷

一乘院門徒訴訟(中略)然者殊被仰合關東、任道理可有聖斷、(中略)

九月廿六日

春宮亮兼仲奉

親長卿記

文明三年二月別記

十三日、抑今度舊院御追號事、去正月二日被仰新大納言、(後花園)繼長、(中略)

第二度諸卿申詞(中略)

中納言舊院御追號可被改哉事、重預下問、彌迷勅答者也、(中略)況改顯德、爲後鳥羽先蹤、已分明者乎、宜在聖斷矣、

基量卿記

元祿六年十一月廿六日、政務事、向後主上可爲御沙汰由、自院被仰進、御成

人之故也、(中略)向後關白以下攝家申相談言上、其上可有聖斷由也、

本朝文粹

九序二 帝道

早春侍內安、賦聖化萬年春、應製、

(大江朝綱) 後江相公

方今聖德滂流、施仁成化、當九春之初月、占萬年之久芳、

本朝文集

六十九

花園天皇奉爲伏見天皇十三回忌、修追福願文、

(眞輪) 文纂近州卷

爰以眇身、聖德雖疎、追孝、懇篤之忠、非淺、宿因早感、妙經、歸敬之心、甚深、(中略)

嘉曆四年八月日

聖德

承應遺事 後光明帝御諱紹仁、(中略)九月廿日崩御し給へり、(中略)誠に天從の聖德、寛仁明睿の天稟にてまし、くけり、天これに御壽をかし奉らば、聖徳いよ、くめでたかるべきをと、人みな申けり、

三代實錄 三十二 陽成天皇 元慶元年八月己巳朔、天皇聖體不豫、

明月記 元久二年七月一日、去夜夜半許、行幸大炊御門亭云々、或人云、日來皇居有靈物、伊豫内侍夢赤大面物襲來、覺見之、有其體物、漸出去、又他人見之、聖體不豫事等、依之遷幸云々、

尙忠公記 弘化三年正月廿五日、(中略)左府公自殿下之口演被示、(仁孝)主上昨夜自深更御不豫不輕、(中略)從夜御殿、聖體御寢御帖之儘、奉昇奉入御船、

定晴卿記 寶曆十二年十一月廿七日乙酉、傳聞、去廿一日先帝御影供養之儀、甚内々之事也、(中略)風早三品公雄卿奉拜寫聖影、

願文集 三 永陽門院(後深草)皇女諱久子院廳

請諷誦事

聖體

聖影

聖算

(後深草)先院聖靈登霞以降、愁露未乾、九漢之日月如馳、一周之光陰已來、(中略)大茅洞之中、縱恨聖算於六十二廻之夕霧、妙蓮臺之間、定整尊容於三十二相之夜月、(中略)

嘉元三年七月十日

別當正二位行權大納言藤原朝臣公顯

中御門院御昇壇記 賀表

臣家熙等言、(中略)祝聖算於千祀、享天祿於無窮、祥鳳來儀、瑞獸攀舞、臣等任忝股肱、喜溢心顔、況拜天威于咫尺、(中略)

(正徳元)寶永八年正月七日

古事談 一 王道后宮 顯基中納言者、後一條院寵臣也、天皇崩給之後、忠臣不仕二君ト

云テ、七々聖忌之後、登天台楞嚴院、落飾入道云々、

願文集 五

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施 (中略)

(後土御門)先皇陛下、期月早移、聖忌忽到、展一日之講席、讀十軸之眞文、時也蒲牢三杵之聲、梵風揚而

聖忌

劉亮、拍子一炷之氣、瑞煙散輪囷、功德有隣、回向不貳、仍諷誦所修如件、敬白、

永正十二年九月廿八日

禁裏番衆所日記 寬文六年九月廿六日、今日卯刻、依後陽成院五十廻、後光明院十
三廻、聖忌、免者宣下、上卿德大寺大納言、奉行方長、

日本書紀

二十五年 孝德天皇

(皇極)

天豐財重日足姬天皇四年六月

(十四日)

庚戌、天豐財重日足姬天皇、思

欲傳位於中大兄而詔曰、云々、(天智天皇)

(中略)於是、中大兄深嘉厥議、密以奏聞、天豐財重日足姬天

皇授靈綬禪位、策曰、咨爾輕皇子云々、輕皇子再三固辭、轉讓於古人大兄(註略)曰、大兄命、
是昔天皇所生、而又年長、以斯二理、可居天位、於是古人大兄避座、逡巡拱手辭曰、奉順天皇
聖旨、何勞推讓於臣、

續日本紀

三十六年 光仁天皇

寶龜十一年三月辛巳、(十六日)

(中略)太政官奏、稱分官設職、不在繁多、

宣風導民、務於簡要、(中略)臣等以為、當今之急、省官息役、上下同心、唯農是務、特望、天恩許
之、臣等并省官員、則倉廩實而禮義行、國用足而廉恥興矣、伏聽聖裁者、奏可之、於是每司并
省、各有其數、事在別式、

本朝文粹

五表下 辭左右大臣

辭右大臣第一表

(菅原道真)
菅原大相國

聖鑑

臣某言、(中略)伏願、陛下高廻聖鑑、早罷臣官、非唯不奪志於匹夫、亦復得從望於衆庶、不堪
懇款屏營之至、上表以聞、臣某、誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

昌泰二年二月廿七日 正三位守右大臣兼行右近衛大將臣菅原朝臣某上表

文德實錄

序

臣基經等、竊惟、(中略)臣等生謝龍門、種非虎乳、殊恐、謬缺文於聖訓、忝

直筆於明時、謹詣天闕、奉進以聞、謹序、

續日本紀

八元正天皇

(二十一日)養老四年夏四月癸酉、太政官奏、諸司下國小事之類、以白紙行

下、於理不穩、更請內印、恐煩聖聽、

續日本紀

五元明天皇

(二十九日)和銅三年春正月庚辰、日向隼人曾君細麻呂、教喻荒俗、馴服聖

化、詔授外從五位下、

本朝續文粹

五表下 辭大將

(藤原教通)

二條關白辭左近衛大將狀

明衡朝臣

伏冀聖恩、早垂叡覽、退羊質於羽林、求鷲領於黛岳、不耐悚越之至、修狀以聞、臣某、誠惶誠恐、
頓首々々、死罪々々、謹言、

康平五年四月十一日

從一位左近衛大將皇太子傅藤原朝臣

元長卿記

永正四年正月廿五日、已刻許着衣冠參內、詩懷紙少々、隨到來令持參、

聖訓

聖聽

聖化

聖恩

春日同賦掖墻新柳、(中略)

宦門開處粉墻新、御柳陰々吹不塵、雨露恩如聖恩遍、青烟深鎖漢宮□、

代代宸筆御八講願文等記 上 東大寺圖書館所藏 天曆九年乙卯正月四日、皇

帝奉爲母儀故太皇太后、(藤原種子) 供養御筆法華經、

金輪聖王、堯雲遍燾、潤藥草於春畝、舜日重照、轉法輪於昏衢、方今開蓮之文、出聖跡臨池之

妙、貫花之偈、生神筆入木之功、

尚書注疏 三 虞書 大禹謨 益曰、都帝德廣運、乃聖乃神、乃武乃文、(傳) 聖無所不通、

孟子注疏 十四上 盡心章句下 大而化之、之謂聖、

本朝文粹 四 表上 攝政關白辭職表 (藤原忠平) 同公辭攝政准三宮等表 (大江朝綱) 後江相公

臣某言、(中略)伏願、曲廻如綸、憐此匪石、早停不堪之攝行、亦收無功之重賞、天地覆載之仁、

躬聖襟而化下、春秋生殺之令、決叡慮而撫民、樵夫野老、謗議自停、餘燼遺孽、逆心長滅、不勝

悚懼屏營之情、謹重拜表、陳讓以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、謹言、

天慶三年五月廿七日 太政大臣從一位臣藤原朝臣某上表

願文集 二 (治承元) 安元三年宸筆御八講初座、公顯前權僧正啓白詞、

聖跡
聖の語義

叡慮

敬恭 乃至 敬白言、今南瞻部洲大日本國金輪聖皇、凝白善於叡慮、抽丹誠於玉體、課毗首奉
造立白檀釋迦如來三尊形像、振宸筆奉書寫金字法華妙典、一乘眞文、供養恭敬、開眼開題、
明月記 寬喜三年三月廿六日壬子、(中略)宰相衛府事、又雖叡慮有御憐愍、其闕不出
來由、二品被語云々、事若有實者爲本意、

親長卿記 文明三年七月三日、眞寸鏡校合、今日進上、於御前可直付之由、有仰、有用捨
事、以他本有校合、依叡慮注直了、

菅葉 天保六年閏七月九日丙申、(中略)御名字統仁、叶叡慮歟、

官家問答 叡慮 叡心 宸襟

御書付之通、天子之御心ヲ申候、

妙心寺文書 京都府 妙心寺所藏 紫野大德寺不歷階級、一跳賜紫衣師號事、不

混自餘之條々

一、超侍者參内之初、除一重之御席而相看之、叡旨有之、

京都御所東山御文庫記錄 甲六十八 附記二 洞院家今出川家相論之事六枚

永德より一かうらうろう、いまたほんふくのすかたいさゝかも候はぬ程に、他家のき

叡旨

うこんなと申候ては、比せられかたくて、多年の愁訴、かつは叡察も候へく候、左馬寮は他のさまたけあるましき朝恩にて、代々叡旨もかたしけなく候を、ゆへなくらうろふ、ふひん申はかりなくて、(下略)

本朝續文粹

五表下 辭大將

(藤原教通)

二條關白辭左近衛大將狀

明衡朝臣

叡覽

伏冀聖恩、早垂叡覽、退羊質於羽林、求鸞領於黛岳、不耐悚越之至、修狀以聞、臣某誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

康平五年四月十一日

從一位左近衛大將皇太子傅藤原朝臣

勘仲記

正應四年正月九日戊申、(中略)今日依和歌御會始并御鞠始等、殿下御參内、

(勅解由小路兼仲)

予參内、明日春宮行啓散狀所申入也、(中略)御車副不被下裝束者、不可參之由申之旨廳

申之、無便宜之間、以勾當内侍、入夜之後奏聞、散狀有叡覽被返下、

親長卿記

文明六年六月卅日、(中略)及夜陰有召、參御前、(註略)鴨社々務職事、(中略)

所詮每事御沙汰之事、如仰違背之所存之間、善惡無答事也、不可及是非之由有仰、祐尙申狀奏聞、有叡覽、被留御前、其後無是非勅答、

禁中日次記

天和三年八月十八日、妙心寺花園院御影有叡覽、

官家問答

叡覽

御書付之通、天子御覽之事、

伏見宮御記録

利三十五 御産部類記

外師記

康和五年正月十六日丙申、今夜子刻、女御

藤原苺子有御産事、男宮、此間蓬壺射山通使如雲、叡感之處、取喻無物云々、御産所左少辨

顯隆朝臣五條北高倉西宅、去年渡御此所、

吉續記

文永四年四月十二日、參内、拜龍顏、昨日序、神妙之由有叡感、喜悅銘肝、

親長卿記

文明九年四月二日、(中略)今日邦諫上人來臨、今度講釋參仕、面目祝着之

由被謝、殊有叡感之間、相當申沙汰祝着之由返答、條々言談之後、被退歸了、

聽長卿記

弘化三年十月十三日乙丑、(關白政通)關白在職、已及廿四年、可有褒賞歟、(中略)仰詞

如左、

在職已及廿四年、輔養之勤勞不要、(卷)殊先帝登霞以來、毗輔訓導、萬端行屆、被竭忠誠、叡

感不淺候、

官家問答

叡感

御書付之通、天子御感ヲ稱申候、

叡感

源平盛衰記 七 康賴造卒都婆事

社司神女御前ノ渚ニ遊覽ス、月ノ出鹽滿ケルニ、ソコハカトモナク浪ニ流ル、モヅクノ中ニ、卒都婆一本見へ來ル、アヤシヤ、何ナル事ニカトテ取上、是ヲ見レバ二首ノ歌ヲ書下ニ康賴法師ト書附タリ、(中略)此事京中ニ披露有ケレバ、既ニ叡聞ニ及ビ、彼卒都婆ヲ召レツ、叡覽有テ、龍眼ヨリ御涙ヲ流サセ給ヒ、(下略)

椿葉記 大かた御成人ましますとも、かやうのくはしき由來をばしろしめすまじ、叡聞にいるゝ人もあるべからず、

永貞卿記 延寶八年正月八日、(短)智恩院宮、一昨日被遷化、今日達叡聞、仍廢朝三日云々、
官家問答 叡聞 天聽 上聞 高聽

叡聞と申は御聞被成候を稱來候、天聽之儀ハ天子之御耳ニ立候事ニ用來候、上聞、高聽之儀ハ、天子ニ限候而之事トハ覺悟不仕候、貴人高位之御衆へハ、末々之ものより尊候而、書狀等ニ書來候事承及候、

願文集 五

二品親王廳 六七日

叡聞

叡算

叡襟

請諷誦事

三寶衆僧御布施

爰弟子、微躬而蒙育子之恩、小量而紹大王之緒、位雖履二品、不得爲朝廷蕃屏、官有黷一途、猶靡弗舊主惠澤、惜哉、叡算蓋久、無到六十有季之春、忌陰早移、茲迎冊二箇回之日、(中略)奉仰諷誦所修如件、敬白、

明應九年十二月十七日 別當從二位行權大納言兼侍從藤原朝臣實隆 奉

本朝文粹

十一 序 丁 惜秋翫殘菊、各分一字、應製、

紀納言

晚秋九月、夜漏三更、聖皇詔於侍臣、令各獻詩、(中略)豈止可惜於俗眼之下、亦知被翫於叡襟之中、

康富記

(實德元) 月次祭并八社奉幣也 文安六年六月十一日庚申、(中略)此日八社奉幣被付行之、(中略)

一、辭別被注折紙、職事下上卿、案見左、(中略)

今年四月十日、十二日大地震、依陰陽之乖道、懼動靜之失經、(中略)皆是政道未足以感衆、人心未能以禱邪之所致也、叡襟無聊、冥助所禱之由、可令載彼社等之辭別、

本朝文集

五十

後三條天皇辭太上尊號書

二十卷記錄

叡念

伏見去十二日詔書、尊號爲太上天皇者、事乖畜懷、義非宿志、馭俗撫民之時、猶慙薄德、扞抱虛閑之日、豈貪崇名、縱有叡念之難違、(之脫カ)蓋陳素意不移、(中略)

延久四年十二月二十四日

實久卿記 弘化三年三月七日壬戌、今夜倚廬渡御也、(中略)次著御御錫紵、(註略)了有叡念之事、

願文集 二 文永七年宸筆御八講第二座宗性前權僧正啓白詞、

叡信

孝行、御願至深、謝德御誠尤切、專神襟於白花之風、凝唯一無二之叡信、染宸筆於黃金之水、寫開三顯一之眞文、

源平盛衰記 二十四 南都合戰同燒失、附胡德樂河南浦樂事、

叡願

聖武天皇、行基菩薩ヲ勅使トシテ、潛ニ伊勢大神宮ニ祈誓申サレシカバ、御託宣ニ、實相眞如ノ日輪ハ、生死長夜ノ闇ヲ照シ、本有常住ノ月輪ハ、無明煩惱ノ雲ヲ掃、(中略)トアリキ、菩薩歡喜ノ涙ニ咽ツ、此由奏シ給シカバ、叡信彌深ク、渴仰益切ニシテ、又宇佐宮ヘ勅使ヲ立ラレテ、同叡願ノ趣ヲ申サレシカバ、八幡大菩薩ノ御體正シク現ジ給、

太平記 二十四 依山門嗷訴、公卿會議事、

同十八日、四箇ノ大寺ニ牒送ス、先興福寺ヘ送ル、其牒狀云、

延曆寺牒 興福寺衙(中略)

貴寺當山合盟、專起先聖明王之叡願、深託尊神靈祇之冥鑑、國之安危、政之要須、莫先於斯、

(中略)

康永四年八月日

叡の語義

說文 叡、深明也、

廣雅疏證 三上 釋詁 叡、(中略)舒也、(中略)舒即今智字也、

三代實錄 一 清和天皇 天安二年十一月十七日甲戌、大納言正三位兼行右近衛大將

鴻恩

民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁、重上疏曰、安仁近瀝情款、伏佇乾照、而還旨冲深、未垂矜許、魂影震迫、無以自厝、臣耆年既及、慮散命隄危、可濫帶衆官、久萃謗議、而鴻恩未答、織効無聞、居常勵己、未能惣辭、

本朝文粹 五 表下 辭左右大臣 爲昭宣公辭右大臣第一表 (菅原道真) 昔贈大相國

鴻慈

臣基經言、(中略)伏願陛下鴻慈、聽臣愚悃、退臣所帶、俾槐路斷贖官之聲、筆門得稅駕之地、不勝至誠、上表以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

貞觀十四年十月十三日

正三位守右大臣兼行左近衛大將藤原朝臣上表

本朝續文粹

五 辭大將

請罷左近衛大將職狀 京極前大相國

實綱朝臣

右臣師實、(中略)伏望洪慈、曲賜允許、早停禁衛之職、將慰悚越之魂、無任慙款屏營之至、臣某、誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

承保二年十月廿七日

關白從一位行左大臣兼左近衛大將皇太弟傳藤原朝臣上表

東大寺續要錄

八 供養編

建久六年三月廿四日己酉、依東大寺供養被行流人

召返、(中略)

大駕

前一日堂莊嚴、大佛殿母屋廂、每間懸彩幡華鬘代等、(中略)當日寅刻、發小音聲、神分、卯刻分送法服、同刻打衆僧集會鐘、僧侶著南門外幄、威儀師支計之、辰刻、大駕臨幸、鸞輿暫留西幔門外、以納言爲院司之者、被申事由、可許之後、入御、(此間亂聲、)

三菅家文草

十 表狀

爲太政大臣重謝年官隨身第三表

臣良房言、(中略)臣雲漢昭回、位望斯極、天顏咫尺、恩寵有餘、臣所以固辭崇賞、亦復一如前表而已、(中略)

尊貴なる事
物の名稱を
する文字を附
する敬語
天類

貞觀十三年四月二十日

太政大臣云云

江吏部集

下 草部

七言、重陽侍宴、同賦菊有延年術、各分一字、應製詩一首、

眞菊今秋獻至尊、延年方術足傳言、一嘗自列長生籍、盈把同遊不老門、酒上吹花嘲雪子、籬東迎月唳雲孫、登高幸仰天顏近、從此翰林欲戴恩、

康富記

嘉吉三年九月廿四日丙子、伏見殿入道親王御所、去夜彼火事剋、潛有渡御于刑部卿

源持經朝臣宅、(中略)右府令昇中門緣給、尹大納言爲直垂之間、乍立地上被申次、即御前二有御參、拜天顏了後、御退出也、

八槐記

延享三年正月三日己亥、參內番不宿侍、拜天顏、此日吉書御覽也、晡時出御於晝

古事談

五 神社佛寺

延喜御時、藏人名失其不參內居家、其母奇問之、藏人云、天氣常不快、

古事談

五 神社佛寺

母云、早可參內、我將祈鞍馬寺云々、藏人參拜主上於大床子御座、

吉續記

文永九年十月十六日、參內、今日議定也、(中略)人々退出、頭中將(吉田經基)予候常御所

御緣、有御雜談事、定藤申諒、閏年重服職事出仕事、嘉承實隆朝臣子時頭出仕有無、所見不分明、可爲何樣哉之由、付予内々伺天氣、早可出仕之由有仰、

天氣

親長卿記 文明四年四月廿七日、(中略)及晚於無名門前有鞠、予先伺天氣、今日後華日也、可蹴鞠之條如何、仰云、鞠之事ハ不可苦云々、

八槐記 明和三年七月十九日丁亥、參内、來月石清水宮放生會、任例可爲公家之御沙

汰哉、申攝政殿候天氣如何、可爲敕會有天氣、奉之命長門守安藝守、仰檢按僧正、

言渡 慶應二年八月三十日、關白殿今朝不參、御示之處、差掛リ候儀有之ニ付、御參之

由、天機御伺、以表使申入、尹宮内大臣殿御參、被伺天氣、

續日本紀 聖武天皇 神龜元年冬十月丁亥朔、治部省奏言、勘檢京及諸國僧尼名籍

(中略)准量格式、合給公驗、不知處分、伏聽天裁、

本朝文粹 四論奏 太政官謹奏

請正月元日七日節會、依舊不停、十六日踏歌、依詔停止、十七日射禮、改月被行事、

菅三品(文時)

夫孝稱要道、明王之化爰施、義貴隨時、聖人之教攸著、(中略)願茲嘉辰、縱其壯觀、臣等謹奉詔、付外施行、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

天曆九年十二月廿五日

天裁

御代始改元記

(國解寫)

(上略)以前條々、言上如件、望請天裁、一々被裁許者、將知憲法之貴矣、直範誠惶誠恐、謹言、

弘化五年二月廿七日

正五位下行攝津守中原朝臣直範

日本書紀

十七繼體天皇

七年夏六月、百濟遣姐彌文貴將軍、洲利即爾將軍、副穗積臣押

山、百濟本記云、委貢五經博士段楊爾、別奏云、伴跋國略奪臣國已汝之地、伏請天恩、判還本

屬

續日本紀

九元正天皇

養老七年夏四月壬寅、大宰府言、日向、大隅、薩摩三國士卒、征討

隼賊、頻遭軍役、兼年穀不登、交迫飢寒、謹案故事、(俗カ)兵役以後、時有飢疫、望降天恩、給復三

年、許之、

本朝文粹

五佛事 奏狀上

請特蒙天恩、被恤給度者四人狀、

大江朝綱

右朝綱一心至誠、三代積勤、(中略)望請蒙天恩、被恤給四人度者、將爲彼四恩法界、(中略)

天曆七年三月日

參議正四位下大江朝臣朝綱上

桂林遺芳抄

給學問料事

第二節 敬語及び書式

第一款 敬語 三

天恩

一、菅氏例

請殊蒙天恩因准先例以男正六位上長清給穀倉院學問料令繼門業狀(中略)

文安三年十月廿一日

從三位行左大辨兼山城權守菅原朝臣益(長)

季連宿禰記

延寶六年五月二十一日庚申今日秘府略卷第八百六十四一卷(古本者不)以伊豫局令指上禁裏御感不斜件書者則被染勅筆可有御寫不可有他見之由以伊豫被仰下了尤天恩之至難盡短筆者也

續日本紀

四十桓武天皇

延曆九年冬十月癸丑(二十一日)

太政官奏言蝦夷千紀久連王誅大軍奮擊餘孽未絕(中略)臣等職參樞要不能默爾敢陳愚管以煩天聽奏可之

三代實錄

十八清和天皇

貞觀十二年五月九日庚申右大臣藤原朝臣氏宗重抗表曰臣

以去月廿七日上表陳請退右大臣降忝大納言之狀(中略)願必垂天聽不堪歎懇忝以陳聞

江談抄

四

今宵奉詔歡無極建禮門前儂蹈人及第

宗岡秋津久住大學不趁時世延喜十七年十一月四日奉試日及第(中略)故老傳云昔有老生拜舞大庭青衫映月白髮戴霜夜行宿衛奇而問之老生無答只詠此句吟詠之趣無知仍召其身參藏人所侍之人驚尋由緒事及天聽問其姓名勒云今日依勅及第文章生秋津

天聽

深感天恩竊拜紫庭也

玉葉

(文治元)

元曆二年四月四日丁巳(中略)余申云生虜等事短慮難及只在叡慮三種寶物

歸來事自戰場歸洛之間事偏爲武士之沙汰公家不可知食歟只不事問無左右奉相具三神可歸洛也其後始可達天聽

禁裏番衆所日記

寶永七年九月廿四日乙卯(中略)近來被擇于吉日日出度御通達之儀可有御沙汰旨以篤親卿具謁言上則委曲達天聽御感悅之旨被仰出之

八槐記

寶曆十二年七月十二日癸酉(統園)主上御病症益盛(中略)午斜關白(近衛內前一條通香廣橋兼忠)前關白(中略)予(中略)召御前有勅言(寶算無賴在位中被慰勸勞)無左右密沾襟醫療無驗頻有御煩悶予診天脈之處既絕

不應

西宮記

十九臨時七

新書有和歌并都序事

當日早旦御湯殿召帷次御覽神寶敷廣筵二枚於石灰壇其北敷圓座一枚爲御座出御殿上五位已下於小板敷下傳取遣之
天覽了返納辛櫃

給行事藏人祿(或不給之給時拜舞)

天脈

天覽

吉續記 文永八年九月十三日、候禁裏貫首羽林實冬、四韻詩并和歌一首、書宿被贈之、祇候御前之間到來、備叡覽、即被和詩歌御詠、予聊書小序贈答、被經天覽、後代之勝躅也、實久卿記 弘化四年八月廿五日壬申、(中略)此日由奉幣發遣也、(中略)內大臣著陣、奏宣命草、天覽了、

天慈

日本書紀

十九 欽明天皇

十四年八月辛卯朔丁酉、百濟遣上部奈率科野、新羅下部固德

汶休帶山等、上表曰、(中略)伏願天慈、速遣前軍後軍、相續來救、(中略)伏願天慈、速遣其代、

以鎮任那、又復海表諸國、甚乏弓馬、自古迄今、受之天皇、以禦強敵、伏願天慈、多賜弓馬、

本朝文粹

五 表下
辭左右大臣

辭右大臣第一表

(菅原道真)
菅原大相國

臣某言、伏奉今月十四日詔旨、以臣任右大臣、仰戴天慈、不知所措、(中略)

昌泰二年二月廿七日

正三位守右大臣兼行右近衛大將菅原朝臣某上表

後醍醐天皇宸翰

坂内義雄氏所藏

有賴卿事、返々不便、一流之衰微、歎而有餘、(中略)當道文書等、敦有相傳之條、勿論敷於事可加天憐者也、

天憐

康富記

寶德元年十一月卅日乙亥、(中略)

康富謹言上、

右歲末年始之拜趨、父子兩三人之朝衣計會仕之間、如去年、自禁裏被下御訪之樣、以便宜内々被進御書者、可畏存者也、(中略)今月者朔旦冬至、兩人參陣之、諸社祭、(中略)出仕申之、既及八箇度者也、如此不絕之拜趨、致粉骨之條、偏奉仰天憐、爭不蒙鴻慈乎、(中略)

寶德元年十一月日

日本書紀

十七 繼體天皇

六年冬十二月、百濟遣使貢調、別表請任那國、(中略)四縣、(中略)

廼以物部大連龜鹿火、宛宣勅使、物部大連方欲發向難波館、宣勅於百濟客、其妻固要曰、(中略)大連報曰、敦示合理、恐背天勅、

天勅

古今著聞集

十八 飲食

寬弘三年三月四日、東三條より一條院に行幸有けり、先家の

賞をおこなはれてのち、御作文、管絃など有けり、又盃酌の興もありけり、(藤原公季)内大臣御盃を奉らる、中納言俊賢卿、御銚子をとる、(藤原道長)左府天盃を給はりて、例のごとくかはらけをうつしてのみて、南階をおりて拜舞ありけり、

天盃

親長卿記

文明四年正月一日、一天泰平、四海靜謐之春也、幸甚々々、申剋許參内、(中略)

次天杓(應)天盃如例、次退出、

八槐記 明和三年六月一日己巳、德川大納言 家基卿、元服、官位宣下被畏申、爲大樹代官前橋侍從朝矩朝臣兼大和守、差副織田侍從信榮朝臣兼對馬守、亞相代官堀川侍從康福兼兵部等、忍侍從正允朝臣兼飛騨守、相伴參內、有種々獻物、於清涼殿西面拜龍顏、賜天盃、

實隆公記 文龜二年六月三日甲辰、(中略)今日南小所、新御所御參、當年、於常御所有一獻、三獻之時、依仰候御酌、此巡天酌也、

七月十二日壬午、今日室町殿御昇進、(中略)事了之後、下官依仰、自女中方參入、候御酌、金銀御盃二也、今度天酌之間、奉御銚子退下、此巡流兩盃伏見殿、室町殿御取替、女中以下、近臣等各如此、

禁裏番衆所日記 延寶二年九月九日、兵部卿、宮内大臣御參、戌刻御祝、天酌、參衆愛宕三位、持言、淳房、

官家問答 天酌テンシヤク

後花園院より始也、(中略)後花園院、臣下ヲ近付可被成ため、天酌始り候と御さ候儀、公家方之記録ニ有之候儀、不承及候事ニ御座候、後花園院之時分ハ、事之外禁中零落、又は亂世之時分故、色々之事も起り候と傳承候、天酌之儀、儲ニ其時代よりとは不傳承候事

天酌

天闕

ニ御座候、

日本書紀

二十敏達天皇

十年春潤二月、蝦夷數千寇於邊境、由是召其魁帥綾糟等、(註略)

詔曰、惟爾蝦夷者、大足彥天皇之世、合殺者斬、應原者赦、今朕遵彼前例、欲誅元惡、於是綾糟等懼然恐懼、乃下泊瀨中流、面三諸岳、漱水而盟曰、臣等蝦夷、自今以後、子子孫孫、(註略)用清明心事奉天闕、臣等若違盟者、天地諸神及天皇靈、絕滅臣種矣、

續日本紀

三十四光仁天皇

寶龜八年夏四月癸卯、(二十二日)渤海使史都蒙等貢方物、奏曰、渤海國王、

始自遠世、供奉不絕、又國使壹萬福歸來、承聞、聖皇新臨天下、不勝歡慶、登時遣獻可大夫司寶少令開國男史都蒙入朝、并戴荷國信、拜奉天闕、

文德實錄

序

臣基經等、(中略)謹詣天闕、奉進以聞、謹序、

白虎通

天地

天者何也、天之爲言、鎮也、居高理下、爲人鎮也、

毛詩注疏

蕩之什

大雅 天降滔德、傳天君、滔慢也、

續日本後紀

七仁明天皇

承和五年十一月辛巳、(二十七日)皇太子、於紫宸殿加元服、(中略)是

日、亦源朝臣融、於內裏冠焉、天皇神筆、敍正四位下、嵯峨太上天皇第八皇子、大原氏所產也、

三代實錄

四十九光孝天皇

仁和二年春正月二日壬午、(藤原基經)太政大臣第一之男時平、於仁壽殿、

神筆

天の語義

始加元服、于時年十六、帝自手取冠、加其首、令主殿助從五位下藤原朝臣末並理鬢、即日授時平正五位下、其告身天皇神筆、書黃紙以賜之、

扶桑略記 三十 承曆三年三月八日丁丑、行幸八省院、奉幣大神宮、勅使參議左

大辨藤原伊房卿、有神筆宣命、

革命 一 論革命議書 清行 昌泰二年

預論革命議

臣清行言、(中略)伏望聖鑒、豫廻神慮、整勵群臣、戒嚴警衛、仁恩塞其邪計、(中略)

昌泰三年十一月廿一日 從五位上行文章博士兼伊勢權介三善宿禰清行

懷風藻 從四位下播磨守大石王一首、年五十七、

五言侍宴應詔一首、

淑氣浮高閣、梅花灼景春、觀瞻留金堤、神澤施羣臣、琴瑟設仙籥、文酒啓水濱、叨奉無限壽、俱頌皇恩均、

本朝文粹

八 序甲 令義解序

野相公

正三位守右大臣兼行左近衛大將臣清原真人夏野等奉勅撰

神慮

神澤

神襟

神功

神の語義

龍顏

臣夏野等言、(中略)猶慮法令製作、文約旨廣、先儒訓註、案據非一、或專守家素、或固拘偏見、不肯由一孔之中、爭欲出二門之表、遂至同聽之獄、生死相半、連案之斷、出入異科、念此辨正、深切神襟、爰使臣等、集數家之雜說、舉一法之定準、

懷風藻 大學博士田邊史百枝一首、

五言春苑應詔一首、

聖情敦汎愛、神功亦難堪、(中略)唐鳳翔臺下、周魚躍水濱、松風韻添詠、梅花薰帶身、琴酒開芳苑、丹墨點英人、適遇上林會、忝壽萬年春、

周易 繫辭上 陰陽不測之謂神、

周易 說卦 神也者、妙萬物而為言者也、

文德實錄 九 天安元年十一月丙辰、(二十三日)不御豐樂院、便於冷然院、命公卿開宴、百寮供張

五節舞態、尙如向龍顏之時、賜祿亦如常、

政事要略 三十 年中行事 御日記云、仁和四年、(中略)十月廿七日云々、(字多天皇)朕博士月

來蒙冤屈、隱居不仕、朕傷之日深、(中略)勅遣使召博士廣相朝臣、即使參入、召於龍顏、勅曰、依不善事、久以隱居、中心悼念、然而事遂歸理、早就本職、勤仕官事、即下階再拜、

吉續記 文永四年八月一日、次參内拜龍顔、内々有舞御覽、

親長卿記 文明四年正月八日、(中略)及晚元長參内、拜龍顔退出、首服之後、未參内之間、借用裝束召進了、勾當内侍申次也、

光榮公記 實永六年六月廿五日、(中略)今日關東使畠山下總守參内、拜龍顔賜天盃、
官家問答 龍顔

帝王之御顔を申候、漢高祖以來稱候故、本朝にては龍顔と申來候事ニ御座候、

三代實錄 二十五年 貞觀十六年三月廿三日壬午、是日、詔於貞觀寺、設大齋會、以賀

道場新成也、(中略)其願文曰、夫貞觀寺者、先皇仁壽之初、今上降誕之日、星垂長男之光、月

有重輪之慶、故太政大臣美濃公、愛龍姿之不免在襁褓、憐鳳德之未得勝衣、與僧正眞雅和

尙私相謀、使念諸佛之加持、修真言之秘密、

太平記 三 後醍醐天皇御没落笠置 附 光嚴院踐祚事

十月二日、六波羅北方常葉駿河守範貞、三千餘騎ニテ路ヲ警固仕テ、主上ヲ宇治ノ平等

院ヘナシ奉ル、(中略)翌日龍駕ヲ廻シテ六波羅ヘナシ進ラセントシケルヲ、(中略)三

日迄、平等院ニ御逗留有テゾ、六波羅ヘハ入セ給ヒケル、

龍姿

龍駕

本朝續文粹

和誦序 初冬扈從行幸、遊覽大井河、應製和誦一首、并序、

從一位行右大臣兼左近衛大將皇太弟傅臣源朝臣師房 上

聖上當令節之蕭索、訪佳境之幽深、(中略)今日良宴、蓋在于斯也、夫鳳輦漸搖、龍旗且進、境

近都城、故無車馬之費、路經山野、故有雉兔之遊、

太平記 二十 義貞牒山門 附 山門返牒事

義貞誠ニ此議、謀濃ニシテ慮遠シ、サラバ牒狀ヲ山門ヘ送ルベシト宣ヘバ、高德兼テ心

ニ草案ヲヤシタリケン、即筆ヲ取テ是ヲ書、其詞云、

正四位上行左近衛中將兼播磨守源朝臣義貞牒延曆寺衙、(中略)

早聞一諸之群議、以遠合虎符、速應三軍之卒伍、而爲搖龍旗、牒送如件、勒之以狀、

延元二年七月日

大戴禮記 五 曾子天圓 鱗蟲之精者曰龍、

廣雅疏證 一上 龍(中略)君也、(中略)龍者、賈子容經篇

三代實錄 二十六 貞觀十六年八月廿日丙子、(中略)是日、僧正眞雅重上表曰、沙

門眞雅言、小僧先上手疏、披露胸衿、照臨之光未廻、肝膽之訴彌切、小僧器與功淺、病隨年深、

龍旗

龍の語義

決之愚心、欲還聖授、而陛下更降鳳詔、借以鴻慈、發其優渥之詞、不許辭退之請、天私雖厚、人謗難逃、如此累年、胡顏於世、

本朝文粹

五表下 (爲貞信公請致仕表)
致仕 表下 同第二表

後江相公

臣忠平言、去正月三日、臨告老之期、上遜職之章、登日中使從四位上行右近衛中將兼內藏權頭丹後權守良峯朝臣義方至、高傳鳳詔而擲地、不許鶴唳之聞天、(中略)

天曆三年三月十六日

太政大臣從一位藤原朝臣上表

玉葉

文治四年二月十四日庚辰、巳刻、棟範來、召簾前謁之、棟範云、追討宣旨持參院、早可下之由有仰、(中略)仍只以口宣所下也、其狀如此、

文治四年二月十四日 宣旨

(義經)源義顯者、文治元年比、忽圖逆節、猥乖憲條、(中略)彼義顯偷赴奥州、肇先日之毀符、稱

當時之勅命、相語邊民、欲企野戰云々、件符者、絆不出從叡襟、自由之結構、武威之所推也、因茲可毀破之由、重下鳳詔畢、(中略)

藏人左衛門權佐平棟範 奉

經國集

十門 楚門 七言、扈從楚釋寺應制一首、太上、天皇、在祚、

皇帝、在東宮、

君王機暇倦夏日、午後尋眞幸龍宮、四五老僧迎鳳輦、形如槁木心恒空、

三代實錄

二十九 清和天皇

貞觀十八年十一月廿九日壬寅、(論成天皇)皇太子自出東宮、駕牛車、詣染

殿院、是日、天皇讓位於皇太子、(中略)皇太子受天子神璽寶劍、御鳳輦、歸於東宮、文武百官扈從如常儀、

伏見天皇宸記

(正德元)

弘安十一年二月十三日戊辰、今夕爲方違行幸西園寺第、(二條關白)

參、令催促奉行職事賴藤、亥刻出南殿、駕鳳輦、內侍、劍侍從、

看聞御記

(本享元)

正長二年八月廿九日、今日本內裏遷幸也、(中略)供奉公卿攝政以下步行、

鳳輦過了、次賢所、御唐、權渡御、

非藏人日記抄

安政二年十一月廿三日、

一、遷幸于新內裏御當日也、

一、曉天御催被仰出、(註略)此後供奉、一同列立、辰二刻半過、出御于中殿代、(註略)御作法之後、於東階上鳳輦乘御、

海人藻芥

輿之事 鳳輦、帝王、乘物、

三代實錄

三十五 陽成天皇

元慶三年五月五日甲午、(中略)是日、右大辨從四位上藤原朝

臣山蔭抗表曰云云、伏願天慈解所帶職、鳳闕之下、休趁走之勤、雲蘿之下、從掃除之役、不許
本朝文粹 六 奏狀中 申官爵付申執 政人

正六位上行民部大丞、大江朝臣朝綱誠惶誠恐謹言、(中略)

朝綱、虎門聚雪、鳳闕戴星、方寸之勤、歲月多積、(中略)

延長二年二月十五日

兵範記

久壽二年四月廿七日癸卯、(藤原賴長)左府有御上表事、丞相、內覽、兵仗、被辭此三事也、(中略)

略)

臣某言、(中略)又改前勅令罷內覽、安閑養性、雖退衛門之風、愚謹竭誠、將拜鳳闕之月、不堪
觀面悚迫之恩、謹上表、以聞、(中略)

久壽二年四月廿七日

從一位行左大臣藤原朝臣上表

後中內記

享保十二年霜月十六日辰、(中略)明從十三日至今朝、鳳闕御神事也、

花園天皇宸記

元弘二年十一月二日戊辰、今日行幸此院、爲神膳御習禮也、申一點

已御幸云々、仍着冠直衣、下袴 如恒參院御方、(中略)先之內侍辨、岐、在妻戶間簾中左右、即鳳輿

昇居中門下、參議左近中將源朝臣有光、進開轡戶、取御劍退候、

後法興院記

文正元年十二月十八日乙卯、(中略)今夜廻立殿行幸也、威儀嚴重云

云、今夜御出之御時鳳輿ニ乗御、於廻立殿近邊、改鳳輿乘御葱花、然而入御廻立殿云々、

說文

鳳、神鳥也、(中略)出於東方君子之國、翱翔四海之外、(中略)見則天下大安寧、

大戴禮記

曾子天圓 羽蟲之精者曰鳳

日本書紀

十二 履中天皇 六年三月壬午朔丙申、天皇玉體不愈、水土弗調、崩于稚櫻宮、

百鍊抄

四 後朱雀天皇 寬德二年正月十六日、讓位於皇太子、依自去年冬玉體不豫也、

太平記

三 後醍醐天皇御沒落笠置 附 光嚴院踐祚事

後ニハ只藤房、季房二人ヨリ外ハ、主上ノ御手ヲ引進ラスル人モナシ、忝モ十善ノ天子、

玉體ヲ田夫野人ノ形ニ替サセ給ヒテ、(下略)

康富記

(寶徳元)文安六年六月十一日庚申、(中略)月次祭、神今食也、此日八社奉幣被付行之、

(中略)

一、辭別被注折紙、職事下上卿、案見左、(中略)

今年四月十日十二日大地震、依陰陽之乖道、懼動靜之失經、猶啓卜筮決稽疑、特就方角

致祈謝肆獻八社、伊勢、松尾、春日、大和、幣奠、將使兆民艾寧、玉體貞固、穩於太山、寶祚恩化、

潤似巨海、宜令作宣命、

實麗卿記 弘化三年二月六日壬辰、今晚寅刻、主上崩御之由承之、(中略)抑頃年玉體被爲渡平安、萬民爲安堵、豈圖哉、常膳乖例、不幾許晏駕給、四海諒闇、誠哀哉、

海人藻芥 玉體(中略) 帝王、太上天皇ニ限テ云フ事也、后宮等ヲバ不可言也、

後奈良天皇聖忌御願文 大阪府 願泉寺所藏

伏惟後奈良院尊靈、高明配天、恩慈蓋世、膺籙受圖、專祖宗之祭祠、寵義富仁、承列聖之丕績、加之終日宴、詩歌群臣各咫尺于玉座、不時奏絃、管伶倫常陪從于丹墀、雍熙之和可知、溫柔之性愈貴、(中略)

天正十七年九月五日

太上天皇方仁敬白

外樣言渡 (元治元) 文久四年七月十八日

此頃形勢ニ付、何時戰爭相發候、毛難計、自然相發候トモ不被爲動玉座候、右爲心得、正親町大納言被申渡由、橋本中納言被演說候、

太平記 一 立后 附 三位殿御局事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公ノ御女、后妃ノ位ニ備テ、弘徽殿ニ入セ給

玉顏

フ、(中略)君ノ御覺モ、定テ類アラジト覺シニ、君恩葉ヨリモ薄カリシカバ、一生空シク玉顏ニ近カセ給ハズ、深宮ノ中ニ向テ、春ノ日ノ暮レ難キ事ヲ歎キ、秋ノ夜ノ長キ恨ニ沈マセ給フ、

太平記 七 後醍醐天皇潛幸船上 附 名和長年舉義兵事

主上其御輿ニメサレ、六條少將忠顯朝臣計ヲ召具シテ、潛ニ御所ヲゾ御出有ケル、此體ニテハ人ノ怪シメ申ベキ上、駕輿丁モ無リケレバ、御輿ヲバ停ラレテ、忝モ十善ノ天子、自ラ玉趾ヲ草鞋ノ塵ニ汚シテ、自ラ泥土ノ地ヲ踏セ給ヒケルコソ淺マシケレ、

玉の語義

說文 玉、石之美、有五德者、潤澤以溫仁之方也、

日本書紀 二 神代下 一書曰、(中略)故天照大神、乃賜天津彥彥火瓊瓊杵尊八坂瓊曲

玉及八咫鏡、草薙劍三種寶物、(中略)因勅皇孫曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚之隆當與天壤無窮者矣、

三代實錄 二 清和天皇 (天安三) 貞觀元年三月十九日乙亥、大僧都傳燈大法師位眞雅抗表曰、

(中略)伏惟、今上陛下、值良因於往劫、續寶祚於今辰、聖仁攸被、無遠而不臻、佛心所加、無幽而不照、

寶祚

本朝文粹

十四 願文下

陽成院四十九日御願文

後江相公

寶算

〔上略〕言其尊儀、娑婆世界十善之主、計其寶算、釋迦如來一年之兄、〔中略〕

天曆三年十一月十八日

別當前大納言源朝臣

椿葉記

後深草院建長五年正月三日、御げんぶくの時も、二日は大雨にて、たう日は

はれたる、そのかれいにもあひかなひ侍れば、御ゆくすゑのきずいもあらはれて、寶算も千とせ保たせ給

八槐記

延享四年五月二日辛卯、行幸于櫻町殿、避皇位可讓太子、〔後醍醐天皇〕返仁親王給日也、天皇

寶算二十八、儲皇春秋七、御母女御舍子、實上藤定子也、

扶桑略記

二十四 醍醐天皇

延長四年十二月十九日壬寅、奉爲太上天法皇、增寶壽、京邊七箇

寺、南京七大寺、修御誦經、

海人藻芥

寶壽 帝王、太上天皇ニ限テ云フ事也、后宮等ヲバ不可言也、

說文 寶珍也、

寶の語義

春秋公羊傳註疏

六 莊公

六年冬、齊人來歸衛寶、〔中略〕註、〔中略〕寶者、玉物之凡

名、

周易

繫辭下

聖人之大寶曰位、

三代實錄

十三 清和天皇

貞觀八年十二月廿六日丁酉、〔中略〕從三位守權大納言兼左

乾照

近衛大將藤原朝臣氏宗上表、辭大將言、〔中略〕伏望乾照特賜寬假、廻授中將藤原朝臣基

經、

本朝續文粹

五 表下 辭大臣

知足院禪定前太相國辭右大臣第三表 敦基朝臣

乾鑿

臣忠實言、〔中略〕伏望陛下曲垂乾鑿、關四門以廣招賢之路、整六典以弭曠官之訕、不勝荷

懼征營之至、謹重奉表、陳讓以聞、〔中略〕

康和四年十月七日

右大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣某上表

本朝續文粹

四 表上 辭關白攝政

辭攝政表 複辭

敦光朝臣

乾慈

臣某言、〔中略〕伏望乾慈、察此匪躬、弭其所職、陛下若華之光新昇、微臣寒松之節未撓、〔中略〕

大治四年七月日

攝政從一位臣藤原朝臣上表

近衛家實上表

京都府 陽明文庫所藏

臣言、〔中略〕伏望乾慈、枉鑒中悃、君恩未酬、何占樂天先生之地、臣節無撓、猶仕就日明聖之朝、唯願淺短之性、將遁惣攝之名、不耐悚越之至、謹重拜表、陳讓以聞、臣誠惶誠恐、頓首々々、

死罪々々謹言、

承久三年閏十月日

攝政從一位臣藤原朝臣上表

續日本後紀

仁明天皇

天長十年九月戊寅(二十五日)天皇幸栗栖野遊獵、右大臣清原真人

夏野在御輿前、勅令著笠、便幸綿子池、令神祇少副從五位下大中臣朝臣磯守、放所調養隼、拂水禽、仙輿臨覽而樂之、日暮還宮、賜扈從者祿、

本朝續文粹

九詩序中

七言暮春侍宴、同賦花樹遶池岸、應製詩一首、以奉爲韻、并序、

贈藤三品(義忠)

仙輿

臣聞、聖曆長久之年、王春沾洗之候、萬國咸寧、四海無事、天子親帥三公九卿、才臣墨客、飫宴于禁闈之水閣、々々者、是洛陽城之蓬萊洞也、暫擬震居、便移仙蹕、以來名花異草之珍奇、朝夕于玄覽之下、

四源平盛衰記

五

山門落書事

西光法師内々申ケルハ、山法師ノ昔ヨリ猥ガハシキ沙汰仕ル事ハ、今ニ始ヌ事ナレ共、(中略)能々御誠有ベシトゾ奏シケル、只今我身ノ亡ンヲモ知ズ、山王權現ノ神慮ニモ憚ラズ、加様ニ申テ、イトゞ宸襟ヲ惱シ奉ル、

天皇居其の他
稱る事物の關す
語を附する文字
敬

宸襟

神皇正統記

(後醍醐天皇)

此君聖運まし／＼しかば、百七十餘年中たえにし一統の天下をし

らせ給ひて、御目の前にて日嗣をさだめさせたまひぬ、功もなく徳もなき輩、世におこりて、四とせあまりがほど宸襟をなやまし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念のすゑむなしく侍りなんや、

實萬公手錄

(弘化三年八月廿九日御沙汰書)

近年異國船時々相見候趣、風説内々被聞食候、(中略)神州之瑕瑾無之様、精精御指揮候而、彌可被安宸襟候、此段宜有御沙汰候事、

三代實錄

四十四陽成天皇

元慶八年二月四日乙未、先是、天皇手書、送呈太政大臣曰、朕近

身病數發、動多疲頓、社稷事重、神器匡守、所願速遜此位焉、宸筆再呈、旨在難忤、

吉續記

宸筆都序事 文永四年五月十二日、參内、今日百日詩御會、滿足之日也、絶句也、詩境春秋富、題中取韻、

(龜山)主上有宸筆都序、先規稀事也、二條大納言權中納言、(中略)予接宴席、先有御連句、百韻、先仙、

康富記

嘉吉三年六月十二日丙申、(中略)是日、清大外史、於禁裏被講申左傳、令終一部功給、被下宸筆御輿書、後日予拜見了、四書五經、周易、加悉被遊終者也云々、

第二節 敬語及び書式

第一款 敬語

宸筆

宸翰

基量卿記 天和二年正月二十九日、今日公卿勅使發遣、宸筆宣命、豐長卿作進云々、
懷風藻 序 巖郎多暇、旋招文學之士、時開置體之遊、當此之際、宸翰垂文、賢臣獻頌、雕
章麗筆、非唯百篇、

无上法院殿御日記

(天和元)延寶九年二月廿六日庚戌、今度嚴有院のたまやのがく、ち

よくがく申上られ、しんかんをそめらるゝ、

官家問答 宸翰 宸筆 勅筆

御書付之通、天子御自筆之事也、

本朝無題詩 行幸 行幸平等院

藤原知房

宸遊

本自城南感緒成、風流勝絕得佳名、勁松傾蓋宸遊處、仙菊擅粧豫宴程、水遇一清沙月影、山
稱萬歲嶺嵐聲、鵲絃鳳管旁調曲、宜矣此時耳目驚、

和長卿記 明應五年九月九日癸丑、及晚回文到來、今日宸遊之催也、勅題九月九日、

三代實錄

清和天皇 貞觀十二年二月十四日丙申、(中略)先是、二品中務卿兼大宰

帥諱光孝天皇親王抗表曰、臣先請愚息改姓爲臣、宸居悠懸、微願未信、竊獨沉吟、心魂罔厝、

代代宸筆御八講願文等記

上公家 東大寺圖書館所藏 治曆元年九月二十五日壬

宸居

宸影

午、公家奉爲先帝(後朱雀)於宸居東對、設四日八座法會、供養御筆金字法華經并白檀釋迦三尊、
示羊記 弘化三年十月廿三日乙亥、宸影御下畫、申殿下之處、御茵紋豎橫相違、可書改
被命了、

本朝文粹

五表下臣 (辭左右大臣) 同第三表

(菅原道長) 菅贈大相國

宸衷

臣某言、(中略)伏望叡覽降臨、宸衷曲鑒、削臣官以全臣福、培臣寵以保臣身、寵渥官崇、皆是
不翅之飛翔也、(中略)

昌泰二年三月廿八日 正三位守右大臣兼行右近衛大將菅原朝臣上表

本朝續文粹

四表上臣 (辭太政大臣) 富家殿第三表

在良朝臣

宸慈

臣忠實言、苦擬方赤之悃誠、頻仰圓紫之明鑒、照膽忘名、縱隔恩輝於秦鏡、納聽有跡、蓋達叡
聽於夏鏡、自二至三、欲罷不能、(中略)伏冀陛下、鑒此微意、罷其儀形、乾照可畏、雖避祿秩於
畫一之蹤、宸慈難酬、將專輔導於通三之德、不任慙懼之至、謹重奉表以聞、(中略)

天永四年四月十四日 攝政太政大臣從一位臣藤原朝臣上表

三代實錄

四十七光孝天皇 (元慶九)仁和元年二月十三日己亥、權僧正法印大和尚位遍照上表曰、

小僧遍照言、(中略)小僧爲陛下之舊臣、陛下昭小僧之宿意、天鑒切漢、何必指河、伏冀陛下

宸潢

降宸潢之洪霈、免僧正之崇班、則開賢路於法務、寂愚慮於禪門、無任慷慨之至、謹奉表陳乞以聞、

宸染

願文集 六 贈皇太后十七回忌
(上略) 加之法華四要品者、丁寧成宸染、懇誠寫妙文、(中略)

永正五年七月廿日

宸藻

和長卿記 明應六年四月四日丙子、宗真和尚禪師號勅書、今日申出御畫畢、(中略)

宸詠

勅書 料紙黃紙如例、以摺子染強紙、清書之也、
勅、靈山心印之老漢、(中略) 前往大德宗真和尚、(中略) 仰本朝無雙之禪教、新製宸藻、加大用三世師號、特賜佛宗大弘禪師、

宸宴

憲臺記 寶曆十年二月十三日、又今度大樹五十賀算、自禁裏被祝和歌、(德川家重) 題寄松、祝宸詠、以下所賜之也、

宸駕

西宮記 十五 臨時三 宸宴事 臨時宸宴之間、忽有勅可給祿者、上卿召出居將仰云々、
古語拾遺 逮于神武天皇東征之年、(中略) 加茂縣主遠祖八咫鳥者、奉導宸駕、顯瑞菟田之徑、

宸の語義

說文 宸、屋宇也、

正字通

寅集 宸、濼人切、音神、(中略) 後人稱帝居曰宸、

吉續記

文永四年四月廿日、參内、自今日於禁裏、被始行不動法御修法、每月御祈也、(吉田經世)

奉行、阿闍梨圓滿院宮、

後法興院記

文正元年三月四日乙亥、季經朝臣持來去年禁裏之兩席之御會懷帟、(近衛政孝) 余書寫了、

基熙公記

貞享四年三月廿一日己亥、(中略) 又今日供奉人々、經閑道歸參之路、昨日

俄中宮與禁裏ノ中垣ヲ破、對屋、下屋等經左道之閑路歸參了、不可說々々々、

日本書紀

十五 顯宗天皇 白髮天皇二年冬十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小

楯、(中略) 乃詣京都、求迎二王、白髮天皇聞憲、咨歎曰、朕無子也、可以為嗣、與大臣大連、定策

禁中、

三代實錄

四十九 光孝天皇 仁和二年九月十二日丁亥、為發遣奉伊勢大神宮幣使、天皇欲

御大極殿、乘輿未出、有人奏聞、畫所犬死、於是、太政大臣及諸公卿議曰、畫所者、在宮門左右

衛門陣之内、若當行神事、諸司有穢、立札於衛門陣、告知事由、不聽出入、為潔禁中也、依此論

禁裏

禁中

之、可謂禁中穢也、

扶桑略記 二十九 後冷泉天皇 永承六年辛卯正月八日、野鹿入禁中、

神皇正統記 後嵯峨かくれさせ給ひてのち、兄弟の御あはひにあらそはせたま

ふ事ありければ、關東より母儀大宮院にたづね申けるに、先院の御素意は(龜山)當今にまし

ますよしを仰つかはされければ、事さだまりて、禁中にて政務せさせ給ふ、

朝彥親王日記 慶應二年九月十四日庚午、禁中ヨリ御使參ル、

續日本紀 十九 孝謙天皇 天平勝寶八歲五月乙亥、(二十一)勅曰、左衛士督從四位下坂上

忌寸犬養、右兵衛率從五位上鴨朝臣虫麻呂、久侍禁掖、深承恩渥、

本朝續文粹 四 表上 辭攝政表 復辭 敦光朝臣

臣某言、(中略)既有選納之承君恩、豈无出入之許禁掖、臣孳々以守爵位、時々欲拜龍顏、臣

之願也、臣之忠也、不勝挹滿之至、(中略)

大治四年七月日 (忠通)攝政從一位臣藤原朝臣上表

鹿苑日錄 二十九 天正十九年五月六日、早晨具威儀赴鹿苑、依禁宸伺候、懺法懈怠、

半齋如常、

禁省

基量卿記 實永五年二月廿四日、今日皇太子始啓禁省供奉之事、大進催觸、

本朝續文粹 五 表下 (藤原教通) 同公辭左大臣皇太子傳表 明衡朝臣

臣教通言、(中略)況乎駕華輦而入禁闈、不異衛鶴之乘軒、裝紫紱而趨朝廷、猶同楚馬之衣

繡、(中略)

康平二年二月六日 (右九)從一位行左大臣兼皇太子傳臣藤原朝臣某上表

正字通 午集下 示部 禁、居慶切、今去聲、(中略)天子所居曰禁、

獨斷 上 禁中者、門戶有禁、非侍御者、不得入、故曰禁中、

西宮記 十五 上表事 其上表之儀、立皇太子皇后、及瑞物賀表、大裏式云、國家有慶事、異恒

所者、即百官詣闕、共上賀表、其儀在南庭、具見式等類、

日本書紀 二十六 齊明天皇 元年冬十月丁酉朔己酉、於小墾田造起宮闕、擬將瓦覆、

毛利慶親上申書案 防長回天史四下 所收

去月十八日之夜、私家來脫走之者、共諸浪士へ相加、闕下近く罷出、及騷擾候趣、不憚朝廷

次第、奉恐入候、(中略)

(元治元年)八月三日 松平大膳大夫

第二節 敬語及び書式 第一款 敬語 四

二四五

禁省

禁闈

禁の語義

闕

宮闕

闕下

勘仲記 正應五年九月七日乙丑、依召倒衣參禁闕、女院御惱之時、自禁裏被行御祈先例等、念可尋之由被仰下、不廻時相尋官外記了、

鹿苑日錄 二十九 天正十九年五月五日、(中略)自陽明殿下有台翰、披而視之、來六

日於禁闕、群書可有拜覽云々、即侍陽明殿下、々々曰、明日齋了、早々可侍楓宸云々、予曰、明日者天山年忌有懺法、然者午時以前可令伺候之由申也、殿下曰、爲勅命被仰出之際、令懺法懈怠、齋了、早々可赴鳳闕者、尤可之由、陽明嚴旨也、予應諾、即歸寺之次、赴西咲禾上、謀此義、尤可云々、

外樣言渡 (元道) 文久四年八月七日

去月十九日、禁闕之下擾亂、有汚穢之恐之間、石清水放生會御延引、

說文 闕門觀也、

古今注 上都邑 闕觀也、(中略)登之則可遠觀、故謂之觀、人臣將至此、則思其所闕、故

謂之闕、

願文集 五 後柏原院七回 御懺法講在之

爰眇身恐以遺愛之質、纔勵追責之情、忽迎七回忌陰、魚山之法音滿紫闕、(中略)

(天文元) 享祿五年四月七日

懷風藻 左大臣正二位長屋王三首、年五十四、

五言、元日宴應詔、

玄圃梅已故、紫庭桃欲新、柳絲入歌曲、蘭香染舞巾、於焉三元節、共悅望雲仁、

江談抄 四 今宵奉詔歡無極、建禮門前儂蹈人、及第、

宗岡秋津、久住大學、不趁時世、延喜十七年十一月四日、奉試日及第、(中略)故老傳云、昔有老生、拜舞大庭、青衫映月、白髮戴霜、夜行、宿衛奇而問之、老生無答、只詠此句、吟詠之趣、無知、仍召其身、參藏人所侍之人、驚尋由緒、事及天聽、問其姓名、勒云、今日依勅及第、文章生秋津、深感天恩、竊拜紫庭也、

本朝麗藻 上 七言、暮春侍宴左丞相東三條第、同賦度水落花舞、應製詩一首、以輕爲韻、并序、

江匡衡

洛城有一形勝、世謂之東三條、(中略)聖上不忘舊里、再備天臨、始廻翠華、一日禮外祖於當時、今准紫禁、二年移朝議於此地、

三代實錄 三十五 元慶三年二月廿九日己丑、(中略)是日、詔曰、朕永鑒前例、遙觀

奎章、追遠之誠、展崇班於咸里、同心之義、光殊寵於渭陽、朕外祖父贈正一位左大臣、象賢積其門慶、鴻緒疊其世烟、紫闕承凝、已膺股肱之寄、黃扉啓沃、終暢喉舌之機、(中略)是用累贈公、爲太政大臣、魂魄不昧、欽茲寵異、

晉書

天志十一

紫宮垣十五星、其西蕃七、東蕃八、在北斗北、一曰紫微、大帝之坐也、

天子之常居也、

太平御覽

六百七十七 闕

五符經曰、鍾山上有金臺七寶紫闕、元氣之所舍、天帝君所治處也、

太平記

二 師賢登山 附 唐崎濱合戰事

尹大納言師賢卿ハ、主上ノ内裏ヲ御出有シ夜、三條河原迄供奉セラレタリシヲ、大塔宮ヨリ様々仰ラレツル仔細アレバ、臨幸ノ由ニテ山門ヘ登リ、衆徒ノ心ヲモ窺、又勢ヲモ附テ、合戰ヲ致セト仰ラレケレバ、師賢、法勝寺ノ前ヨリ衰龍ノ御衣ヲ著テ、瑤輿ニ駕替テ山門ノ西塔院ヘ登リ給フ、

日本紀略

嵯峨天皇

弘仁十一年二月甲戌朔、詔曰、云々、其朕大小諸神事及季冬奉幣諸陵、則用帛衣、元正受朝、則用衰冕十二章、

衰冕

衰龍

紫闕の語義

紫闕

奎章、追遠之誠、展崇班於咸里、同心之義、光殊寵於渭陽、朕外祖父贈正一位左大臣、象賢積其門慶、鴻緒疊其世烟、紫闕承凝、已膺股肱之寄、黃扉啓沃、終暢喉舌之機、(中略)是用累贈公、爲太政大臣、魂魄不昧、欽茲寵異、

晉書

天志十一

紫宮垣十五星、其西蕃七、東蕃八、在北斗北、一曰紫微、大帝之坐也、

天子之常居也、

太平御覽

六百七十七 闕

五符經曰、鍾山上有金臺七寶紫闕、元氣之所舍、天帝君所治處也、

太平記

二 師賢登山 附 唐崎濱合戰事

尹大納言師賢卿ハ、主上ノ内裏ヲ御出有シ夜、三條河原迄供奉セラレタリシヲ、大塔宮ヨリ様々仰ラレツル仔細アレバ、臨幸ノ由ニテ山門ヘ登リ、衆徒ノ心ヲモ窺、又勢ヲモ附テ、合戰ヲ致セト仰ラレケレバ、師賢、法勝寺ノ前ヨリ衰龍ノ御衣ヲ著テ、瑤輿ニ駕替テ山門ノ西塔院ヘ登リ給フ、

日本紀略

嵯峨天皇

弘仁十一年二月甲戌朔、詔曰、云々、其朕大小諸神事及季冬奉幣諸陵、則用帛衣、元正受朝、則用衰冕十二章、

衰冕

衰龍

紫闕の語義

紫闕

衰衣

衰の語義

負辰

丹辰

西宮記

十九 朝拜

天皇服衰冕十二章、御把笏、

太平記

三

後醍醐天皇御没落笠置 附 光嚴院踐祚事

(元弘元年)十月二日、六波羅北方常葉駿河守範貞、三千餘騎ニテ路ヲ警固仕テ、主上ヲ宇治ノ平等院ヘ成シ奉ル、(中略)翌日龍駕ヲ廻シテ、六波羅ヘ成シ進ラセントシケルヲ、前々臨幸ノ儀式ナラデハ、還幸成マジキ由ヲ、強テ仰出サレケル間、力ナク鳳輦ヲ用意シ、衰衣ヲ調進シケル間、三日迄平等院ニ御逗留有テゾ、六波羅ヘハ入セ給ヒケル、

爾雅註疏

二 釋言

衰、蔽也、衰衣有蔽文、

毛詩注疏

十四 風

衰衣繡裳、傳衰衣卷龍也、

日本書紀私記

上

(元正)

清足姬天皇負辰之時、(天武)淨御原天皇之孫日下太子之子也、世號飯高天皇、辰戶驪之間也、負辰者、言以其所處名之、今案天子座之後也、親王及安麻呂等、更撰此日本書紀三十卷并帝王系圖一卷、

三代實錄

序

臣時平等、竊惟、(中略)天皇倦負辰於九重、輕脫屣於萬乘、宸旒應朕擬神默於姑射、淨居有勳、落飾震於魔宮、爾乃時屬揖讓、朝廷務殷、在此際會、暫停刊緝、

願文集

五

後土御門院

爰眇身叨列丹辰之高班、偏恐素庸之登達、寤寐思佐涓濱、豈遺太公羽翼、(中略)

永正七年九月日

兵範記 久壽二年五月三日己酉(藤原賴長)左府第二度上表事(土御門殿)丞相兵仗被辭退兩事(中略)

辭左大臣并兵仗第二度表

臣某言屢獻表章粗述意緒不留玉辰之下空返白屋之中雖觸逆鱗之悚越那染禿毫而重陳(臣某)誠惶誠恐頓首々々死罪々々(中略)

久壽二年五月三日

從一位左大臣藤原朝臣上表

太平記 三 後醍醐天皇御夢附補正成事

元弘元年八月二十七日主上笠置へ臨幸成テ本堂ヲ皇居トナサル(中略)鬢結タル童子二人忽然トシテ來テ主上ノ御前ニ跪キ涙ヲ袖ニ掛テ一天下ノ間ニ暫モ御身ヲ可被隱所ナシ但シアノ樹ノ陰ニ南ニ向ヘル座席アリ是御爲ニ設タル玉辰ニテ候ヘバ暫此ニ御座候ヘト申テ童子ハ遙ノ天ニ騰去スト御覽ジテ御夢ハ頓テ覺ニケリ

本朝無題詩 行幸 行幸平等院

源經信

城南別業富風流翻號與門最有由嚴飾仙壇宜禮敬忽廻鳳辰暫淹留林穿紅葉漁家透嶺入青天鳥路幽非只參差樓閣好山容水態望悠々

鳳辰

玉辰

近衛家實上表

京都府 陽明文庫所藏

臣言(中略)而臣幸以世祿之稟家旁有皇澤之滄涯所歷者山西山東之任也猥踰父祖二代之芳蹤所播者鳳轄鳳辰之榮也久裨聖哲三朝之洪化(中略)

承久三年十一月日

攝政從一位臣藤原朝臣(家實)

一切經音義

二十一 音新譯大方廣佛花嚴經音義上

玉辰(辰依豈反)鄒玄注禮記曰辰屏風也(以爲障蔽)以

於戶闕

論衡

四 書虛篇

戶闕之間曰辰南面之坐位也

三代實錄

四十五 光孝天皇

元慶八年二月五日丙申親王公卿引文武百官奉迎天皇即日

鸞輿入御東宮親王公卿扈從天皇將出宮未御鸞輿之前太政大臣詣宮奉問起居

岡屋關白記

貞永元年十二月五日庚辰是日(四條)天皇即位於太政官廳(中略)天皇還

御後房兵庫頭申云令打退鼓(余宣令打)次堂上侍從等退下頗遲仍余以少外記俊平

密々示告次余經本路退下練步如初(中略)余退下休所脫禮服改著宿衣鸞輿還宮之後

退出

勘仲記 正應四年正月三日壬寅今日爲拜觀之禮(伏見)天皇行幸禪定法皇宮(常盤井殿)於

辰の語義

鸞輿

仙洞扣鸞輿、執柄被申事由、院司公卿中宮大夫復命之後入御、

文華秀麗集

上遊覽

春日侍嵯峨山院、探得廻字應製一首、

清和令製

嵯峨之院埃塵外、乍到幽情興偏催、鳥轉遙聞綠塔壑、花香近得抱窓梅、攢松嶺上風爲雨、絕

澗流中石作雷、地勢幽深光易暮、鸞輿且待莫東廻、

經國集

梵門

（應從梵釋寺應制、一首）

三春上

鸞輿近出王畿外、仙蓋高飛天闕中、合掌凝眸尋鷲嶺、焚香散蓋拜龍宮、

凌雲集 內藏頭從五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守十三首、

雜言、於神泉苑侍講、賦落花篇應製、

三陽二月春云半、雜樹衆花咲且散、鸞駕早來遍歷覽、奇香詭色互留翫、

鸞駕

二平聲二

鸞、盧丸切、鳥名、說文、赤神靈之精、赤鸞、說文、人君乘車、四馬、鑣八、色五彩、雜形、鳴中五音、文二十二、鸞、鸞、象鸞鳥、聲和則敬也、

鸞通作

周禮註疏

三十二大駁

凡馭路儀、以鸞和爲節、註、鸞在衡、和在軾、皆以金爲鈴、

日本書紀

三神武天皇

四年春二月壬戌朔甲申、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕

躬、今諸虜已平、海內無事、可以郊祀天神、用申大孝者也、

詔書

鸞駕の詔書

鸞駕

鸞輿

詔書

日本書紀

十九欽明天皇

四年冬十一月丁亥朔甲午、遣津守連、詔百濟曰、在任那之下韓

百濟郡令城主、宜附日本府、并持詔書、宣曰、爾屢抗表、稱當建任那十餘年矣、表奏如此、

內裏式

下詔書式

內記作詔書畢、或自內裏仰內配令、納篋、令參議以上若內侍進御所、

御晝日訖、置殿上机、上、

平戶記

寬元三年四月廿五日己丑、（中略）今日被下封事詔書云々、左大臣著仗座、召

大內記在宗被仰云々、藤宰相、左大辨、新宰相同著云々、

實久卿記

（弘化元）

天保十五年三月廿七日甲午、（中略）光政朝臣出陣、就右府座下、仰東宮御

元服、任享保十八年例、可作詔書由、

續日本紀

十八孝謙天皇

天平勝寶四年二月己巳、（二十一日）京畿諸國鐵工、銅工、金作、甲作、弓削、矢

作、梓削、鞍作、輶張等之雜戶、依天平十六年二月十三日詔旨、雖蒙改姓、不免本業、

三代實錄

一清和天皇

天安二年十一月十三日庚午、太政官頒下今月七日詔書於京

畿七道諸國云、今稽詔旨、天安二年十一月七日以前、內外未得解由之輩、不論已言上未言

上、准承和例、其身所犯、莫以拘責、但未言上者、後司造會赦帳、前後共署言上、亦如先格、又當

年格、費不可更免者、後年聽復、不如明詔、敢有乖違者、殊處重責、不曾寬恕、又仁壽元年以往、

詔旨

調庸未進言上、在民身者、不明搜檢、早從免除、若徵取已訖、隱爲未進、及言上先訖、更加徵責者、科責如前、並是權時之恩宥、非猾吏之可恃、憤此風迹、不得再然、自餘事條、一依詔旨、

日本書紀 孝德天皇 大化二年二月甲午朔戊申(十五日)、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、

(中略)昔詔曰、諫者題名、而不隨詔命者、自非求利、而將助國、

日本書紀 繼體天皇 二十三年春三月、是月、遣近江毛野臣使于安羅、勸勸新羅、更建

南加羅、噉已吞、百濟遣將軍尹貴、麻那、甲背、麻鹵等、往赴安羅、式聽詔勅、新羅恐破蕃國官

家、不遣大人、而遣夫智奈麻禮、奚奈麻禮等、往赴安羅、式聽詔勅、

禮記註疏 曲禮下 出入有詔於國、注、詔、告也、

史記 秦始皇本紀 二十六年、(中略)命爲制、令爲詔、

日本書紀 神武天皇 戊午年九月甲子朔戊辰(五日)、又使弟猾被箕、爲老嫗貌、而勅

之曰、宜汝二人到天香山、潛取其巔土、而可來旋矣、基業成否、當以汝爲占、努力慎焉、

續日本紀 聖武天皇 天平十六年九月丙戌(二十七日)、勅頒三十二條於巡察使、事具別勅、因勅

曰、凡頃聞諸國郡官人等、不行法令、空置卷中、無畏憲章、擅求利潤、公民歲弊、私門日增、朕之

股肱、豈合如此、(中略)宜告所司、知朕意焉、

詔命

詔勅

詔の語義

勅

勅語

古事記 序 時有舍人、姓稗田、名阿禮、年是廿八、爲人聰明、度目誦口、拂耳勸心、即勅語

阿禮、令誦習帝皇日繼及先代舊辭、

續日本後紀 仁明天皇 承和三年五月庚戌(十二日)、(中略)是日、右近衛中將從四位下藤

原朝臣助衛勅語、向攝津國難波海口、慰勞聘唐使發遣、

玉葉 文治五年十二月六日辛卯、此日太政大臣兼宣旨也、(中略)次勅使權大納言良

經卿昇自中門內方、(中略)余目之、入自妻(藤原兼實)、後副奧方、進來余座前、余又頗居、仰勅語、成

給太政大臣、余奏御返事、

親長卿記 文明三年二月廿五日、未剋許參內、(中略)被召御前、(註略)只常御座所也、

(中略)

賀茂兩社雜務事申之、(中略)次種々有勅語事等、暫言談申入了、

俊明卿記 嘉永二年二月十日、(中略)兩人召御小座敷、有御對面勅語、

日本書紀 雄略天皇 七年是歲、(中略)于時、新羅不事中國、天皇詔田狹臣子弟君、與

吉備海部直赤尾曰、汝宜往罰新羅、於是、西漢才伎、歡因知利在側、乃進而奏曰、巧於奴者多

在韓國、可召而使、天皇詔群臣曰、然則宜以歡因知利、副弟君等、取道於百濟、并下勅書、令獻

勅書

巧者、

續日本紀

文武天皇

慶雲三年春正月(丁亥)金儒吉等還蕃、賜其王勅書曰、天皇敬問

新羅王、使人一吉、金儒吉、薩、金今古等至、所獻調物並具之、

續日本後紀

仁明天皇

承和五年六月(辛丑)勅、天平寶字元年勅書曰、諸學生等、被

任諸國博士并醫師之後、所給公廩一年之分、必應令送本受業師、

扶桑略記

二十九 後冷泉天皇

治曆三年十月七日壬子、還御、寺家加封三百戶、(藤原賴通)前大相國賜

准三宮勅書、年官年爵食邑三千戶、內舍人二人、左右近衛兵衛各六人、爲隨身、資人卅人、如

(藤原良房)忠仁公舊事、

院中番衆所日記

元祿二年正月廿九日、今日從三位宗子催准后宣下勅書草、頭右

大辨賴重朝臣奏之、

續日本紀

十二 聖武天皇

天平九年夏四月(戊午)遣陸奧持節大使從三位藤原朝臣麻呂

等言、以去二月十九日、到陸奧國多賀柵、與鎮守將軍從四位上大野朝臣東人共平章、(中略)

但東人久將邊要、鈔謀不中、加以親臨賊境、察其形勢、深思遠慮、量定如此、謹錄事狀、伏聽勅

裁、

勅裁

勸仲記

永仁二年三月二日癸丑、參內、(庭中)當番、梅宮社司等申長者以隆朝臣追捕狼藉事、

于今稱不蒙勅裁、明日神事難勤仕之由、愁申、依無傳奏、予直奏、於是非者念可被決、明日神

事、先可遂行之由、有勅、定、其趣書賜御教書於職事雅俊許了、其後退出、

親長卿記

文明三年三月十三日、鴨社申關事、依被申武家、被成下知、畏存之由、申、次假

殿造營事、如形可致其沙汰、御奉加物事可被仰付云々、關事可申請勅裁云々、

仰言、關事勅裁不可有相違云々、

光榮公記

寶永七年三月卅日、伯中將へ松尾祭勅裁一通認遣、

日本紀略

花山天皇

寬和元年十一月廿九日己亥、(中略)今日、諸公卿上表、請省除

(藤原胤子)贈皇后六月晦日東寺國忌、勸許云々、

明月記

寬喜三年三月十九日乙巳、祭使侍從雅繼可出立之由、內々勸許云々、所聞競

望之中可然事歟、

親長卿記

文明二年九月廿四日、(中略)故家方遺跡事、忠方幼少之間、致十五歲可勤

其代之由、先年以予被仰付了、今忠方(十二歲)致訴訟、任勅約可被止訴訟之由、職業申之、奏

聞、勸許、遣青侍奉書、

勸許

俊明卿記 嘉永元年五月十一日、若州御用談被申述、(中略)

道幹様御法號之儀、(中略)此度御贈官位被爲在候折柄、御院號之儀モ勅許ニテ相立候へハ、彌御尊崇之御主意モ相立、以來御呼モ正數相成候間、勅號之儀被仰進度卜之御事候、

官家問答 勅許

官位已下諸事願申儀、相叶候事ヲ申候、

日本書紀 繼體天皇 二十三年春三月、是月、遣物部伊勢連父根、吉士老等、以津賜百

勅使

濟王、於是加羅王謂勅使云、此津從置官家以來、爲臣朝貢津涉、安得輒改賜隣國、遠元所封限地、勅使父根等、因斯難以面賜、却還大嶋、別遣錄史、果賜扶余、

續日本紀 聖武天皇 天平十二年冬十月壬戌、詔大將軍東人、令祈請八幡神焉、大將

軍東人等言、逆賊藤原廣嗣率衆一万許騎、到板櫃河、廣嗣親自率隼人軍爲前鋒、即編木爲船、將渡河、于時佐伯宿禰常人、安倍朝臣虫麻呂、發弩射之、(中略)良久廣嗣乘馬出來云、承勅使到來、其勅使者爲誰、常人等答云、勅使衛門督佐伯大夫、式部少輔安倍大夫、今在此間者、廣嗣云、而今知勅使、即下馬、兩段再拜申云、廣嗣不敢捍朝命、但請朝廷亂人二人耳、

內裏式

七日會式

若有蕃客者、前一日、所司整設御座如常、(中略)勅使及客座、於承歡堂、(中略)當承歡堂北第三階置勅使宣命位、自勅使位南去二丈五尺、更西折二丈、置通事承宣位、(中略)宣命拜舞如常、群臣各着座、訖、勅使通事引客徒列庭中位如初儀、

禁祕御抄

賢上所

寬弘燒亡、始雖燒無闕損、有諸道勘文、公卿勅使始有宸筆宣命、于時殿中光耀、知御體不變、

親長卿記

文明四年八月十七日、今日有多田廟所

源滿仲朝臣、贈位宣下、并親王宣下

等事、贈位事、去月十日可申沙汰之由、可仰元長云々、先書仰詞、(中略)

抑參向廟所勅使事、少納言多分之例也、

基量卿記

天和二年正月二十九日、今日公卿勅使發遣、宸筆宣命、豐長卿作進云々、

扶桑略記

三十一

堀河天皇

寬治二年三月一日戊申、辰刻出御、別當法印慶信賜花鬘一疋、

貴賤改衣、相挑美色、或每日改之、文繡爲表、錦綺爲裡、天下花美無物于喻、午刻御宇治、先是、攝政於大僧正泉房儲饗饌、奉待上皇、依有御燈事不御寺中也、未刻到九條大路、著御本院、參議右大辨藤原朝臣通俊奉勅命粗實錄矣、

兵範記

久壽二年五月十日丙辰、左府第三度上表事、被固辭丞相也、(中略)

勅命

臣某言、(中略)臣受瑣簪之小量、無纖芥之微功、丁壯而超耆老、愚昧而裨皇猷、天子之惠露、曲覃、忝相位於台階之左、雲母之屏風爰在、揖賢俊於朝座之傍、非次之榮、肌慄心悸、欲避之、思日久歲、廻而見勅命之趣、垂溫諭之詞、在強健好謙讓、如臣之者所未聞也、(中略)

久壽二年五月十日

從一位左大臣臣藤原朝臣 上表

吉續記 文永九年十月十五日、參内、前右府、内府被祇候、職事等奏事、兩相府被傳奏、暫可祇候有勅命之間、及夜祇候、依召參常御所、

明月記 寬喜三年正月廿七日甲寅、(中略)隨基氏朝臣昇進如水火申之、叡慮又懇切之餘、可敍三位之議出來、其事又以不穩、仍難抑留參議昇進、但所鬪兩虎共以噉々、兩人相並可任由、又上御本意也、且猶可相待之由被仰舍了、非此兩人第一參議、得此時被參上、欺、只可隨勅定由所存也、

太平記 二 三人僧徒下向關東 附 被配流事

文觀房、暫カ程ハ如何ニ問レケレトモ、落給ハサリケルカ、推問重ナリケレハ、身モ疲レ心モ弱クナリケルニヤ、勅定ニ依テ調伏ノ法行タリシ條、子細ナント白狀セラレケリ、
紀光卿記 寶曆十二年七月二十日辛巳、自關白殿被仰云、主上御違例、於有御變事者、

(中略) 一品智子内親王(註略)可有御在位旨、此日有勅定云々、

村井政禮手錄 文久三年七月二十五日、監察使へ差出、

此度御下向ニ付、中納言早速御出會、勅詔御受可相成之處、所勞ニ付、勅詔之趣、御内々奉伺候處、(中略)

七月廿五日

鈴村三之右衛門

吉續記 文永五年六月廿三日、參内、堀川宰相祇候、大内山陵所事、去夜以頭中將、勅問殿、一條前殿、然而未被勘出、欺、

尙忠公記 弘化三年二月五日、(中略)殿下申云、過日踐祚以下之事、關東勅問之處、(中略)若狹守參進大樹公勅答申述ト云々、

官家問答 勅問

天子より臣下へ御尋之義を申候、

續日本後紀 五 仁明天皇 承和三年五月甲子、皇太子入朝、問安而退、中使出傳勅答、

兵範記 保元三年四月一日庚寅、今日二孟旬儀也、辰刻參内、(中略)午刻主上出御南殿、(中略)次關司進左掖門、少納言通能令持内案杖於史生、傳授關司、關司着版奏、天子勅

勅定

勅詔

勅問

勅答

答自南階參上、内案留御前、關司以空杖立南簀子、天覽了、勅答、次關司退下、着版稱唯、退入、
親長卿記 長享元年十一月十六日、(中略)次午剋許、同道右大辨、向德大寺、暫二樂院、
姉小路等來、有朝飯、此間自内裏有女房奉書、

ふんち丸げんふくを、この月にさせ候べき、ひくら人のぶんにまいらせ候はんすると、
たかつじ申候かといつる事にて候か、(中略)

勅答自是可申入之由申了、

尙忠公記 弘化三年二月五日、亥半刻頃參内、(中略)德大寺大納言、(鑑司政通)殿下依命小御所

へ可參之旨誘引、尤予内府計也、殿下申云、過日踐祚以下之事、關東勅問之處、唯今返答之、
由、酒井若狹守參内、就夫如先例立合著座之事、御沙汰也、須與德大寺大納言、坊城前大納
言、若州誘引小御所下段敷居之内、若狹守參進、(徳川家慶)大樹公勅答申述ト云々、而後自懷中口演
書切紙、傳奏迄被差出、殿下落手畢、若州退去、兩卿共同斷退散、

二條家日記 慶應二年九月八日、(中略)關白殿、御所勞難被爲堪ニ付、御辭職之儀、
(二條齊敬)過日被仰上候處、即日勅答、被召留之、

官家問答 勅答

御書付之通、勅問有之儀を返答申上候儀を申候、又ハ此方より申上候を、天子御答被遊
候事ヲ申候、

平家物語 長十門本 文覺兵衛佐殿始對面事

其後文覺又來ければ對面して、(中略)それは殿天下を打平げて、朝てき平氏の一門を
亡し給はんする事、うたがひ有べからずとぞ申ける、將又勅問申ゆるし奉らん事安じ
たべ、京へ上て院宣申て奉らん、其身勅問の身にておはします、やは叶ひ給ふべきとあ
れば、(下略)

守光公記 東洋文庫所藏 永正十一年三月十二日乙亥、(中略)午時令參内、勸黃、余

於長橋妻應祐、泰荐言上云、三宮御方御戒師之事、(中略)所詮竹内先門主有勅免、御戒師
事可有沙汰歟之由、各申入之由言上、則於御學問所、此旨令奏聞處、各所申如何、兩人之内
一人勘忍之儀、可有申沙汰歟之由被思食處、竹裏先門主勅免之事如何哉、此事先代ヨリ
勅問、于今無正體旨問、不及是非、重而被仰出之由勅答也、

官家問答 勅問

天子之御勘氣を蒙り候を申候、

勅免

公條公記 永正十一年三月十五日、昨日三宮御方御戒師之事、竹内良良、僧正、一昨日勅免之上、門跡中取申之、然間可被存此旨之由、申遣定法寺了、即被申御請、

外樣言渡 （元首元） 文久四年正月十日

元勸修寺 濟範

多年謹慎、今度一橋中納言以下、段々建言之次第モ有之、誠難被默止之間、以格別之思召、御咎被勅免、伏見家江復系被仰出候事、

官家問答 勅免、恩免

御書付之通、御赦免之事なり、恩免 天子ニ限候事ニても無之事ニ候、

明月記 寬喜三年三月廿四日庚戌、下人云、昨日一日馳上、自山崎一身入京云々、盜賊

勅喚

公行之道、甚不便事歟、勅喚之趣不知何事、

親長卿記 文明七年二月九日、（中略）參内、直衣、召具元長、東帶、祇候人々、（中略）

有五十首續歌、有披講、々師元長、讀師室町殿、（足利義政）

元長講師事、俄被仰下、其身不堪未練、但應勅喚之條、面目至也、

古事談

一 王道后宮 後三條院、（中略）升ヲ召寄テ、取廻々々御覽ジテ、簾ヲ折テ寸法

ナドサ、セ給ケリ、米ヲバ穀倉院ヨリ召寄テ、於殿上小庭、貫首以下藏人、出納ナド見沙

勅封

汰シテ、小舍人タマダスキシテハカリケリ、本米ヲバ加美屋紙ニ裹テ、モテマキリタリケレバ、觀覽アリテ、被加勅封テゾ、御持僧ノ許ナドヘハツカハサレケル、

東寺執行日記 一、九月十日、（應永十三年）北山殿當寺入御、以西院談義所爲御座所、寶藏御舍利

御奉請、（中略）開勅封被付私ノ御封事、今度始也云々、

葉室賴業記 寬文六年三月一日、東大寺三庫依開庫、勅封三枚被出、

基量卿記 延寶五年十月十五日、今日於泉涌寺、勅會有御法事、新廣義門、院百ヶ日、

吉續記 文永五年七月二日、參内、院、（近衛基平）殿下明日神泉御讀經定、上卿宰相辨散狀内覽奏

聞、未斜程小雨降、及雷鳴、神泉掃除、自昨日被行、勅使藏人長清歸參内、念可參之由有召、此間祇候仙洞、小雨片時降、然而勅使歸參可賜勅祿歟、

資堯朝臣記 寶永七年四月十四日、賀茂祭也、（中略）依諒閣被止物音、東遊等、又無

勸盃、不賜勅祿、

明月記 天福元年八月十五日丁亥、（中略）昨日依中納言入道範朝卿招請向岡前、故

輔三位（從三位）家光、十三年忌日、聖覺法印說法、其次謁督典侍、佐渡（賴朝上皇）聞食勅撰、由若奉載彼御製者、

相構不止計略、可示合由、有御氣色云々、尤可然事也、

勅撰

勅祿

勅會

示羊記 嘉永元年八月廿八日己巳、今年家康公父廣忠卿年回之間、院號勅撰之事大(德川家慶)
樹被願申、

親長卿記 文明八年二月廿六日、多武峯申勅額事、一、大多武峯、大明神、御出來之間、可(二條政綱)
進關白之由、被下女房奉書、即申關白了、

勅額
勅の語義

說文解字 第三篇下 敕、誠也、

後漢書 一上 光武皇帝 建武元年九月辛未、詔曰、漢制度曰、帝之下書有四、一曰策、

三代實錄 序 今之所撰、務歸簡正、君舉必書、綸言遐布、五禮沿革、萬機變通、祥瑞天之

所祚於人主、災異天之所誅於人主、理燭方策、撮而悉載之、

花園天皇宸記 元亨四年九月十九日、(中略)後聞、今日所誅、土岐十郎五郎賴有、田

地味 某 國長二人云々、

後日或語云、土岐左近藏人賴員、去十六日俄上洛、向齋藤某俊幸宿所告云、去比、田地味、

、國長(伯耆前司、賴員外戚之親族云々)、語賴員曰、資朝卿云、關東執政不可然、又運已似衰、朝威太盛、豈可

敵乎、仍可被誅之由承綸言、或直承御旨、或資朝傳勅語云々、賴員可同心云々、

康富記 文安六年二月十六日丁卯、(中略)是夜被行小除目者也、殿大納言殿、(實德元) 教、房令

綸言

任左大將給、去年二月洞院內大臣(實德元)、御辭退以後、至今爲闕、其故者、右大將實量卿可轉
左之由、頻被申之、一條殿御申、攝家拜任之時、不依位次、必可任左之條、(藤原良房) 忠仁公以來定儀也、
關左之闕、任右之條、更無其例、但應永兩度儀不足爲例之由、堅被申之、雖然右大將可轉左
之由事、已有勅約、不可有御變改之由被仰出、且綸言如汗、此條爲向後被痛思食之由、被仰
出之間、(下略)

三代實錄 三十三 陽成天皇 元慶二年正月三日己亥、左大臣正二位源朝臣融、重上表言、中

使從四位上行右近衛權中將、在原朝臣業平、奉傳綸旨、却臣表章、實致精誠、伏仰天從、不意
斯言應乖、叡思、臣早蒙聖矜、許守涯分、(中略)伏望、特降玄鑒、重合聖慈、不留綸命、使下臣請、
不勝驚懼切迫之至、謹再奉表、陳請以聞、

新古今和歌集 序 延喜有古今集、四人含綸命而成之、天曆有後撰集、五人奉綸言

而成之、

康富記 寶德元年十一月廿七日壬申、(中略)

謹上 春日兩惣官御中

南都傳奏、高里小路前內大臣家御奉書、
春日祭外記、史前勸盃役人進退事、不敘用度、嚴制末座權官所役氏人、猶申子細云々、今

綸命

內裏式

下 敍內親王以下式

皇帝未御紫宸殿之前、掃部寮立漆案於南廂、當御座、皇帝既御也、內侍置位記筥於大臣之座前、

凌雲集

內藏頭從五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守十三首、(中略)

奉和傷右衛大將軍故宿禰御製

蠢爾蝦夷不息亂、羽書力斗月夜傳、(中略)天子哀傷下神筆、悠悠功德日月懸、魂貴儻君無所味、應載殊寵照重泉、

伏見天皇宸記

正應二年正月十七日丁酉、今夜召王卿侍臣等令賦詩、題云、鶯是萬

春友、以心爲韻、絕句、兼倫卿所出也、文人、內大臣、權大納言藤原朝臣、家教、(中略)召信經令講詩、讀師權大納言藤原朝臣、御製講師在兼朝臣、讀師內大臣、文人等立座之後、哥仙題以詩通用之替着座、

親長卿記

文明四年正月四日、巳刻許、召具元長參內、(中略)被下一首勅題、初春各詠

獻之、有披講、(中略)自講師次第讀之、御製五反也、其外女中歌等一反也、

官家問答

御製

御書付之通、詩歌之御作ヲ申候事ニ御座候、

御衣

三代實錄

三 清和天皇

貞觀元年十一月十七日戊辰、(中略)是夜、天皇留御豐樂殿後房、文武百官侍宿、親王已下參議已上、侍御在所、琴歌神宴、終夜歡樂、賜御衣、

東寺百合文書

ろ

(慶安五年紫宸殿後七日御修法贈僧事裏書)今年壬辰春正月、後七日之法、攀先達之遺例、候紫宸殿、八日開

端、始修行大法、到申刻、小槻宿禰重房令席末之僧了深律師、以奉安御衣於道場、中日之晝、勅使奉行職事資熙來述賀儀、被示天意、厚預恩惠、拜登珍品之賜、

日本紀略

四 融天皇

天延三年十月一日己亥、旬、天皇出御南殿、有音樂、

玉藻

承元四年十二月廿八日癸卯、此日、(順德)天皇即位于太政官廳、(中略)辰時出御南殿、

黃檳染縫袍

親長卿記

文明八年正月二日、(中略)今夜節分也、有御方違行幸、東方、室町殿十二月

間有行幸、內々出御、近臣等供奉、元長參仕云々、

續日本紀

十八 孝謙天皇

天平勝寶四年夏四月乙酉、(九日)盧舍那大佛像成、始開眼、是日行幸

東大寺、(中略)是夕、天皇還御大納言藤原朝臣仲麻呂田村第、以爲御在所、

儀式

四 踐祚大嘗祭儀下

辰日、卯一刻、宸儀還御廻立殿、一如初儀、易御服還御本宮、警蹕侍衛如常、

還御

出御

百鍊抄 後十七 正元元年八月卅日辛丑、主上自五條殿還御富小路殿、

實久卿記 弘化四年九月十五日辛卯、今日還御于常御所、

續日本紀 十七 聖武天皇 天平勝寶元年閏五月丙辰(二十三)、天皇遷御藥師寺宮、爲御在所、

內裏式 元上 元正受群臣朝賀式 皇帝受群臣賀、訖遷御豐樂殿、饗宴侍臣、

中右記 (永德元) 永長二年九月廿三日癸酉(中略)、今夕從皇居閑院有行幸關白(藤原師通)二條亭、是來

月爲可有遷御高陽院、依令避王相方忌御也、

續日本紀 十八 天平勝寶二年二月戊辰(九)、天皇從大郡宮、移御藥師寺宮、

三代實錄 四十九 仁孝天皇 仁和二年正月廿日庚子(藤原基經)、太政大臣獻物、飯六十櫃、酒六十缶、魚

六十缶、菜六十缶、納衣物韓櫃廿合、置陳於仁壽殿東庭、供御器物、金銀華美、絲竹備奏、

儀式 五 讓國儀 次少納言一人、率大舍人闌司等、持鈴印鑰等、進於今上御所、次近衛少

將、率近衛等、持供御雜器進同所、訖今上御春宮坊、

官家問答 禁裏院中、供御之異名、

供御 御飯ヲ申候計ニても無之候、すへて御膳部シ之外にても、御手まはりの御調度チキツドヲ

供御と申候事ニ御さ候、

遷御

移御

供御

御所

御の語義

儀式 五 讓國儀 次少納言一人、率大舍人闌司等、持鈴印鑰等、進於今上御所、

內裏式 下 詔書式 內記作詔書畢、(註略)納筥、令參議以上若內侍進御所、御晝日訖、置

殿上机上、

獨斷 上 漢天子、(中略)所進曰御、(中略)

御者進也、凡衣服加於身、飲食入於口、妃妾接於寢、皆曰御、

岩倉公實記 下

(明治十四年) 七月六日、具視(中略)憲法ノ制定ニ關シテ意見ヲ書シ、三條實美、熾仁親王ニ託シテ、

以テ之ヲ奏覽セント請フ、其文ニ曰ク、(中略)

別紙

憲法起草可被仰出候ニ付、先ツ大綱領數件聖斷被爲在、其他ノ條目ハ此主旨ニ據リ起

草可致旨、御沙汰被爲可然ト存候事、

大綱領

一、欽定憲法之體裁可被爲在可然ト存候事、(中略)

具視又憲法ノ制定ニ關スル大綱領ニ就キ、詳ニ其旨趣ヲ書シ、之ヲ實美、熾仁親王ニ示

欽定

シ、以テ其參考ニ供ス、其文ニ曰ク、(中略)

綱領

一、欽定憲法之體裁ヲ被用事、

欽定國約之差別ハ、別紙ヲ以テ具陳スヘシ、(中略)

明治十四年七月

欽定憲法考

(上略)而ルニ欽定憲法ノ主義ハ、勅命ヲ以テ人民ニ權利ヲ授與スト云フニ在リ、此レ

國約憲法ト同シカラサル所以ナリ、

法規分類大全 一 政體門三 詔敕式

伊達宗城へ勅 四年五月十五日

從二位行大藏卿藤原朝臣宗城

欽差

我國清國ト壤土隣ヲ爲ス宜ク親交往來スヘシ爰ニ爾宗城ヲ以テ欽差大臣ト爲シ清國ニ行キ隣好ヲ修メ條約ヲ訂メ委スルニ全權ヲ以テシ便宜事ヲ行ハシム爾宗城其能ク兩國ノ好ヲ成シ以テ朕カ望ニ副ヘヨ

明治四年辛未五月十五日

御 璽

爾雅註疏 一 釋詁 欽(中略)敬也、

正字通 辰集下 欠部 欽、渠京切、音卿、恭也、(中略)又御音 欽、曰欽、勅、御使曰欽、命、俗曰欽差、

日本書紀 崇神天皇 七年秋八月癸卯朔己酉、(中略)天皇即親臨于神淺茅原、會諸

王卿及八十諸部、而問大田田根子曰、汝其誰子、對曰、父曰大物主大神、母曰活玉依媛、陶津

耳之女、

續日本紀 聖武天皇 天平十六年十一月壬申、(十三日)甲賀寺始建盧舍那佛像體骨柱、天皇

親臨、手引其繩、

類聚國史 十一 神祇部十一 桓武天皇延曆十六年六月壬申、(十八日)遣使奉幣畿内七道

諸國名神、皇帝於南庭親臨發焉、以祈萬國安寧也、

大日本史 二 本紀二 十二年壬午秋七月、熊襲叛、八月十五日己酉、車駕親征、

外樣言渡 文久三年八月十八日、夷狄御親征之儀、未其機會ニ無之、叡慮候處、矯宸衷

御沙汰之趣施行ニ相成候段、全思食ニ不被爲有候、

欽の語義

親臨

親征

親の語義

崇敬の意を
含まずして
天皇に關し
て用ひらる
敬語
降誕

禮記註疏

文王世子

世子親齊、玄而養、注、親猶自也。

三代實錄

八 清和天皇

貞觀六年二月廿五日壬午、車駕幸於太政大臣東京染殿第、觀

櫻花、累路駐蹕於一條第、即是帝降誕之處也。

民經記

寬喜三年二月十二日己巳、(中略)巳刻、皇子降誕之由風聞、

實麗卿記

慶應二年十二月廿九日甲寅、(中略)今日辰刻、主上崩御之由、實陳、被觸、

(中略)天皇春秋三十六、御諱統仁、仁孝天皇第四皇子、養母新朔平門院、皇子、實母新待賢

門院、雅子、實光、女、天保二年辛卯六月十四日降誕、

官家問答

降誕

天子御誕生之儀、ヲ降誕と書付來候、天上より天孫降臨之事より起候て、天子之御誕生

ヲ降誕と申傳候、御子達ヲすへて降誕と申儀ハ覺悟不仕候、

日本書紀

四 綏靖天皇

三十三年夏五月、天皇不豫、癸酉崩、時年八十四、

扶桑略記

二十八 後朱雀天皇

長久五年十月廿七日、公家被行萬僧供、由院御惱也、

自十二月廿日、天皇不豫、

百鍊抄

十四 四條院

仁治三年正月七日庚寅、主上御不豫之間、節會無出御、昨日於渡殿、

不豫

聊御顛倒云々、

康富記

應永廿五年七月十二日、主上御不豫、五山御祈禱被仰付事、

廿八日、禁裏御惱御本復、天下大慶事、

御湯殿上日記

寶曆十二年七月廿日、御不豫御大せつに付、若御異變にも及候は

ば、直に親王御方へ踐祚の御沙汰あらせられ候はんながら、未御幼稚に候故、(後櫻町天皇)緋宮御方

踐祚、親王御方御十歳ばかりにならせられ候まで、御在位あらせられ候様に、叡意御治

定のよし仰出さるゝ、

海人藻芥 不豫 帝王之病患也、

續日本紀

十七 聖武天皇

天平勝寶元年閏五月癸卯、詔、朕以寡薄、恭承寶祚、(中略)此者、

時屬炎蒸、寢膳乖豫、

三代實錄

二十六 清和天皇

貞觀十六年八月廿日丙子、天皇聖體乖豫、遣使於賀茂御祖、別

雷兩社、奉幣祈禱、

三代實錄

三十四 陽成天皇

元慶二年十一月十六日丁未、先是、去年天皇聖體違豫、右大臣

齋戒肅祇、禱翌日之瘳、

違豫

乖豫

崩

日本書紀三 神武天皇 七十有六年春三月甲午朔甲辰(十一日)天皇崩于樞原宮時年一百廿七歲

文德實錄十 天安二年八月乙卯(二十七)帝崩於新成殿

西宮記八 東宮行啓 寬平九年正月御記云(字多天皇)大丞相奏云々昔臣父有名劍世傳壺斬但有二名(文德)田邑天皇喚伴劍資陰陽師即為厭法埋土于時帝崩陰陽師逃亡是見鬼者也

台記 久壽二年七月七日壬子或人曰今日法皇幸法勝寺(鳥羽)主上御惱無滅(近衛)

廿三日戊辰天子崩年十七

崩御

滿濟准后日記 正長元年七月廿日今曉卯終(爾光)主上崩御御歲廿皇子一人无御座

珍事々々崩御在所黑戶也於彼殿者可被造替歟云々

忠利宿禰記 承應三年九月廿六日癸丑新坂掛川之間少內記定慶馳寄示云去廿日(後光明)主上崩御之由有聞云々

晏駕

續日本後紀序 臣良房等竊惟史官記事帝王之跡攢興(藤原)(中略)筆削之初宮車晏駕白雲之馭不返蒼梧之望已遙(文德天皇)

實麗卿記 弘化三年二月六日壬辰今曉寅刻(仁孝)主上崩御之由承之更驚歎絕言語又々

愁淚絞袖抑頃年玉體被為渡平安萬民為安堵豈圖哉常膳乖例不幾許晏駕給四海諒聞誠哀哉

海人藻芥 晏駕 帝王ノ崩御也

新撰姓氏錄序 皇統彌照聖明生而叡哲自體性仁(中略)迺降絲綸撰勘本系湘帙未畢鳳輿登遐

登遐

三代實錄四十六 光孝天皇 元慶八年九月十日丁卯權僧正法印大和尚位遍照奏言雲林

院者故無品常康親王之舊居也親王出家為沙門貞觀十一年二月十六日以此院付囑遍照曰(仁明)深草天皇賜此居之天皇登遐常康落髮昊天罔極德猶難報思欲永為精舍令學天台之教

文德實錄四 仁壽二年二月乙巳(八日)參議正四位下行宮內卿兼相摸守滋野朝臣貞主

卒貞主者右京人也(中略)嘉祥二年春兼尾張守于時大宰府吏多不良衰弊日甚貞主上表曰(中略)又聞少貳從五位下小野朝臣恒柯筑前守從五位下紀朝臣今守有意執論無力矯枉未審虛實唯得耳剽臣不勝血誠伏觸逆鱗言詞切直默止不省

古事談王道后宮 白河院金泥一切經於法勝寺可被供養臨期依甚雨延引三ヶ度

逆鱗

也、被遂供養日、猶降雨、因之有逆鱗、雨ヲ物ニ請入テ、被置獄舍云々、

親長卿記 文明七年十月六日、依召參内、貞久縣主與今參局、相論新保庄事、於叡慮者、今參局理運之由、被思召也、但貞久歎申間、於知行分者、不被召放也、所詮每年二千疋分可加扶持云々、(中略)仍件子細仰貞久處、猶不可叶、只千疋可扶持之由、重歎申、奏聞之處、有逆鱗、於貞久御師職被召放也、

基量卿記 (天和元) 延寶九年五月一日、傳聞、(中略)一宮御出家之儀、非御本意、勿論繼體之儀、雖無御所存、法中之儀、御難義之由、達而被辭申云々、依之(無元)主上逆鱗以外云々、

海人藻芥 逆鱗者、帝王ニ限テ云事ナリ、腹立ハ尋常人ノ事也、

日本書紀 垂仁天皇 三十四年春三月乙丑朔丙寅、天皇幸山背、

內裏式 中 十一月新嘗會式 中務置宣命位於尋常位北一許丈、既而車駕幸豐樂院、諸衛服中儀服、(註略)皇帝御豐樂殿、

續日本紀 文武天皇 慶雲三年九月丙寅、行幸難波、

小右記 正曆四年正月三日壬辰、巳時參内、依行幸也、今朝召使來告、子時乘輿經承明、建禮、大白在南、出御自南門、陽明等門、臨幸東三條院、御坐土、爲奇也、可被用東敷、

幸

行幸

民經記 嘉祿二年十一月九日庚申、(中略)次申刻許、中納言殿令著束帶給、(日野重光)同束帶、令參内給、依平野臨時祭宣命上卿也、(中略)主上行幸殿上々戶下、令見物給、殿上光資作法、

大乘院日記目錄 二 寬正五年七月十六日、主上行幸仙洞御所、九條殿、鷹司殿供奉、

重房宿禰記 延寶三年十一月廿五日己酉、(中略)火令移方々、既移皇居、(近衛)令回祿訖、主上行幸東河原、

海人藻芥 行幸、帝王、御幸、仙院、還幸、帝王、還御、親王、

山槐記 治承四年二月廿一日癸卯、今日有讓位事、主上御年廿、(安徳天皇)東宮御年三歲、去月十日、主上、中宮、東宮從閑院遷御五條亭、(五條南、東洞院西、前)去十六日還幸閑院、二宮留御五條殿、

神皇正統記 (建武三年正月) 同十六日より合戦はじまりて、三十日つひに朝敵を追落す、やがて

(後醍醐天皇)其夜還幸し給、

本朝世紀 康治元年十一月十五日癸卯、大嘗祭也、平明、神祇官分幣帛於諸神、(中略)

還幸

臨幸

戊刻(近衛)天皇自一本御書所臨幸八省大嘗宮、入御廻立殿、內大臣着小忌供奉、

百鍊抄後深草院 正元元年十二月廿八日丙寅御即位也春秋、早且臨幸官廳、左大

臣勤內辨、

後法興院記(應仁元) 文正二年正月廿一日戊子(中略)傳聞、去十八日(後土御門)、後花園

上御同車臨幸云々、主上乘御□車事、先例如何、可尋記、凡希代事共也、還幸時又以同前云、

巡幸

日本書紀神武天皇 三十有一年夏四月乙酉朔、皇輿巡幸、因登腋上、噉間丘、而廻望

國狀曰、妍哉乎國之獲矣、

續日本紀聖武天皇 天平三年冬十一月辛酉(十六日)、先是、車駕巡幸京中、

日本書紀景行天皇 十八年春三月、天皇將向京、以巡狩筑紫國、始到夷守、

玉葉 壽永二年十一月十四日甲辰(中略)而去九月之比、前內大臣上書於法皇、其狀

云、於臣全無奉背君之意、事出不圖、周章之間、於舊主者、且爲遁當時之亂、奉具蒙塵外土了、然而此上事、偏可任勅定云々、

蒙塵

日本書紀景行天皇 十二年八月乙未朔(十五日)己酉、幸筑紫(中略)、冬十月、到碩田國(中略)

車駕

到速見邑、有女人、曰速津媛、爲一處之長、其聞天皇車駕、而自奉迎之、謠言(下略)

扶桑略記後冷泉天皇 治曆三年十月五日庚戌、天皇車駕幸臨宇治平等院、宸儀渡

御兔道橋之間、伶人棹華船、沂河上、

日本書紀天武天皇 七年夏四月丁亥朔、欲幸齋宮卜之(七日)、癸巳、食卜、仍取平旦時、警蹕

既動、百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行、十市皇女、卒然病發、薨於宮中、由之鹵簿既停、不得幸

行、遂不祭神祇矣、

鹵簿

續日本後紀仁明天皇 天長十年冬十月辛丑(十九)、爲大嘗會、將修禊事、行幸賀茂河、鹵

簿之儀、具如式文、

日本書紀雄略天皇 (己未)二十三年夏四月、百濟文斤王薨、天皇以昆支王五子中、第二末

多王幼年聰明、勅喚內裏、親撫頭面、誠勅慰勸、使王其國、

三代實錄清和天皇 貞觀十二年九月十一日庚申、去八日、內裏有犬產穢、仍停奉伊

內裏

勢大神宮幣使、

百鍊抄後深草院 建長元年二月一日癸卯、子刻、閉院內裏、炎上拂地云々、主上行幸

大相國冷泉富小路亭、(西園寺實氏)

大乘院寺社雜事記

二十五

寬正五年七月十九日、(中略)

一、今日親王自日野大納言亭渡御、室町殿、御一獻等在之、則入御內裏御車庇云々、

柳原均光日次記

寬政二年十一月廿二日、今日主上遷幸土御門內裏日也、

續日本紀

元正天皇

養老二年十一月癸丑始差畿內兵士、守衛宮城、

內裏式

十二月大儺式

晦日夜、諸衛依時刻、勒所部屯諸門、(中略)方相先作儺聲、即以戈擊楯、如此三遍、群臣相承和、呼以逐惡鬼、各出四門、(中略)至宮城門外、京職接引鼓譟、而逐至郭外而止、

康富記

應永廿九年二月三日辛卯、(中略)

今日於高倉淨居庵、寄春雪、面々被作詩云云、(中略)予不顧比興、後日次韵了、韵字城晴聲也、

夜來春雪滿宮城、可惜今朝作雨晴、不是山陰乘興客、有詩有酒管絃聲、

日本書紀

神武天皇

己未年三月辛酉朔丁卯、下令曰、自我東征、於茲六年矣、賴以皇天之威、凶徒就戮、雖邊土未清、餘妖尙梗、而中洲之地、無復風塵、誠宜恢廓皇都、規摹大壯、而今運屬此屯蒙、民心朴素、巢棲穴住、習俗惟常、夫大人立制、義必隨時、苟有利民、何妨聖造、且當披拂山林、經營宮室、而恭臨寶位、以鎮元元、上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心、

三代實錄

貞觀十五年十一月三日甲子、太政官候廳成、此廳在帝宮建春門東、大臣已下、聽尋常政之處也、

三代實錄

序

天皇倦負辰於九重、輕脫屣於萬乘、宸旒應厭、凝神默於姑射、

日本書紀

孝德天皇

大化二年二月乙卯、天皇還自子代離宮、

日本書紀

垂仁天皇

三十四年春三月乙丑朔丙寅、天皇幸山背、(中略)天皇於茲執矛祈之曰、必遇其佳人、道路見瑞、比至于行宮、大龜出河中、天皇舉矛刺龜、

玉葉

治承四年六月二日癸未、卯刻、行幸於入道相國福原別業、法皇、上皇、同以渡御、城外之行宮、往古雖有其例、延曆以後、都無此儀、誠可謂希代之勝事歟、敢無知由緒之人、

神皇正統記

同十二月に、しのびて都を出まし、て、河内國に正成といひしが、一族等をめし、くして、芳野にいらせ給ぬ、行宮をつくりてわたらせ給、

續日本紀

元正天皇

養老元年九月戊申、行至近江國、觀望淡海、山陰道伯耆以來、山陽道備後以來、南海道讚岐以來、諸國司等詣行在所、奏土風歌儺、

日本紀略

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

行在所

三條天皇

寬弘八年十一月廿七日丙申、追尊天皇母藤原超子爲皇太后、

置山陵、是日、天皇除素服、着御橡御衣、公卿侍臣同着之、天皇自倚廬還御本殿、

玉葉 建久三年三月十九日辛卯、此日、主上(後鳥羽)避正殿、御于倚廬也、

實隆公記 長享二年五月十五日戊寅、(中略)今夜主上(後土御門)倚廬渡御也、(中略)入御着御

倚廬御座、御帳前、東面、

孝亮宿禰日次記 元和三年十月八日庚子、自倚廬還御有之、

實久卿記 弘化三年三月七日壬戌、今夜倚廬渡御也、(中略)次著御御錫紵、

日本書紀 三 神武天皇 七十有六年春三月甲午朔甲辰、天皇崩于樞原宮、時年一百廿

七歲、明年秋九月乙卯朔丙寅、葬畝傍山東北陵、

令義解 二十六 喪葬令 凡先皇陵、謂先代以來、帝王山陵皆是也、帝王墳墓、如山如陵、故置陵

戶令守、非陵戶令守者、十年一替、謂課役准陵戶、兆域內、謂兆亦城也、墓大夫掌郊

及耕牧樵採、

扶桑略記 二十五 喪葬 朱雀天皇 延長八年十月十日庚子、(鳥羽)太上天皇出右近衛府、奉葬醍醐寺

邊山陵、

吉記 元曆元年四月廿六日甲申、今日依被奉祝崇德院、可被告申御陵三ヶ所、可勤使

節之由、依有其催、先行水之後、已時參院、(中略)

御陵三ヶ所

白河院、成善提院、

參議左近中將通親卿、次官中務少輔兼親、

鳥羽院、安樂壽院、

參議左大辨經房、次官皇太后宮權亮有實、

待賢門院、法金剛院、

參議右大辨兼光朝臣、次官紀伊守範光、

六 日本書紀

三 神武天皇 四年春二月壬戌朔甲申、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕

躬、今諸虜已平、海內無事、可以郊祀天神、用申大孝者也、乃立靈時於鳥見山中、

續日本紀 四 元明天皇 和銅元年二月戊寅、(十五日)詔曰、朕祇奉上玄、君臨宇內、以菲薄之德、處

紫宮之尊、(下略)

類聚國史

百九十三 渤海上 殊俗部 延曆十五年五月丁未、(十七日)渤海國使呂定琳等還蕃、(中略)

仍賜其王璽書曰、天皇敬問渤海國王、朕運承下武、業膺守天、德澤攸覃、既有洽於同軌、

本朝世紀 寬治元年十二月廿八日丙午(中略)

追尊皇妣中宮爲太皇太后(藤原實子)

詔、尊母之儀、舊史氏之文垂教、爲子之道、古先帝之跡遺塵、三孝之禮、竹帛相傳、朕在往年、母儀早世、而依其坤育之德、既登此宸位之尊、飭終之心、不能默止、追尊所生先后、爲太皇太后、椒華月前、雖舍別朕之恨、松墳風底、將報篤親之誠、普告遐邇、知朕意焉、主者施行、

寬治元年十二月廿八日 御書

作者大內記在良

順德院宸記

建保二年十二月七日丁酉、今夜內侍所御神樂也、秉燭後、先典侍參、頃之朕行水、著束帶、一日之神事也、至內侍所、其儀如恒、

花園天皇宸記

正和二年二月九日己巳、今日院御幸石清水社云々、自去夜朕有喉痛事、仍召和氣全成朝臣加療養、

拾芥記

永正十一年八月廿九日、申刻、應司右府、兼輔關白宣下參陣、(中略)

詔、朕得膺圖、希四海之淳朴、身在庸瑣、愧萬乘之至尊、宜舉賢才、偏賴良弼、右大臣藤原朝臣和羹勝於傳說、執柄富於周公、官階共高、彰累葉之功績、德儀相備、揚攝籙之芳聲、夫萬機巨細、百官揜己、皆先關白、然後奏下、一如舊典、庶開一朝之洪化、專致九有之安寧、普告遐邇、俾

知朕意、主者施行、

永正十一年八月廿九日

廿九之兩字御書也、仍闕之、

後淨明珠院殿記

現神止大八洲國所知、倭根子天皇、我詔良萬、勅命乎、親王、諸王、諸臣、百官人等、天下公民衆聞食止、宣朕以薄德、氏天日嗣乎、承傳賜倍留事、漸送年序、禮利、愚昧之身、波此位爾、不可堪止、歎畏賜比天、今避皇位、賜比奈、所念行天、那隨法爾、可有岐政、止爲天、後光明天皇紹仁親王乎、皇太子止、定賜比天、此天日嗣乎、授賜布、(中略)

寬永廿年十月三日

太政官日誌

(明治元)慶應四年戊辰三月 第四

二月二十八日

(明治)皇帝陛下親シク列侯ヲ玉座近ク被爲召、詔曰、朕夙ニ天位ヲ紹キ、今日天下一新ノ運ニ膺リ、文武一途、公議ヲ親裁ス、

二月三十日、午ノ半刻、佛國公使レヲンロシム、ベニス船將ロワ、シユビレキス船將ベテイ
トワール參朝、

但、副總裁始メ公卿諸侯及掛リ役員列座、

一、皇帝陛下、親シク勅曰、貴國帝王安全ナルヤ、朕之ヲ喜悅ス、

自今兩國交際益親睦、永久不變ヲ希望ス、

第二款 書式

帝號又は天皇に關する敬語を文書に記述するに當りては、支那の文物の我が國に傳はりてより後、其の影響に基づき、特に崇敬の意を表す特殊の方式を以てするの制を見るに至れり。天皇の外、上天皇、后妃及び皇族に關しても、之に准ず。其の方式に三あり、平出、闕字及び擡頭は是なり。平出とは、當該文字は行を改めて之を次行の初頭に書するを謂ひ、闕字とは、當該文字を書するには其の上一字を空白とするを謂ひ、擡頭とは、當該文字は營に行を改む

るのみならず、次行の初頭よりも更に上位に之を書するを謂ふ。平出及び闕字の制は、支那に在りては隋唐の頃より行はれ、我が國に在りては大寶令に於いて定められたるを初見と爲すが如し。大寶令公式令には、平出すべきものは、皇祖、皇祖妣、皇考、皇妣、先帝、天子、天皇、皇帝、陛下、至尊、太上天皇、天皇諡、太皇太后、太皇太妃、太皇太后、
太夫人も同じ、皇后とし、闕字すべきものは、大社、陵號、乘輿、車駕、詔書、皇太妃、皇太夫人も同じ、勅旨、明詔、聖化、天恩、慈旨、中宮、御、闕庭、朝庭、東宮、皇太子、殿下及び此等の類とし、但し、汎く古事を説くには言平闕の名に及ぶも指説するに非ざるものは皆平闕せずとあり。蓋し一般抽象的の記述にして特定の君を指すに非ざる場合には、此等の語と雖も平出又は闕字するの限りに在らざるの意なり。

平出闕字に關する令の制は、公文の書式に付き定められたるもの

にして、實際にも主としては公の文書に於いて其の制に従ひたるが如し。公式平闕考に據れば、平出及び闕字は、上表、疏、啓、解、移、符、牒、辭、判、策、封事、欸狀の類に於いて専ら用ひらるゝ所にして、其の餘は必ずしも之に由らずと見えたり(三)。之を資料の今日に傳はれるものに就いて見るに、綸旨、院宣、令旨、官宣旨、符、牒、廳宣、上表、解等總て公式の文書には概ね平出及び闕字を爲せり。其の他の文書に在りては、必ずしも此の例に據らずと雖も、尙經典、日記、書籍の序跋、碑文、鐘銘の類には、平出闕字を爲せるもの少からず(四)。但し平出又は闕字を爲すべき文字に付いては、令の制は必ずしも嚴格に遵由せられたるに非ず。又雜筆要集には、太上天皇の御書には天皇を平出に書せず、天皇の御書には太上天皇を平出に書すべく、是父子の次の故なりと見え、和長卿記及び拾芥記に據れば、天皇親ら御身の

の事を書したまふには闕字平出の儀なく、故に詔書、宣命等内覽奏聞の草案には平出又は闕字を爲すも、是草者の草する所なるが爲にして、清書には其の儀なしと見えたり(五)。

擡頭の制も亦支那より傳はりたるものにして、我が國に在りては室町時代の頃より行はれしが如し。平出又は闕字とは異なり、公の制度として定められたるものに非ず、主としては學者又は僧侶に依り、書籍の序跋、碑文、鐘銘等に用ひられ、其の外、上表、朱印狀、消息等にも其の例に據りたるものあるを見る。此等の實例に就き其の擡頭して書せるものを擧ぐれば、天皇諡を初め、天子、皇帝、當今、先帝、祖宗、列聖、聖子、神裔、寶祚、皇化等の語あり(六)。時としては、天皇又は天皇諡等直接に天皇を指し奉る語は、特に二字擡頭して書せる例も見えたり(七)。

平出明矣、師云、依文、不別死生、仍須死生無別、同號也、令釋同此說、皇祖以下、縱氏換尙合同、心、但以貴省文、故、煩、不平出也、更無優劣、

先帝、古記云、問、先帝、未明、其、限、答、無限、朱云、先帝崩者、天子、死、後、名、太上、天皇、師同、

天皇諡、(中略)釋云、諡者、果、生、時、之、行、迹、爲、死、後、之、名、稱、假、如、經、緯、天、地、謂、之、文、武、撥、亂、反、正、謂、後、名、也、未、知、先、帝、天、皇、諡、二、名、別、何、答、尙、臨、時、可、有、耳、

皇太后(中略)皇太妃、皇太夫人、同、古記云、上、件、六、員、太、子、若、子、孫、不、即、位、者、太、字、不、加、穴、云、平、出、故、也、

令義解 七 公式令

大社 陵號 乘輿 車駕 詔書 勅旨 明詔 聖化 天恩 慈旨 中
宮 御、謂、斥、至、尊、謂、一、人、也、三、后、亦、准、此、凡、明、神、御、字、如、此、之、類、非、是、斥、說、一、人、闕、庭、朝、庭 東宮 皇太子 殿下

右如此之類並闕字、

令集解 三十四 公式令

御、謂、斥、至、尊、(中略)釋云、斥、指、也、音、昌、石、反、跡、云、斥、至、尊、謂、凡、稱、御、者、當、件、上、端、者、不、更、下、假、令、注、法、云、云、其、處、可、用、其、物、若、干、天、皇、直、就、上、頭、注、耳、朱、云、斥、至、尊、謂、依、此、令、天、子、一、人、也、但、依、律、稱、御、者、三、后、皇、太、子、皆、可、同、耳、額、同、也、穴、云、御、謂、斥、一、人、也、於、中

宮非也、依律稱御者、皇太后皇后並同者、爲科罪生文者、不合闕字也、但令者依式放耳、此闕私案中宮闕字、然稱御處中宮亦闕跡云、同、問、唐、令、云、非、此、可、闕、者、未、知、一、端、何、答、稱、御、行、闕也、先、度、說、也、不、闕、闕、庭、朝、庭、東、宮、皇、太、子、殿、下、皇、太、子、殿、下、者、未、知、爲、誰、所、稱、答、闕、字、立、文、也、儀、制、令、明、可、稱、御、名、狀、耳、

右如此之類並闕字、古記云、問、如、此、之、類、並、闕、字、未、知、之、類、答、假、明、詔、聖、恩、赦、聖、慮、等、如、是、之、類、不、可、勝、彈、故、云、之、類、

令義解 七 公式令

凡汎說古事、言及平闕之名、非指說者、皆不平闕、謂、汎、者、博、也、假、令、天、母、地、故、曰、天、子、此、非、指、言、其、君、緣、博、說、人、君、之、體、自、然、及、平、闕、之、名、即、如、此、之、類、皆、不、可、平、闕、依、上、條、以、國、忌、可、廢、務、者、爲、限、但、此、雖、國、忌、以、外、而、應、指、說、者、亦、爲、平、闕、

令集解 三十四 公式令

凡汎說古事、言及平闕之名、非指說者、皆不平闕、(中略)釋云、汎、博、也、謂、指、明、先、代、帝、皇、作、書、耳、上、條、國、忌、以、外、爲、限、雖、非、指、說、而、皆、應、平、闕、但、此、條、雖、云、國、忌、來、帝、皇、時、有、令、指、述、其、君、者、必、應、平、闕、耳、非、指、說、者、謂、爲、述、他、事、名、號、相、闕、耳、古、記、云、問、汎、說、古、事、言、及、平、闕、之、名、非、指、說、者、皆、不、平、闕、未、知、其、意、如、何、答、汎、說、古、事、言、及、平、闕、之、名、說、異、國、之、君、名、也、非、指、說、者、非、指、當、國、君、上、說、也、跡、云、說、古、事、謂、除、去、國、忌、以、往、是、非、指、說、者、而、造、始、是、指、說、耳、但、國、忌、內、不、論、說、指、不、之、狀、皆、合、平、闕、朱、云、及、平、闕、之、名、者、云、平、出、闕、字、二、端、見、主、及、國、事、不、見、其、限、合、依、別、式、也、令、釋、云、國、忌、之、外、是、者、未、爲、可、也、師、依、令、釋、爲、是、也、一、端、見、主、及、國、之、外、依、此、文、非、指、說、者、不、平、闕、耳、

大唐六典 四 尙書禮部

凡上表、疏、牋、啓、及、判、策、文、章、如、平、闕、之、式、

謂、昊、天、后、土、天、神、地、祇、(祇)上、帝、天、帝、唐、號、祧、皇、祖、妣、皇、考、皇、妣、先、帝、先、后、皇、帝、天、子、陛、下、至、尊、太、皇、太、后、皇、太、后、皇、后、皇、太、子、皆、平、出、宗、唐、社、稷、太、社、太、稷、神、主、山、陵、陵、號、乘、輿、車、駕、

支那に於ける平出闕字

制書、敕旨、明制、聖化、天恩、慈旨、中宮、御前、闕廷、朝廷之類、並闕字、宗廟中、陵中、行陵、陵一
字疑、中、樹木、待制、乘輿、車中馬、舉陵、廟名為官、如此之類、皆不闕字、若泛說古典、延及天
地、不指說平闕之名者、亦不平出、

二 公式平闕考

按、此令平闕式者、凡上表、疏、啓、解、移、符、牒、辭、判、策、封事、欸狀等之類、則專
所用之、而其餘不必由之、唯宜從其文之先例者乎、其證者同令詔書式、平出詔字、雖義解以
為誤失、又穴曰、此式詔字平出依式習耳、不依下條、其後延喜式猶平出之、則穴說可信矣、又
六典曰、上表、疏、牋、啓及判策文章、如平闕之式、爰知唐朝亦上表云云之餘者、不必由其式、故
在家別著平闕群例一卷、以呈其考證、且此令闕字條下曰之類、今考之、略如左乎、

內裏 禁中 禁城 禁闕 鳳闕 華闕 紫闕 紫庭 紫掖 宮闕 宮省 行宮
行在 行內 省中 宮中 制書 宣命 天旨 院宣 聖恩 皇恩 渥恩 湛恩
恩賜 恩澤 恩光 恩輝 恩赦 叡慮 叡感 叡旨 叡襟 叡藻 宸遊 宸宴
宸儀 御製 御膳 御遊 御璽 聖聽 天聽 天姻 皇姻 帝婿 皇綱 皇道
餘可准知、於平出條下者、唯曰右皆平出、其餘似無此類、雖然彼縣官、天辟、天家、大君等之類、
至正指說當今、則豈不平出可乎、至于其私文書則、橋尚書為藤豫州、平出其先考、江吏部為

公式平闕考
に據る平出
闕字

平出闕字に
關する諸説

藤員外納言闕字之類、皆是臨時存禮耳、素無穴式、從者平出其主、子弟為其父兄闕字、門人
為其師闕字之類、則皆向他者不平闕、唯國內家內同門之禮也、如此之類、要臨其時守其分、
存其禮而可也、

借在家卿而書寫之 量原

雜筆要集 闕字平出 九十五

太上法皇 太上天皇 帝王 皇祖 皇祖廟 皇考 先帝 天子 皇帝 陛下 皇
妣 聖主 聖朝 至尊 一人 禪定仙院 諡 太上天皇 諡 太皇太妣 太皇太夫人
皇太后 皇大妣 國母 夫人
已上皆是平出可書之、別行者也、
皇太子 中宮 東宮 朝家 國王 朝庭 闕庭 降勅 太祖 陵號、乘輿 車駕 宣
旨 詔書 勅書 勅旨 明詔 院宣 朝恩 天恩 天裁 叡慮 聖化 洪恩 鴻
恩 慈旨 殿下

已上皆是闕字可書、闕字者一字欠書之、但此外案內、本家政所、恩裁等書闕字、是非法式
也、

中家實錄

十二 雜篇 闕字之法

本朝 我朝 神國 我君 當今 主上 當帝 陛下 法皇 太上皇帝 院御所
仙洞 御宇 東宮 儲王 儲君 皇子 前坊 當坊 之類、不可枚舉、皆以闕一行、
假令前行至二三字、其下不記之、至次之自行、舉一字書之、

二字之闕

行幸 主上、 御幸 院、宮、 行啓 宮、 出御 主上、 還御 主上、 遷御 渡御 立御 休御
行在所 御服 上用、 御書 御字、在上用吳音、在下用漢音、 御膳 御前 供御 著御 之類也、

台記

久壽二年十二月廿二日乙未、(中略)假文書樣、據西宮臨時記也、檢公式令、皇后
平出、中宮闕字、今案、指其身平出、指其居闕字、若然、書太皇太后、皇太后、皇后之時平出也、太
皇太后宮、皇太后宮、皇后宮、中宮之時闕字也、至于高陽院者、指身指居不能異文、探其意、可
分別平出闕字、今指其身、故平出也、

宣秀卿記

明應六年十二月十四日

御經供養事(中略)

一、聖忌ノ聖ノ字、常ハ闕字也、是ハ後花園院ヨリ書ツ、ケテ如此、但御教書ハ院マテ一

行、聖忌ヲ上ヘアクル之間、其差異不分明也、三十三回聖忌、如此書之時ハ、闕字勿論也、

宣胤卿記

永正四年九月十八日、觀音經讀誦如月々、頭辨狀到來、勘符 右左、 付占ハ余ケス

也、今度彼御本尊事、每度伏見御寺之被用之也、

御經供養事、於安禪寺殿可被行之由、被仰下候御教書、可爲此分候歟、後土御門院可有

テ一行ニキ候間、二所ニハ、可爲此分候、闕字候ましく候歟、乍去後土御門院マ

來廿八日後土御門院聖忌、於安禪寺殿可有御經供養、任例可被申沙汰狀如件、

九月、右中辨判

藏人、

當日參候事、同可被存知之由、被仰下候也、

一、奉爲後土御門院、此文章不可有之候哉、

一、六位御布施取事、追書ニ候ヘキ歟、御教書案御導師以下事不及書進候、舊案所持候、兩

條ハかり申候、被勘下候者、恐悅候、誠恐頓首、謹言、

九月十八日

亥刻 尙顯

實隆公記

永正九年四月八日壬午、雨降、雷發聲、今日立親王宣下也、上卿大炊御門大

納言經名、參陣、先著陣、官藏人、方吉書覽之、頭左、中上卿則被補勅別當云々、本所之儀被用小御所、言綱朝臣被補職事、家司基規朝臣、重親等云々、列拜爲雨儀敷、次第之儀可尋記之、抑親王宣旨官時元宿禰成進之、就其書樣有不審之儀、今上之字可爲平出敷、可爲闕字敷之由、予和讒之、用平出、仍書改之、料紙予惠之了、
件書樣、

知仁

左中辨藤原朝臣伊長傳宣

權大納言藤原朝臣經名宣奉

件人宜爲今上親王兩樣也儲

勅宜爲

君可略件人敷云々、

今上親王

永正九年四月八日

造東大寺大佛長官左大史小槻宿禰時元奉

中納言見物、則御禮申之退出、

宣胤卿記

永正十四年九月十五日、左少辨資定來、後土御門院聖忌御經供養申沙汰事、被仰下了、御教書案等所望云々、延德二年後花園院聖忌御經供養、宣秀卿、于時五位職

事申沙汰、舊案遺之、但此時前月被行之由、聖忌と不書之、今度者聖忌ト書之條、不能左右之由、令入魂了、又聖ノ字、普通闕字也、御院號ニ書ツ、ケハ、不可有闕字敷、第二行ノ上ニアケテ書之條、無何可然敷之由演說了、又明應六年度申沙汰不闕字之、但其時も二行メノ上ニ書也、

京都御所東山御文庫記錄

乙三十六 後水尾天皇宸翰無題名

一、諷誦願文等清書之樣如何、

同御返答、文字ハ可爲行、點畫ノ數、眞字ニ同シク省略セスノ可書也、假令言偏ヲハ言、如此可書、(書カ)如此事等嫌也、奥端上下等ノ明ヤウ、大體法度アレトモ、如法度ハカリモ書合カタキ故、見合テ書也、根本ハ一行ニ十七字書事ナレトモ、是モ當時ハナリ次第ニ書也、我事ヲ身ト諷誦願文ニアル也不自由ホトニ平出ニ書也、仙院等ノ御名モ平出也、フルキハ闕字也、誰ヲ指テ云トモナキ君ノ字ナトハ闕字也、敬白ノ字三ツアルヲハ、次第ニチイサク書也、繼目ニハ不書懸、但長キ願文ハ、端一ツ繼目ニ書掛サレハ、奥ハカ、リテ不苦云々、近比如此注シタル抄物有御覽云々、勸進帳ハ奥ヲ次第ニ草ニ書也、呪願文ハ別ノ事ナシ、端ニ呪願文ノ字一字程サカル也、奥ノ年號モ同前也、見合次第也、四

字五字ノ偈ヲハ、一句ツ、書切也、(中略)

一、闕字ト云ハ、行ノ中ニテ一字闕ヲ置テ書ヲ云、假令
二字書テモ、其行ノ下ニハ不書、次ノ行ノ上ニ書ヲ云、假令

如斯、

槐記 二續編 享保十七年六月十二日、參候、

滋野井入道殿ノ御咄ニ、(中略)書物ニ闕字ヲ記シテ尊ヲ表スルニ、平出ト特出トノ儀アリ、延喜式ニクワシクミヘタリ、平出ト云ハ、同ジクダリニ記スコトヲ書下シニセズ、アトハ何字アマロフトモ、次ノクダリニアゲテ記スヲ平出ト云也、クダリノ通りニ平ニ記スト云心也、特出ト云ハ、クダリノ通りヨリモ、一字アゲテ記スヲ云、各別ノ闕也、シカレドモ此ハ當世ノ儀ニシテ、上古ハナキコト也、當今ニテハ漢ノ書ニテ、書物ノ系ヲ箱ニシテ、一段アゲテナドシルスコトハ、分モナキコト也、昔シ天子ノ御謚號ナドヲ記スモ、同ジクダリニテ、何字ノ闕ト云コトアリ、タトヘバ當今天子ハ七字、院ハ何字ト云ヤウニ、文字ノ數ニテ定リアリ、此モ漢唐ヨリノコトニヤト申シ上ゲラル、

仰ニイカニモ唐法也、コレニ分ノアルコト也、古ヘ碑銘ヲ記サル、ニ、平出ニシテ書テハ、クダリガ大分ニツブレテ、記シヲホセラレヌカラ、一クダリノ中ニテ、闕字ヲコシラヘタルモノ也ト仰セラル、

實隆公記

文明十二年八月六日甲寅、今日禁裏詩御會也、去月廿五日内々可相催之由、直蒙勅定之間相催人々、題禁庭秋色(多カ)勝(以情)兼日内々被召量光卿云(云カ)題七書進上之内、此題被懸御爪點了、人々懷紙執集之、晚頭持參、則取重之了、(中略)

抑題禁之字闕字有無、人々所爲不同、今度量光卿、基綱卿無闕字、其外皆有闕字、何是非、猶可尋決、兼日相催之儀、堅固内々之間、故以腰文、々章以下内々之體也、不可爲指南、予奉行、且又無其寄歟、雖然就近臣勅定、又非無便歟、仍無左右相催者也、將亦予雖内々之儀、於公宴者、今度始而獻懷紙、八條内府、侍從大納言殿等、每度之事也、以彼例、先公亦永享三船之懷紙、令獻之給、不違芳躅、爲公宴之人數之條、尤令祝着者(也カ)

宣胤卿記

永正十四年閏十月一日癸酉、(中略)自濃州左衛門督基春卿、狀到來、基規傳、先日返事也、有哥心ある、あつまきみの旅のうさも忘つ、彼狀云、哥に闕字平出事、近代不見及候、公宴なども無其儀候歟、但京極(藤原定家)黃門建仁元年之度、峯月照松と云題にて、さしのは

君を千とせとみやまより松松此外不見候、可爲如何事候哉、御所見事候は、承度候、此哥、
をそ月の色に出ける松、自筆黄門自筆懷帛、先年於此金吾許令一見了、誠公宴可有故實歟、平出までハ嚴重之事也、私
儀闕字ハ可然之由申遣了、

年山紀聞 一 和歌に闕字

宣胤卿日記永正十四年閏十月一日云、自濃州左衛門督基、春狀到來、先日、返事也、有
歌、

心ある 君にとはれて三とせふる

あつまのたひのうさもわすれつ

彼ノ狀 = 云、歌 = 闕字平出ノ事、近代不見及候、公宴などにも無其儀候歟、但、京極黄門
建仁元年之度、峯月照松と云題にて、

さしのほる

君を千とせとみ山より

松をそ月の色に出ける

とか、れ候、此外不見候、御所見ノ事候は、承度候、此歌、黄門自筆ノ懷帛、先年於此ノ金

文書に於ける
平出闕字

吾ノ許 = 一見了、誠 = 公宴可有故實歟、平出までは嚴重之事也、〔安藤爲章
享保元年十月歿〕

三 後堀河天皇綸旨

寶簡集五十一
和歌山縣 金剛峯寺所藏

高野山僧徒退散事、子細先度委被仰候了、先令歸本山之後、有訴申旨者、任道理可有其沙
汰、度々被仰下之上、雖爲衆徒、爭可背 勅命哉、隨仰令歸山者、便宜訴訟更不可默止事也、
殊可有御下知之由、重

天氣所候也、仍言上如件、以此旨可令洩披露給、仍執達如件、

〔嘉祿二年〕
九月廿日

右大辨(草名)

謹上 宰相僧都御房

後醍醐天皇綸旨

男爵五條頼次氏所藏

自去比依有御惱事、御讓國于陸奥親王了、不違日來之軍忠、可達叡旨、縱雖有不慮御事、深
被憑思食候上者、令勇官軍等、殊可廻朝敵追罰之籌策、於當山者、云要害云祇候輩、更不可
有子細、存其旨可下知軍勢等給者、

天氣如此、仍執達如件、

〔延元四年〕
八月十五日

右中將實躬

謹上 勘解由次官殿

後白河法皇院宣

寶簡集四十
和歌山縣 金剛峯寺所藏

被院宣傳項^(項)嘗世屬衰亂人苦軍旅去今兩年之間四海稍雖似無事一天猶難稱有截思其匡濟蓋失要術昔者大師等之將來經論傳習秘教推其素意豈非鎮護國家之深願哉近年恒例佛事臨時御祈被引諸國之凋弊雖有用途之闕乏興廢繼絕遂何默止諸宗各答祖師之本懷恒時勤仕公家之御願者泰平之化亦未為難何況佛法之紹隆者王法之歸依也王法若不衰微佛法即可繁昌勿謂如綸如綍之聖旨即是本寺本山之要道也殊以此趣普俾宣告各可奉祈 聖朝安穩也兼又保元以來戰場殞命之輩敢無追報之人苦患幾多尤足傷嗟加之逆亂攻戰之時緇素貴賤之中或觸緣思勝負或於事定善惡各雖非性罪又已為同業如此罪業積如山岳縱運恒沙年得算盡雖須設大善廣以令拔濟撥亂之政寔繁修福之營暫懈歲月空邁惻隱于懷夫懺悔迴向者非當為濟度衆生之妙因兼可得鎮護國家之巨益軍國之政莫先於焉者也早行彼等滅罪之法可為天下生善之謀凡厥滿寺熟察此理朋心合力勿有懈緩至于其佛事子細者各任所習只待護持者 院宣如此仍執啓如件

(文治三年)
三月六日

右少辨親經 奉

謹々上 東寺法務御房

逐啓

依義顯事尙可有御祈候諸宗次第結番長日可被行御修法候也東寺分自來廿五日可被修愛染王法候也支度注文可令進給候委細給御使可令申候

重仰

戰場殞命輩并同業人懺悔迴向事以此趣同可令下知高野山給者

後嵯峨上皇院宣

京都府 石清水八幡宮所藏

彌勒寺并喜多院正八幡宮檢校職間事父祖之所為兩方共以雖相替任祐清法印之素意於檢校職者早可被門跡相承者

院宣如此仍執達如件

正嘉二年十一月十八日

左兵衛督(花押) 奉

八幡檢校法印御房

興良親王令旨

大阪府 觀心寺所藏

河內國小高瀬庄朝用分、如元所被返付寺家也、可令全所務給之由、一品宮令旨如此、悉之以狀、

正平十四年八月卅日

勘解由次官(花押)

觀心寺之僧等中

征西將軍宮令旨

子爵相良頼綱氏所藏

可馳參之由、被聞食了、尤以神妙、仍玖麻郡內并葦北庄之事、領掌不可有相違者、依征西將軍宮仰、執達如件、

弘和三年四月十四日

左中將(花押)

相良近江守館

延久二年七月官宣旨

奈良縣 東大寺所藏

左辨官 下東大寺

應早辨申寺家所領美濃國大井茜部兩庄田畠加納子細事

右件田畠收公條、依寺家奏狀、被問彼國司之處、辨申狀云、件兩庄、本免田各廿町之外、籠作公田六十八町余、各稱庄田不隨國務、件田卅余町、前司藤原定房朝臣任奉免之、卅町前司

源師良朝臣任御封、未濟代所奉免也、謂其年限、皆起請以後加納也者、權大納言源朝臣經

長宣、奉 勅、宜仰彼寺、令辨申件加納子細者、

延久二年七月七日

右大史 (紀草名)

中辨藤原朝臣伊房

元弘三年七月官宣旨

神奈川縣 總持寺所藏

左辨官下 能登國

應令士卒民庶、當時知行地、不可有依違事、

右大納言藤原朝臣宣房宣、奉 勅、兵革之後、士卒民庶未安堵、仍降 絲綸、被救罕籠、而万機事繁、施行有煩、加之諸國之輩、不論遠近、悉以京上、徒妨農業之條、還背撫民之義、自今以後、所被關此法也、然而高時法師黨類以下朝敵、與同輩之外、當時知行之地、不可有依違之由、宜仰五畿七道諸國、敢勿違失、但於臨時 勅斷者、非此限者、國宜承知、依 宣行之、

元弘三年七月廿五日

大史小槻宿禰

少辨藤原朝臣

太政官符案

延喜式紙背
公爵九條道秀氏所藏

第二節 敬語及び書式 第二款 書式 三

太政官符民部省

寺神封戶田租用正稅應補充事、

右去年十一月十一日 勅書假、今年天下田租免賜者、今被內臣正三位藤原朝臣宣奉、
勅所免寺神封戶田租、宜用正稅補滿者、省宜承知、依 勅施行、符到奉行、
正四位下守左大辨兼行造西大寺播磨守佐伯宿禰今毛人 左大史正六位上會賀臣眞
網

寶龜四年二月十六日

治部省牒

北白川宮御所藏

治部省 牒

延曆寺天台宗傳燈大法師圓珍年卅八、
臘十九、

右補充內供奉持念禪師

牒得玄蕃寮解稱、僧正泰景等連狀稱、前件大法師、精通戒律、持念真言、苦節年深、勤行匪懈、
伏請准

勅舉充內供奉持念禪師者、謹檢去寶龜三年三月六日

勅京畿七道諸國、簡擇苦行精勤、少欲知足者、置爲內供奉、割正稅稻、以給資糧、無有所乏者、
僧圓珍合充件選、右大臣宣奉
勅、宜依請者、准補既訖、仍以牒知、故牒、

嘉祥三年三月二日

少錄從七位下江大妨
少丞正六位上田秀道
少輔從五位下藤關雄

金峯山寺牒

實簡集四十八
和歌山縣 金剛峯寺所藏

金峯山寺牒 金剛峯寺 衙

一紙被戴（兼）當寺領中津川村被押妨彼山由者

牒件村者、自往古以來、任官符 勅定旨、爲當山所領、而以去十月比、俄稱遠津川鄉內、被加
制止者、抑件（津脫力）中川者、遠津川鄉內領、而自以往已來、所雜役勤仕也、始而有相論之由、被牒送
之條、極不被得心者、歟、倩案古實、御山第二代之檢按仲善之時、忝蒙 綸旨、勝山領之四至、
于今無有異論、然則件村出來相論之條、不審由、衆徒所被噉喝也、但光序等者、山領之住人
也、猥以山領可賣買哉、極不落居事歟、爲審理非、早召鄉民、可被尋子細矣、東寺一室之呢、寔

不可有異論之狀如件以牒

(廣治元)
永治二年二月十五日

都維那法師淨命

寺主大法師(花押)

上座大法師(花押)

在廳大法師(花押)

小別當大法師(花押)

法隆寺伽藍緣起并流記資財帳

徵古雜抄所收

法隆寺伽藍緣起并流記資財事

奉為池邊(用明)大宮御宇

天皇并在坐御世御世

天皇歲次丁卯(推古)小治田大宮御宇

天皇并東宮上宮聖德法王法隆學問寺并四天王寺中宮尼寺橋尼寺蜂岳寺池後尼寺葛城尼寺乎敬造仕奉亦小治田

天皇大化三年歲次戊申九月廿一日己亥許世德隨高臣宣命為而食封三百烟入賜岐又

戊午年四月十五日請上宮聖德法王令講法華勝鬘等爾岐其儀如僧諸王公主及臣連公

民信受無不慕也講說竟高座爾坐奉而大御語止為而大臣乎香爐乎手擎而誓願且事立

爾白左久七重寶毛非常也人寶毛非常也是以遠岐須賣御地乎布施之奉良久御世御世

爾母不朽滅可有物毛止奈播磨國佐西地五十万代布施奉此地者他人口入犯事波不在止

白而布施奉止白岐是以聖德法王受賜而此物波私可用物爾波非有止為而伊河留我本

寺中宮尼寺片岡僧寺此三寺分為而入賜岐伊河留我寺地乎波功德分食分衣分寺主分

四分為而誓願賜波久功德分地乎持者在坐御世御世

天皇御朝乎日月止俱長久令榮為而每年法華維摩勝鬘經乎說乍佛御法乎万代爾流傳

令為興隆麻久欲止誓願賜岐食分衣分地乎持者衆僧等為衣食而學習佛教令繼後代止

誓願賜岐寺主分地乎持者此寺乎造攝不朽壞且為脩補寺主法師等新四分為賜岐(中略)

又食封參佰戶

右養老六年歲次壬戌納賜平城宮御宇(元正)天皇者神龜四年歲次丁卯年停止

牒以去天平十八年十月十四日被僧綱所牒僧寺家緣起并資財等物子細勘錄早可牒上

者謹依牒旨勘錄如前今具事狀謹以牒上

天平十九年二月十一日

都維那僧靈尊
上坐僧隣信
寺主僧玄鏡
可信半位僧乘印
可信複位僧賢廣
可信複位僧乘觀

僧綱依三綱牒檢件事記仍爲恒式以傳遠代謹請紹隆佛法將護 天朝者矣

天平廿年六月十七日

大僧都法師行信

佐官業了僧願清
佐官兼藥師寺主師位僧勝福
佐官兼興福寺主師位僧永俊
佐官師位僧惠徹
佐官業了僧臨照

大安寺伽藍緣起并流記資財帳

奈良縣

正曆寺所藏

大安寺三綱言上

伽藍緣起并流記資財帳

(舒明)初飛鳥岡基宮御宇 天皇之未登極位號曰田村皇子是時(推古)小治田宮御宇 太帝天皇召田村皇子以遣飽浪葦墻宮令問廐戶皇子之病勅 病狀如何思欲事在耶樂事在耶復命 蒙天皇之賴無樂思事唯臣伊 艱凝村始在道場仰願奉爲於古御世御世之帝皇將來御世御世御宇 帝皇此道場乎欲成大寺營造伏願此之一願恐 朝廷讓獻止奏支 太皇天皇受賜已訖又退三箇日間皇子私參向飽浪問御病狀於茲上宮皇子命謂田村皇子曰愛哉善哉汝姪男自來問吾病矣爲吾思慶可奉財物然財物易亡而不可永保但三寶之法不絕而可以永傳故以艱凝寺付汝宜承而可永傳三寶之法者田村皇子奉命大悅再拜白曰唯命受賜而奉爲遠皇祖并大王及繼治天下 天皇御世御世不絕流傳此寺仍率將妻子以衣齋爨土營成而永興三寶皇祚無窮白後時 天皇臨崩日之召田村皇子遺詔皇孫 朕病篤矣今汝登極位授奉寶位與上宮皇子讓 朕艱凝寺亦於汝毛 授祁利此寺後世流傳勅支仍即 天皇位十一年歲次己亥春二月於百濟川側子部社乎切排而院寺家建九重塔入賜三百戶封號曰百濟大寺此時社神怨而失火燒破九重塔並金堂石鴟尾

天皇將崩賜時、勅^(皇極天皇)太后尊久、此寺如意造建、此事爲事給耳、爾時^(皇極)後岡基宮御宇、天皇造此寺、司阿倍倉橋麻呂、穗積百足二人任賜、以後、天皇行車筑志朝倉宮、將崩賜時、甚痛憂勅久、此寺授誰參來止、先帝待問賜者、如何答申止、憂賜支、爾時^(天智)近江宮御宇、天皇奏久、開伊譽墨刺乎、刺、肩負鉷、腰刺斧奉爲奏支、仲^(後堀王)天皇奏久、妾毛我妹等、炊女而奉造止、奏支、爾時手柏慶賜而崩賜之、以後飛鳥淨御原宮御宇、天皇二年歲次癸酉十二月壬午朔戊戌、造寺司小紫冠御野王、小錦下紀臣訶多麻呂二人任賜、自百濟地移高市地、始院寺家入賜七百戶封、九百三十二町墾田地、卅万束論定出舉稻、六年歲次丁丑九月康申朔丙寅、改高市大寺號大官大寺、十三年、天皇寢膳不安、是時、東宮草壁太子尊奉、勅、率親王諸王諸臣百官人等、天下公民誓願賜久、大寺營造延今三年、天皇大御壽、然則大御壽更三年大坐坐支、以後藤原宮御宇、天皇朝廷爾、寺主惠勢法師乎、令鑄鍾之、亦後藤原朝廷御宇、天皇九重塔立金堂作建、並丈六像敬奉造之、次平城宮御宇、天皇天平十六年歲次甲申六月十七日、九百九十四町墾地入賜支、合佛像玖具、壹拾柒軀、丈六卽像貳具

右淡海^(天智)大津宮御宇、天皇奉造而請坐者、(中略)

右、以去天平十八年十月十四日被僧綱所牒、左大臣宣奉、勅、大安寺緣起并流記資財物等、子細勘錄、早可言上者、謹依牒旨、勘錄如前、今具事狀、謹以言上、

天平十九年二月十一日

都維那僧靈仁
寺主法師教義
上座法師尊耀

僧綱所、左大臣宣僞、大安寺緣起并流記資財帳一通、綱所押署下於寺家、立爲恒式、以傳遠代者、加署判下送、今須謹紹隆佛法、敬誓護天朝者矣、

天平廿年六月十七日

大僧都法師行信
佐官業了僧願清
佐官兼藥師寺主師位僧勝福
佐官兼興福寺主師位僧永俊
佐官師位僧惠徹
佐官業了僧臨照

東大寺獻物帳

正倉院御物

奉爲

(聖武)

太上天皇捨國家珍寶等入東大寺願文

(光明)

皇太后御製

妾聞悠悠三界猛火常流杳々五道毒網是壯所以自在大雄天人師佛垂法鈎而利物開智鏡而濟世遂使擾々群生入寂滅之域蠢々品類趣常樂之庭故有歸依則滅罪无量供養則獲福无上伏惟

(聖武)

先帝陛下德合乾坤明並日月崇三寶而遏惡統四攝而揚休聲籠天竺菩提僧正涉流沙而

遠到化及振旦鑒眞和上凌滄海而遙來加以天惟薦福神祇呈祥地不惜珍人民稱聖恒謂千秋萬歲合歡相保誰期幽塗有阻閱水悲涼靈壽無增穀林搖落驪駟難駐七々俄來茶襟轉積酷意彌深披后土而無徵訴皇天而不弔將欲爰託勝業式資 聖靈故今奉爲

先帝陛下捨國家珍寶種々翫好及御帶牙笏弓箭刀劍兼書法樂器等入東大寺供養盧舍那佛及諸佛菩薩一切賢聖伏願持茲妙福奉翼

仙儀永馭法輪速到花藏之寶刹恒受妙樂終遇舍那之法苑將普賢而宣遊共文殊而展化仁霑百億德被三千又願

(聖武)

今帝陛下壽同法界福類虛空劫石盡而不盡海水竭而無竭身心永泰動息常安復乃天成

地平時康俗阜萬姓奉无爲之化百工遵有道之風十方三界六道四生同霑此福咸登妙果
獻 盧舍那佛(中略)

橫刀一口 刃長一尺四寸七分 鋒者偏刃 紫檀把以犀角裹頭又以鐵約其上 以金鑲之

纏藤 紫組懸紫皮帶執 黑紫繩帶 黑紫紬袋緋綾裏 黑

右一口者 (不比等) 太政大臣之家設新室宴之日 (光明) 天皇親臨 皇太子奉舞 (大) 大臣壽贈 (大) 彼

御字 皇太子者即平城宮 後太上天皇也

黑作懸佩刀一口 刃長一尺一寸九分 鋒者偏刃 木把陰染樺纏 紫板緋懸 紫皮帶執 黑紫繩帶 紫地錦袋緋綾裏 紫

右 日並皇子常所佩持賜太政大臣 (文武) 大行天皇即位之時便獻 大行天皇崩

時亦賜太臣 (大) 大臣薨日更獻 後太上天皇 (中略)

右件皆是

先帝翫弄之珍內司供擬之物追感疇昔觸目崩摧謹以奉獻

盧舍那佛伏願用此善因奉資冥助早遊十聖普濟三途然後鳴鑿花藏之宮住躔涅槃之岸

天平勝寶八歲六月廿一日

從二位行大納言兼紫微令中衛大將近江守藤原朝臣仲麻呂

從三位行左京大夫兼侍從大倭守藤原朝臣永手

從四位上行紫微少弼兼中衛少將山背守巨萬朝臣福信(以下署名略)

國司廳宣案

大阪府 金剛寺所藏

(編纂書) 國司廳宣案 建久二年

應宣 留守所

可早任 院宣免除金剛寺四至內田畠山野等所當官物以下臨時雜事兼又禁斷殺生事

副下

院廳御下文一通

右件寺者密教繁昌之地、靈驗殊勝之砌也、且爲攘災、且爲招福、最可崇重、誰致蔑爾、況乎忝被成下 院廳御下文、任其狀、永可免除四至內田畠山野等所當官物已下國役臨時雜事也、就中可禁斷殺生事、

勅命殊嚴、若不拘制法者、儘可加懲肅之狀、所宣如件、留守所宜承知、依宣行之、以宣、

建久二年六月 日

守源朝臣 在判

檢非違使別當宣

北山抄紙背 公爵三條公輝氏所藏

別當參議從三位行皇后宮大夫兼勘解由長官右衛門督備前權守藤原朝臣公任傳宣、典侍從五位上藤原朝臣灌子宣、奉 勅、大和國司解狀、爲右(天)臣家使內藏秋茂、紀光延、前司橋俊齊朝臣等、淡海兼正、不知姓永正等、打開添下郡司常世澄明私宅、搜取內財雜物、并殺害清(原力)秋則子者、宜任所進調度文書、勘問兼正(等力)決犯狀者、

長保元年三月廿九日

右衛門少尉(自署)兼信(奉)

仁和寺入道性仁親王廳下文

大阪府 金剛寺所藏

(編纂書) 入道二品親王廳下文

入道二品親王廳下 河內國金剛寺寺僧等

可早於當寺永代遂行結緣灌頂奉資 後白河法皇前八條院御菩提事、

右得今月 日寺解僱、寺僧等謹檢案內、當寺者草創年舊、靈効日新、黑鷲嶺之遺風、傳貝葉於二千餘廻之滅後、青龍寺之瓶水、移金蓮於三密四曼之壇前、誠是顯密兼學之道場、久修練行之古跡也、因茲、建久年中、後白河法皇前八條院、特凝叡信、忝被點御祈願寺以降、勅

免寺領正稅以下雜事被定置三綱并供僧等又抽補卅二口秀學令勤行二季傳法大會是則四海靜謐御祈禱三寶紹隆之勅願也佛法之盛于今豈其他事哉 聖慮之鑒向後殊賞我山故之者也當寺深蒙 天恩不耐地忍(思力)偏爲奉資 聖靈御菩提永欲遂行結緣灌頂凡酬四恩之廣德興三寶之妙道者高祖大師之本誓也而啓眞言上乘之 法王盍蒙灌頂始行之聽許望請恩恤早成賜嚴密御下文遂行件結緣灌頂者將誇末寺之興行彌欲仰本所之明德云々者依請早可遂行結緣灌頂之狀所仰如件寺宜承知勿違失故下

(乾元)
正安四年四月十日

公文左衛門少尉中原花押

別當法印權大僧都花押)	大	法	師花押)
法印權大僧都花押)	大	法	師花押)
法印權大僧都花押)	前壹岐守中原朝臣花押)		
法印權大僧都花押)	院司威儀	師花押)	
權大僧都花押)	威儀	師花押)	
法	威儀	師花押)	
法	威儀	師花押)	
法	威儀	師花押)	

大法 師花押)
大法 師花押)

別當法印宗清告文

京都府 石清水八幡宮所藏

維嘉禎二年歲次丙申三月戊午朔廿日丁丑石清水八幡宮別當法印大和尚位某謹抽丹棘之誠敬擊香花之奠驚覺先師法印大和尚位尊靈而言大和尚位者當宮樞要之長老釋門綱位之碩德也春禴秋嘗之靈壇久祝蘿圖一萬歲之聖運潢汚行潦之宗廟早繼栢城三十代之祠官思風外動之故嗜以華山僧正之雅詠發露內催之故蓄以金刹佛果之勝因然間新古今集編次之時抽其篇什令列歌仙而物故之後不知稱謂綜緝之中空被棄捐愁緒是深鬱念未休之間某永拋六義之業殆失累門之塵勢於是當先皇御宇有新(後堀河)勅撰集先師遺篇今般相加元久緇帙之末雖含漏脫之恨天福玉章之內猶喜採用之儀匪啻發亡魂之光華旁所添微質之眉目也(下略)

近衛家實上表

京都府 陽明文庫所藏

臣 言去月廿二日中使從四位上行左近權中將兼播磨介藤原朝臣伊平奉(後堀河天皇)王言於中禁之闕返臣表於少昊之墟九臯介鳥之警露也聲喚空疲三山巨鼃之持浪也最負爭耐

進退惟谷、方寸畏途、臣誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、夫以、致治之道、在於求賢審官、爲政之基、在於揚清激濁、故商武擢伊水之賢、山無扶蘇之才、姬文携滋泉之老、野輟伐檀之詠、振古如此、來今宜然者也、而臣幸以世祿之稟家、旁有皇澤之溢涯、所歷者、山西山東之任也、猥踰父祖二代之芳蹤、所播者、鳳轄鳳辰之榮也、久裨聖哲三朝之洪化、魏玄成之數十萬言矣、陳諫隔譽、周伯陽之八十一章焉、滿盈恐誠、衆毀所歸、不寒而栗、三花欲謝、豈空浮華、誠是臣之順君命、招虛受之咎、而何爲、君之抽臣愚、遺謬舉之訕、而無益、爲臣不辭之、爲君強辭之、彼彭澤春暮、陶淵明之柳煙老、台嶺秋闌、徐先生之松霜寒、早廻蒲輪、定出蕙帳、方今

陛下繼連胥之絕軌、蹈軒項之良規、舉士平平、頻奏英泉之瑞、群官棣棣、互表蘭石之貞、當斯士之朝端、何用少才之地量、伏願特褰璜纘、照以丹襟、幼主侑齊之儀、拜觀有歡、微臣愚魯之性、高尚難遂、唯避乘石之權、聊休踏地之思、不耐荷戴、征營之至、謹重拜表、陳乞以聞、臣誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

承久三年十一月 日

攝政從一位臣藤原朝臣

天台法華會款狀

滋賀縣 園城寺所藏

園城寺權僧正法印大和尚位 諱映、誠惶誠恐謹言、請特蒙

天恩、因准先例、被補天台法華會廣學堅義探題職之狀、

右謹考舊貫、堅義探題職者、在吾釋門、開宗風之重任、至夫皇天降恩、露之大命、苟非解行兼備、教觀並到、而證明群疑、研究幽顯之良才、不足以荷重任、奉大命也、爰臣僧諱映、雖久浴三井之法水、却昏五智之學源、襟馬之譏、不免於前、戴盆之責、兼慙於後、雖然、幸經兩會之問、堅而猥踐先哲之高蹤、雖自知非其才、無奈正當其任、於是不顧固陋、追尋先軌、謹捧丹款、伏乞

天恩垂 叡察、蠢愚潤慈海、因准先例、被補件職者、奉彌祝 寶祚無疆、益祈 帝都安泰、臨表悚戰、不堪懇款之至、誠惶誠恐、謹言、

寬保二年六月十三日

權僧正法印諱映上

讚岐國司解

北白川宮御所藏

讚岐國司解 申言上改姓人事

合陸烟 並爲和氣公

那珂郡參烟(中略)

多度郡參烟(中略)

右被民部省去貞觀八年十一月四日符傳、太政官去十月廿七日符傳、得彼國解傳、管那珂多度郡司解狀傳、秋主等解狀傳、謹案太政官去大同二年三月廿三日符傳、右大臣宣奉^(平城天皇)勅、諸氏雜姓、概多錯謬、或宗異姓同、本源難辨、或嫌賤假貴、枝派無別、此而不正、豈稱實錄、撰定之後、何更刊改、宜檢故記、請改姓輩、限今年內、任令申畢者、諸國承知、依宣行之者、國依符旨、下知諸郡、爰祖父國益、道麻呂等、檢據實錄、進本系帳、并請改姓狀、復案舊跡、依太政官延曆十八年十二月廿九日符旨、共伊豫別公等、具注為同宗之由、即十九年七月十日進上之矣、而報符未下、祖耶已沒、秋主等幸荷繼絕之恩、勅、久悲素情之未允、加以因支兩字、義理無憑、別公本姓亦涉忌諱、當今 聖明照臨、昆虫霑 恩、望請幸被言上、忍尾五世孫少初位、上身之苗裔在此部者、皆據元祖所封郡名、賜和氣公姓、將貽榮于後代者、郡司引檢舊記、所申有道、仍請國裁者、國司覆^(寄力)□所陳不虛、謹請官裁者、右大臣宣奉^(清和天皇)勅、依請者、省宜承知、依宣行者、國宜承知、依件行之者、具錄于預改姓之人等夾名、言上如件、謹解、

貞觀九年二月十六日

正六位上行大目秦忌寸安統

參議右衛門督正四位下兼行守藤原朝臣^(在京下略)

石清水八幡宮祠官連署申狀案

京都府 石清水八幡宮所藏

^(堀真書)僧正願之連著

石清水社務等奉願僧正一同言上

八幡宮大自在王菩薩者、本朝第二之 宗廟也、於宇佐宮行教和尚蒙神託、奉遷座男山、清和天皇 勅製廟壇、自爾以來、天下泰平、四海靜謐、王城鎮護之神誓、歷代新也、放生勅會之來由者、後三條院青園 仁大坐之時、天祚^乎令保給^{倍良}者、每年八月十五日放生之時、仁前後二日^乎加^且三箇日^乎限、件事嚴^久行賜^{波牟}止^{思食喜}、爰爾大神宮^乃冥感^爾依^且、天之日嗣^乎傳給^{倍利}、因茲一員之儀式、三所神幸異他、祖師行教和尚者、棟梁臣武內之末苗、贈^(天)大政大臣紀朝臣之後胤、大納言古佐美卿之孫、參議廣濱卿之子也、社務之初、益信檢校大僧正者、行教和尚之弟也、相續之祠官等、蒙 勸賞者、

鳥羽院御宇、天承元年、祠官法印權大僧都光清、初而被聽三壺仙籍警蹕、

後白河法皇御幸當宮之時、仁安二年正月、社務勝清被召馬場殿、資賢卿為奉行、擬僧正着香染、准法務可追隱之旨、院宣、

後鳥羽院御宇、建久三年八月十四日、檢校法印成清、被聽香染裘袋、明日放生會可着之旨、

宣下、

後嵯峨院、始而臨幸當宮之時、資平卿爲奉行、檢校法印宮清、下賜 御服紫袍、可着之旨
院宣、

後嵯峨院、香染裘袋之御衣下賜、尙清有着用、而可從神事等之由、被 仰出、此尙清、實者忝
茂

後嵯峨院之皇胤也、宗廟御敬神之餘、大納言局懷胎之時、下賜宮清、而生一子、尙清是也、
往古 官府 院宣、仁、門跡號被載之、當宮之祠官等、不類餘社之祠官、被聽昇殿、得度以前、
有童殿上之儀、且亦不類諸寺之僧徒、直叙法眼、被准僧正、香染裘袋、令着用之、苟祠官等、稟
武內大臣之餘裔、而奉仕者 皇大神宮宗廟也、被任者法印權大僧都也、當時妻帶之僧、極
官之傍例、數多有之、近年

公武御信仰之故、久數斷絕之放生大會御再興有之、仰願者、以檢校益信大僧正之古例、於
奉蒙僧正 勅許者、宗廟之威光也、被任之祠官等、鎮跪 宗廟之神前、彌欲奉祈天下泰
平 朝廷安全 寶祚長久御願、仍誠恐誠惶、謹言頓首、

天和二年四月五日

別當法印權大僧都央清

前檢校法印權大僧都要清
檢校法印權大僧都晃清

廣橋前中納言殿

右檢校新善法寺晃清注之、傳 奏 江持參以後、被見案文、連書之中、略雖有不審之處、言
上之後故、不及是非也、武家之傳奏 江相談之以後、庭田源頭中將 平、以可有披露之由、往
古宰相資賢卿奉行之因緣相續、歟、珍重、

宏覺禪師祈願文

京都府 正傳寺所藏

正傳寺住持老僧東巖 慧安

正傳寺知事妙智
福田庵檀那佛心

大衆 先內衆

禪聖 覺心 大明 理觀 道眼 圓覺 唯心 親緣 了達 明仁

如實 慈雲 法雲 道惠 淨雲

次外衆

親助 隆豪 覺源 一圓 覺淨 俊譽

再拜 一心啓白

八幡大菩薩并六十餘州五畿七道一切善神等蒙古邊州貪人妄敵對此神國而令來入於兩度牒使先度無返牒似處無增我國勢然今度有返牒剩應及和親云云情案此事愁歎無極悲徹骨髓故廻愚意願上古助神慮以諸大乘經大神咒大明咒有啓白有發願去年大歲己巳十二月廿七日於當社寶前開白今年大歲庚午三月朔日於正傳寺結願六十三日行業連連無廢五百万遍經王神咒歷歷貫玉先祈念 八幡大菩薩法樂莊嚴威光倍增後祈請

國主聖朝師子虎狼大勢高運願望不虛任先度例成無返牒之義又相當結願日爲彼牒使有靈夢作千萬怖畏還爲神國對

君臣上下懇望而和親重獻蒙古毛冠是偏降伏先瑞也慧安一昨日見此事歡喜之餘差僧令社參并奉獻蒙古牒使願文伏乞八幡大菩薩百皇鎮護誓約無忘却無變改垂慈愍矣

文永七年庚午五月廿六日

慧安再拜

德川家光都狀

子爵土御門照光氏所藏

謹上 天曹地府十二冥官尊神等

都狀

南浮州日本國征夷大將軍淳和院別當正二位守內大臣源朝臣家光廿甲辰歲謹啓就今

度將軍 宣下天曹地府水官北帝大王五道大神泰山府君司命司祿六曹判官南斗北斗星君家親丈人十二神等從今夜設一七日祭場抽精誠備十二座之珍供所致禮奠者夫握三海之權威于握中躬四夷之撫育于躬上外恐天之命內守世之淳（威力）宣下居顯職似有其恐懼因茲告于天神地祇所祈者天下大平國土安全武運長久子孫繁榮身體無恙命者保龜鶴之齡□者呈鳳麟之瑞萬世無極令守護給（中略）萬福無限如有始而無終武運長昌夜守晝守仁守幸給江征夷將軍淳和院別當正二位守內大臣源朝臣家光猶以心中諸願一々令成就圓滿如神明（之力）靈鏡奉祈謹啓

元和九年七月

征夷大將軍淳和院別當正二位守內大臣源朝臣

藤原能保施行狀

實簡集七
和歌山縣

金剛峯寺所藏

（藤原能保）
花押

備後國大田庄者自

院（後白河）令寄進高野大塔領御了云々而武士致押領之間依

院宣（源賴朝）自鎌倉殿早可令停止之由令成重御下文給了而尙背彼御下文狀致濫行之由有其

聞事實者尤不隱便不用

院宣、鎌倉殿御下文、致自由濫吹之條、所行之旨、甚不當也、早任件等狀、可令停止彼濫妨者、依

右兵衛督殿仰、下知如件、

文治二年十二月廿六日

畠山道端滿家安堵狀

大阪府 金剛寺所藏

河内國天野山金剛寺雜掌申之間事、

右任代々、宣旨院宣手繼證文之旨、令免除四至内田畠山野以下之所當官物并國役臨時雜事、所禁斷殺生也、然者守此旨、可全寺務之狀如件、

應永十六年五月十三日

沙彌(花押)

當寺住侶之中

藤原佐理消息

山下龜三郎氏所藏

(草名)謹言、頭辨昨日參宮之由、傳承侍、氣色如何、不審々々、(草名)申請雜事、被附彼貫主了云々、而昨從或人許告、未達、天聽者、太所鬱奇也、此事本意、只遂、奏聞、爲備後生之辨也、中間又被抑留、爲之如何々々、諸在參入之次、(草名)謹言、

三月九日

權太夫(花押)

相良爲續書狀裏書

子爵相良頼綱氏所藏

相良左衛門尉藤原爲續殿御連哥付句入于新撰菟玖波集分拔書(中略)

右件撰集事、以、勅定宗祇老禪遂終備、明應四年卯乙六月十九日

奏覽畢、左衛門尉爲續句令入于此集給事、偏依從四位上左京兆尹多々良政弘朝臣御

芳恩、達名望之旨、一段忝之由、連々蒙仰之通、某正任存知彼御素意之間、今日相當七回

忌、追慕愁歎之餘、披尊書拜見之次、不願憚、於彼玉章之裏、令書寫彼御句五句、以奉獻呈

無量壽院殿西華蓮船大禪定門眞前、擬稱名念佛回向所希云、

相良遠江入道俗名正任

永正三年丙寅六月廿日

沙彌シヤツシ正任九拜

長屋王願經奧書

大般若波羅蜜多經卷第二百四十八
男爵藤田光一所藏

藤原宮御寓、天皇、以慶雲四年六月十五日登遐、三光慘然、四海遏密、長屋殿下、地極天倫、

情深福報、乃爲

天皇、敬寫大般若經六百卷、用盡酸割之誠焉、

第二節 敬語及び書式 第二款 書式 三

經典日記
の序跋
の類
に於ける
文籍の類
出に於ける
字

和銅五年歲次壬子十一月十五日庚辰竟

光明皇后御願一切經奧書

華嚴經論卷十八
正倉院御物

皇后藤原氏光明子奉爲

尊考贈正一位太政大臣天府君、尊妣贈從一位橘氏太夫人、敬寫一切經論及律、莊嚴既了、伏願遷斯勝因、奉資冥助、永庇菩提之樹、長遊般若之津、又願上奉聖武天皇、聖朝恒延福壽、下及寮采、共盡忠節、又光明子、自發誓言、弘濟沉淪、勤除煩障、妙窮諸法、早契菩提、乃至傳燈無窮、流布天下、聞名持卷、獲福消災、一切迷方、會歸覺路、

天平十二年五月一日記

櫻町天皇宸筆外題大般若經奧書

大般若波羅蜜多經卷第六百
滋賀縣園城寺所藏

大般若經六百卷者

女院依 御願、自延享三年九月廿五日寫 御給、偶遇

櫻町院崩以來 御意、專在其 御追福、

桃園院崩後、增日課彌陀寶號遍數給故、不堪寫

御、自寶曆十二年九月祐常奉 宣、自第四百八十七卷

三百四十一行書寫之、明和二年六月朔日、書功成、與權僧正常秀者校訂、獻之
女院、

櫻町太上天皇在極日、宸翰令書外題給也、明和六年九月八日、明發御文庫有火、御經在火中、依然如故、法之尚可仰、豈不感戴哉、件御經、永可納圓滿院寶藏之旨有
宣、今月今日給之、是日課念佛相續不退、極樂淨土

上品上生 御願成就、殊

櫻町院、

桃園院及寶蓮華院宮、先考、先妣、六趣四生群類、願以此功德、普及於一切

御願成辨之處也、云爾、

明和七年十二月廿八日 園城寺長吏前大僧正法印大和尚位祐常謹誌

御堂關白記

京都府 陽明文庫所藏 寬弘四年八月廿日癸丑、相撲五番有召事、

如前儀、是余藤原道長不參召合、仍有二條天皇御意、恐申無極、入夜事了、

壬生官務家日記抄

京都帝國大學所藏

弘安四年閏七月

二日、

今曉寅刻、(後宇多天皇)行幸太政官、依異國御祈、爲(合殿遣力)伊世公卿、勅使、任延久建久(例力)、依可有臨幸神祇官也、勅使中(御)門(天納意)經任卿、

九日、

藏人佐俊定内々示合云、依異國事、諸社職掌人、可警固本社事並寺社權門領、本所一圓地庄官以下、(隨力)武家下知、可向戰場事、兩條(可)仍准據、宣旨、大切云々、

吉田兼敦記

子爵吉田良兼氏所藏

應永九年三月廿日癸卯、早且著狩衣、(後龜山法皇)蘇芳、(後龜山法皇)文藤、(後龜山法皇)參、(後龜山法皇)仙洞、(後龜山法皇)大覺寺殿、參昇佛母心院中門、阿

野前中納言、(狩衣)狩衣、出對、聊言談、即被奏參仕由、須臾家長、(布衣)布衣、來告召由、則經渡殿、參上常御所、出御、(御衣白、文菊)御衣白、(文菊)文菊、西弘間御坐大文、(二帖、此外)二帖、(此外)此外、不予候、簀子前黃門祇候同所、(予參御)予參御之、(立退)立退、予依再三之召、參廂之處、有可被仰談事、近々可參之由、被仰下之、暫雖斟酌頗依有其召、參御前、以外咫尺、恐懼不少者也、日本紀大意被尋下也、大概言上之、以便宜、可有御聽聞之旨、被仰下之、此後元弘建武以來、世上之轉變、先皇遺詔、明德御合體、御入洛之

次第以下、具被仰下、(念力)不違于羅縷、所詮於

聖運之泰否者、偏任 天道 神慮、(民間之憂之條、爲御本意之趣、被仰下之、觀慮之奧旨、直被)勅言、面目之至也、此等之 勅定移刻、入御之後、退出之處、以家長被下御劍一腰、(白、)白麻十帖了、眉目所畏存也、委細亦以三條前大納言、(實兄、)實兄、并阿野前中納言有被仰下旨、

家熙公記

京都府 陽明文庫所藏

元祿四年九月廿五日丙子、未明向青門主、政所

渡御、終日有能興、(大夫金春以、)大夫金春以、(上十一番也、)上十一番也、入夜歸宅、留主間、頭辨爲、(東山天皇)勅問被來、非指事間、不及即答、終日不參殿下、

寶永五年正月八日、有召、晚頭參 内、伺候御前、新殿安鎮、可被用閏月乎否、先例不分明、可

勘試之旨、蒙仰退出、

花園天皇御畫像後花園天皇宸筆御贊

京都府 妙心寺所藏

傳如來正法、

坐玉鳳禪宮、

稽首

花園帝萬

年護日東

妙心寺住持雪江

依所望書之

新千載和歌集奧書

侯爵淺野長武氏所藏

此兩帖雖為古本處々不審多仍以一兩之證本依

(後土御門天皇)
仰注直付訖

于時文明十年二月廿三日

按察使親長

後柏原天皇宸筆古今和歌集奧書

此集 先皇 後柏原院 宸筆也

(後奈良天皇)
今上儲君之日

於儲宮讀申源氏物語一部竟宴之日所賜之本也深秘箱底頃大覺寺

准后深耽此道往復日密而奉見之頗有欲之氣感其志奉附屬者也于時(弘治元)天文廿四年四

月十八日

稱名野柄仍覺(花押)

梅谷元保三千句

余壯年與江心社友聯句數年之間而畢九千句珍年世路多難風騷之會棄如土於是乎梅
阜梅谷老禪膠節絃目鼓余懶墮而比辭聯韻累年累月云々或一百句或二三百句漸積而
為三千句老禪迅筆淨書成一冊葉目見需余跋于其尾可謂好事也矣然而事達 中以經
(正親町天皇)叙覽豈非華袞之榮乎昔丁唐朝有兩翰翅云々有警句德宗內批英飛茂騰絲絃思之老
禪其猶春城無度不飛花之翰雄耶

吁

天正六禩端月吉辰

謙齋七十八禿翁周良

彥策

慶長 勅版 職原抄

上

百官

推古天皇御宇聖德太子攝政十二年甲子正月始定冠位十二階 孝德天皇大化五年
始置八省百官先是大臣大連號有之 文武天皇大寶元年正一位藤原太政大臣淡海公不

比等、奉勅撰律令、以官位及職員爲其首、是也

惺窩先生文集

二七言絕句 禁庭櫻花

亂於雲又湧於霞、櫻樹連邊緩曳靴、歸程誰識拜

天賜吟衣猶帶

御前花、

貞安和尚畫像贊

京都府 大雲院所藏

原夫、我高祖教蓮社貞安和尚、字退魯、姓平、北條氏、初父母祈天得娠、生而岐嶷拔羣、四歲母亡、明年父死戰、而養姨母、十一歲從堯譽上人、祝髮受戒、及堯譽寂、事見譽上人、孳孳克勤、盡嗣淨家之正脉、三十五歲道義鳴世、聞風而臻者甚蕃、正親町天皇賜號聖譽上人、(中略) 天正中、奉 天皇詔、入宮談淨土之奧義、天皇賜僧伽梨大衣、儲皇御書阿彌陀經、每每有詔、被召數回焉、(中略)

大雲院第六世嗣法沙門高譽聖傳謹誌回函

藥師寺東塔檨記

(天武) 維清原宮馭宇

天皇即位八年、庚辰之歲、建子之月、以(持統天皇)中宮不念、創此伽藍、而鋪金未遂、龍駕騰仙、(持統)大上天皇、奉遵前緒、遂成斯業、照先皇之弘誓、光後帝之玄功、道濟郡生、業傳曠劫、式於高躡、敢勒貞金、其銘曰、

巍巍蕩蕩、藥師如來、大發誓願、廣

運慈哀、猗猗聖王、仰延冥助、爰

飭靈宇、莊嚴調御、亭亭寶刹、

寂寂法城、福崇億劫、慶溢萬

齡、

萩原美努連岡萬墓誌

東京帝室博物館所藏

我祖美努岡萬連、(天武)飛鳥淨御原、(文武)天皇御世、

甲申年正月十六日、勅賜連姓、藤原宮御宇

天皇親ら御
身の事を書
したまふに
は闕字平出
の儀なし

文章同前社名使交名相替也
通貴布禰使一人、大中臣清房、已上黃紙一枚被書之、一通宿紙一枚書之、内覽奏聞奏也、以內記准據
用宿紙記此、草之時社名并使交名不載之、故實也、清書之時嚴重注之故也、只今奉行有不
審之事、清書之内、天皇朝廷乎、此段可爲平出歟之由也、予答云、凡天子當御身之文章、無闕
字平出之儀、故於内覽奏聞之草者平出相調乎、此爲草者之草故也、清書猶注草者書之、意
趣各別事也、可甘其意、

九年四月廿五日己酉、(中略)自中御門亞相書狀到來、御願文清書事、依被仰之、不審事可
被尋送、又中書一通被送之、可加點云々、仍即點遣畢、彼卿不審闕字事條々被尋之、予返答
云、寔闕字事可有議也、如草者之意者、於草者任意有闕字平出等也、其故者、以當座之義置
之也、如清書之者、天子以對神靈古皇之義有闕字平出之間、相替草者之闕字等之處之由
申遣之畢、

拾芥記 文龜元年六月廿九日、今日九條右府尙經關白宣下也、關白詔書、予草進之、清
書黃紙、草宿紙、進關白之草、同宿紙也、奏聞草八兩所有闕字平出、假令朝廷 闕字、朕字 平出
也、又進關白草、御位署之所 從一位 平出書計也、於餘處者無闕字、於清書者、一向無闕字
平出之儀、是天子自書下給之義也、詔勅宣命共同事也、

書籍の序跋
碑文、銘等
に於ける擧

五 日本書紀

勅版 職語

永正十五年十一月三日、伊勢一社奉幣被行之、自武家被付其足 七千疋 云々、上卿以下、各
有御訪、奉行頭右大辨内光朝臣參陣、辨右少辨賴繼也、宣命者、柱下爲康草進之、有辭別之
時、二通也、清書綠紙、無平出闕字等、草者宿幣、有平出闕字等、

日本書紀歷代之古史也、元正天皇養老年中、一品舍人親王、太朝臣安麻呂奉勅撰之、
吾朝撰書迄 奏覽、以是爲權輿者耶、君臣共以莫不窮此書矣、按 應神天皇以還至
繼體天皇御宇、異域典經多以雖來朝、不解其義、徒經三百有餘歲矣、推古天皇御宇、聖
德太子察三才之源、達三國之起、故始以漢字附神代之文字傍、於于爰吾邦人、浸得識量
典經之旨、非至聖誰敢成此緯哉、蓋神道者爲萬法之根柢、儒教者爲枝葉、佛教者爲花實、
彼二教者、皆是神道之末葉也、雅以枝葉顯其本原、然則異曲同工者歟、頃學儒佛者夥、而
知神書者鮮矣、物有本末、事有終始、何棄本取末焉、於神國爭疏神書乎、萬機之政、尙以神
事爲最第一、但神代事理既幽微、非理不通、欽惟

陛下(後稱成天皇)寬惠叙智之餘、後世惜其流布之不廣、遂命鳩工、於是始壽諸梓矣、舊本頗純駁不一、求
數本考正之、去其駁而錄其純、用之國而及之天下、則以成熙皞之治、以紹神尊之統、保瑞

穗之地，千五百秋，將必有賴於斯焉。

慶長己亥^(四年)姑洗吉辰

正四位下行少納言兼侍從臣清原朝臣國賢敬識

元和 皇朝類苑 跋

皇宋事實類苑吉州太守江少虞所撰也。蓋此書之趣，恐遺文逸說，可事美一時，語流千載。

者之泯絕也。其顛末詳于序文，今不復贅矣。伏惟

^(後水尾)皇帝陛下

叡智夙成之天性，柔仁博愛之至道，悉叢于

聖躬，紀綱整肅于

朝中，車書混一于海內，加之萬

機餘暇，孳孳學術，惜白駒忙於晝窓，跋紅燭轉於夜几，不啻校訂

本朝國史，特設經史子集之庫，其經營也，塗以黝堊，堆以金碧，葭棟雄麗而結霞，闌楯銜直而

炳日，意匠出巧輪焉奐焉，其前有池水漣漪湛凝碧，浮鳥戲乎其上，游鱗躍乎其中，佳木秀

而布繁陰，奇石疊而幻小峰，風致璋其庭除，如此大觀，豈可以口舌贊揚而盡哉，然而令如

薛稷馬懷素沉詮期武平一之俊才知之，於是下

勅命曰：令皇宋類苑鑲梓，其

叢旨要前人之言，往古之行，取之左右，逢其原，且又欲令天下國家之人誦斯文者，視其美以

爲勸，視其惡以爲戒，嗚乎大哉！體乎業已了畢，則先賢之言之美也，以之爲寶而玩之，則崑

山粹精之玉，不足比擬焉。高文之才之俊也，以之爲苑而遊之，則鄧林之材，鞭楠杞梓，不足

譬喻焉。況又樂花開而禮葉茂，氣焰生而麗藻光，以盡美善矣。間者辱宣

麻命於臣僧某甲曰：跋此書尾，如臣某淺術末智，醜麤之雞，坎井之蛙，如不知甕外之天，井外

之海，今又老懶眼生昏花，憑烏皮着睡，工夫之外，別無一所爲，何以與毛刺史楮先生從事

哉。雖然固辭固請，普天率土無處回避，故綴荒蕪詞，塵蹟

宸眷，惟深慚縮，臣某不勝蒙恩遇，故奉謝其萬一，跋非臣敢所書。

元和七年重光作噩六月晦日

前南禪臣僧瑞保護書

大日本史 大日本史叙

先人十八歲讀伯夷傳，驟然有慕其高義，撫卷歎曰：不有載籍，虞夏之文，不可得而見，不由史筆，何以俾後之人有所觀感，於是乎慨焉立修史之志，上根據實錄，下採摭私史，旁搜名山之逸典，博索百家之祕記，綴緝數十年，勒成一書，蓋自

人皇肇基二千餘年、

神奇相承、

列聖續統、姦賊未嘗生覬窺之心、神器所在、與日月並照、猗歟盛哉、究其所原、寔由

祖宗仁澤、固結民心、磐石邦基也、其明良際會、都兪吁咈之美、考諸舊記、可以概見、迨乎中葉

英主迭興、持盈守成、嘉謨徽猷、莫愧于古、而文獻不脩、明辟賢輔之迹、多堙晦不章者、豈不重

可惜乎、此斯書之所以作也、綱條在膝下、每聞其言曰、史者所以記事也、據事直書、勸懲自

見焉、自上世迄今、風俗醇澆、政理隆替、炤炤然如覩諸掌、善可以爲法、惡可以爲戒、而使亂

賊之徒、知所懼、將以裨益世教、維持綱常、文不可不直、事不可不核、如有所出入左右、則豈

可謂之信史乎、如是書則、惟務其實、不求其華、寧失於繁、莫過於簡、至其刪裁、姑有俟乎大

手筆、書未及成、先人即世、綱條雖無似、服膺遺囑、罔敢失墜、閱十餘年、按訂略完、自

神武至

後小松、歷世一百、立爲本紀七十三、列傳一百七十、都二百四十三卷、名曰大日本史、非敢謂

昭代之成典、乃備後來修史者之採擇爾、若夫時運開塞、行事得失、可以爲勸、可以爲戒者、

悉據事直書、不敢有所出入左右、亦所以遵奉先人之意也、

正德五年乙未十一月

權中納言從三位源綱條謹序

常山文集

附錄 義公行實

(延寶)三年乙卯正月、應

後西院帝制賦雪朝遠望詩、作啓寄天龍寺僧虎林上之、五年丁巳五月、就藩、是歲、養妹夫周

防守酒井忠治女、爲妹玉峰雄譽弟子、住鎌倉英勝寺、六年戊午正月、所編纂和文三十卷

成、

後西院帝、賜名扶桑拾葉集、以準奉

敕撰、二月參府、十一月爲世子、娶今出川右大臣藤原公規公女、十二月婚成、八年庚申三

月、繕寫扶桑拾葉集、上表

後西院帝獻之、四月、獻之於 幕府、十一月、獻之於

禁闕、天和元年辛酉、前大納言源通茂卿傳

後西院帝敕、進呈公所賦詩歌若干首、二年壬戌八月、朝鮮聘使尹趾完、李彥綱、朴慶後、至江

戶、賀

常憲公嗣位、三使以同知、僉知三人爲使、齎方物、抵小石川邸、儀爽於禮、遣臣願言詰問之、

一曰所贈土宜唯錄品數不具姓名二曰楮尾押一印稱三使所贈三曰見印文二字疑是尹公之字乎古人於交際自稱名不稱字以爲通式竊有所疑蓋貴國之法乎願聞之三使不能答頃之作簡寄三使贈白金三百兩三使不敢受議欲復書備禮使上判事來謝前過以再使非例諭止之三使就對馬守宗義眞復書公再寄簡遂受之三使上途公作送行詩三首副以本邦所出各樣紙七品寄之神奈川驛三使各次韻謝焉十月就藩十二月兵部少輔安倍泰福朝臣傳

詔作

後水尾帝遺物鳳足硯銘并序上之三年癸亥正月參議平時成卿傳

詔折衷類例考索舊記上立坊立后儀節二月賜

宸奎嘉獎硯銘有備武兼文絕代名士之聖語公用爲印文八月參府貞享元年甲子正月就兵部少輔安倍泰福朝臣獻尙齒會詩一卷於

禁闕十二月又就泰福朝臣獻五月雨記一卷皆

敕諭嘉獎之(中略)所著詩文和歌常山文集二十卷常山詠草五卷其所參訂六國史都氏文集惶窩文集繩愆糾謬皆有裨于後世徧募名山石室之書務招文學之士編削考訂

殆無虛日曰大日本史曰禮儀類典皆爲巨帙貞享中類典彙成就右大臣公規公取進止以其撰次稱

旨特出秘閣書若干帙而借之參互蒐緝遂得大成其餘病文誇實淆則有保元平治盛衰太平記之參考懼神道乖繆則有集成之書歎古語艱澁則有萬葉之解慨英雄之陳迹感陵谷之變遷則有鎌倉之志慕文獻之興隆嗟英華之萎恭則有詩文之纂明氏族流派則有系譜之補甄

幕府功臣則有將士之選慮文案失驗艸書難辨則有花押藪艸露貫珠之編審士人之品流譜牒數郡邑之沿革廢置則有水府系纂常陸國誌之述晚年好作詩餘往往用洪武韻每謂其書成於王命而詩賦從沈韻何也乃命效僧師鍊書撰洪武聚分韻公生長治平未嘗斯須忘警戒雖老且病每出不步則馬不復輿輻或忍飢或涉險單衣冒雨雪海舶觸風濤深惡狃安以身先之而備邦家一日之虞也每歲敕使賚賜至朝宿邸公禮接之卽命駕往謝先是

敕使至邸遣使謝之三家皆同公謂非禮自往謝之以爲恒式親王大臣臨邸亦如此元旦夙朝服遙拜京師至老不廢每大風地大震馳書左兵衛督梶定良問日光山神廟遣使

東叡山增上寺以問 靈殿之安否其尊

王室敬 祖宗率此類也〔安積覺享保八年跋〕

國史略 國史略序

我

大日本環海帶山別具一寰宇

二尊開國

天孫繼統億兆尊戴與天地無極矣若夫海西之邦自稱聖賢禮樂之域而迄叔季之世大義湮滅篡奪相尋至有歲一易主者宣尼所謂周公其衰也者非耶大學晉博士松苗今著是編乃撮國史之要省重從簡以便幼學且令知

我邦

上下守分黎庶安業熙熙乎金甌無缺之中禮樂之大本長存焉所以冠絕萬國也時

文政九年春三月

前內大臣藤原公修撰

弘道館記

弘道者何人能弘道也道者何天地之大經而生民不可須臾離者也弘道之館何爲而設也恭惟上古

神聖立極垂統天地位焉萬物育焉其所以照臨六合統御寰內者未嘗不由斯道也寶祚以之無窮國體以之尊嚴蒼生以之安寧蠻夷戎狄以之率服而

聖子神孫尙不肯自足樂取於人以爲善乃若西土唐虞三代之治教資以贊

皇猷於是斯道愈大愈明而無復尙焉中世以降異端邪說誣民惑世俗儒曲學舍此從彼

皇化陵夷禍亂相踵大道之不明於世也蓋亦久矣我

東照宮撥亂反正尊

王攘夷允武允文以開太平之基吾祖 威公實受封於東土夙慕

日本武尊之爲人尊神道繕武備 義公繼述嘗發感於夷齊更崇儒教明倫正名以藩屏

於 國家爾來百數十年世承遺緒沐浴恩澤以至今日則苟爲臣子者豈可弗思所以

推弘斯道發揚 先德乎此則館之所以爲設也抑夫祀

建御雷神者何以其亮天功於草昧留威靈於茲土欲原其始報其本使民知斯道之所繇

來也其營孔子廟者何以唐虞三代之道折衷於此欲欽其德資其教使人知斯道之所以

益大且明，不偶然也。嗚呼我國中士民，夙夜匪懈，出入斯館，奉神州之道，資西土之教，忠孝无二，文武不岐，學問事業，不殊其效，敬神崇儒，無有偏黨，集衆思，宣群力，以報

國家無窮之恩，則豈徒祖宗之志弗墜。

神皇在天之靈，亦將降鑒焉。設斯館以統其治教者，誰權中納言從三位源朝臣齊昭也。

天保九年歲次戊戌春三月

齊昭撰文并書及篆額

達磨寺石幢

達磨寺中興記

達磨寺，在和之片岡，俗稱曰墳焉。初山名金吾公，巨川居士，承黑川月菴和尚之訓，許一詣其處，脩敬，然官事倥傯，不如願，久之，偶鹿苑相公，枉駕南京西大，扈從以往，計去此不遠，白以夙志，相公允之，到則破屋一間，祖師

上宮太子二像，偶坐有一禪衲，居守焉。涼烟白草，寥聞可念，便捨百緡，屬居僧，設藩垣，禁樵牧，前架一字，以爲來者焚脩之地。相公聞之，下令旁近緡白，以嚴防衛，既而勝定相公繼體，素嚮心宗，公亦從之，施置莊產，擇有道者，以居之，將營構焉。而府務殷繁，日未暇給，和乃春日社封邑，而興福柄其治，東大左右之，故法相華嚴兩流，根據頡頏，以爲儻使禪

利勃興則精采爲之曠奪，不利於己，百方支吾，不樂成立。今相始政，聞伺儻恣不逞之徒，破盪室廡，毀損尊像，占莊田，以爲己有，衲侶皆雲鳥逝，事聞，相公赫然曰：侮聖蔑公，有如此者哉！將大行黜罰，初倡亂，徒立被惡疾，殞生者數輩，加以府命之嚴，遁逃四散，不可蹤跡，便召諸衲，安住如故，莊產咸復于舊，親戒工，重飾像設，最極莊麗。又云：寺制宜准大方叢規，主者非其人則不可。公復舉南峯禪師，以應其選。京城大小利籍名者，隨職司崇卑，出貨泉，以相厥事。南峰先就墳處，創高顯一基，工者奏伎，壯者獻力，不督而集，四阿疊壘，新像安奉其位，以

上宮配享，而毘耶之室，大雄之殿，庫司僧堂，次第就緒，才五六春秋而已。輪奐絢爛，過者拭目，嗚乎！蘇推古癸酉，至永享紀元，既得八百餘歲，一抔之土，鞠成樞翳，惟金吾公，從容建白，歷三朝弗情，逮今相承，承父兄之有開，感元老之忠納，一日起數百歲積廢，再使祖宗顯煥于世，興教基於將絕，永惠命於無窮，夫謂之如何而南峯遭逢盛際，宣勞其間，與有榮耀，不亦幸也哉！凡事非緣，參會內外，相須以潰厥成者，未之有也，可謂曠古甚盛之舉矣。南峯需鄙文記之，夫古紀祖跡，海藏鉅筆削之，登諸釋書，可加一辭乎？若茲寺起而復仆，仆而益起，其顯末，苟無紀載，後世復何所徵，予雖耄及矣，不獲而拒，南峯諱能，惠峯

日東高弟侍客建仁司藏東福起自播陽西來隱處以補斯□書以附記末云、
永享七年龍集乙卯九月十又六日南禪東庵比丘惟肖得巖謹志于双桂時七十六
齡也、

謹作小偈以塞石幢之餘地云、

祖跡由來無動搖得中興記命工彫斯文歷劫留斯石假使天衣拂不消、

文安五年戊辰六月二十一日

住持比丘南峯祖能誌焉

清韓筆方廣寺大佛鐘銘

熊谷直行氏所藏

欽惟、

豐國神君昔年主普天之下君億兆之上外施仁政內歸佛乘是故天正十六戊子夏之孟、
相攸於平安城東創建大梵刹安立盧舍那大像矣蓋夫慕蘭聖武帝南京之大像晞顏賴
朝公東大之再建者也雖然慶長七臘月初四不圖羅鬱攸之變已爲烏有矣凡含齒之類、
無不歎惜粵

前征夷大將軍從一位右僕射源朝臣家康公謂

正二位右丞相豐臣朝臣秀賴公曰舍那梵刹者

豐國之創建也不幸而有變也不能無遺憾焉

右丞相何不繼 先志乎、

右丞相曰誠哉此言憑茲丕發弘願輒命片桐東市正豐臣且元再建舍那寶殿始于慶長

己酉玉成于慶長癸丑矣速畢其功者以

大樹鉤命無鹽、

右丞相志願不淺也其佛身也萬德圓滿之受用身華嚴芳上之教主也、(中略)因茲金索

篋篋以之掛着寶樓祝曰仰冀依此鴻因、

天子萬歲、

台齡千秋、 銘曰、(中略)

陰陽燮理 國家安康 四海施化 萬歲傳芳

君臣豐樂 子孫殷昌 慶雲甘露 呈瑞呈祥 佛門柱礎 法社金湯

英檀之德 水遠山長

皆慶長十九甲寅歲孟夏十六日

大檀那 正二位右丞相豐臣朝臣秀頼公

奉行 片桐東市正豐臣且元(中略)

前往東福後住南禪文英叟清韓謹書回函

生玉大安寺鐘銘

祝曰、

天子萬歲、

台齡千秋、

天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、

國豐民安、兵戈無用、崇德興仁、務修禮讓、

攝州大坂生玉寺町三寶山大安寺、慶長元丙申年、開山大譽上人所創建之也、(中略)

當住持

貞享三丙寅年四月八日

誓譽上人

野史 進野史跋

恭以、普天之下、莫非

上表朱印狀
清息等に於
ける據頭

王土、率土之濱、莫非

王臣、是以修文報德、備武酬恩、各盡其職焉而已矣、昔源准后著官志於關城、楠廷尉遺家訓

於櫻井、體雖各異、用自似同、斗筭小臣忠彦、誠恐誠惶、頓首頓首、死罪死罪、臣竊以為、

皇天眷命、照臨下土、自百世之後、鑒百世之前者、莫著於史籍、我

皇國開闢而來、

大寶行仁、慶雲呈祥、宰輔應職、海晏時至、既王祖述佛教、憲法永傳、王仁捧獻聖經、五常道存、

爾後古哲先賢、紹述歷史、

朝廷有史局、野有家乘、可徵治亂興廢者、文之德也、刻平寇賊姦宄者、武之力也、臣忠彦、受生

於西陲、長成於武林、弱冠辭弓馬、把耒耜、備嘗稼穡之艱難、未遑學辭章之彫飾、然性有書

癖、幽邃僻地、史籍固乏、孤陋管見、賤劣殊甚、何圖夙奉 大王殿下之恩眷、辱列侍臣、洪澤

溢於胸襟、明恩浹於骨髓、思所以報効其萬一、幸浴昇平之餘澤、猥閱青史之古籍、流俗之

情、虛誣不寡、臣忠彦、固非其職、然齎其志、雖恐僭踰之罪、竊企編纂之業、殆三十餘年於此

矣、感

天恩之無疆、歎時勢之循環、治亂興廢、吉凶榮枯、拾芥拔萃、累篇成帙、遙擬司馬遷之發憤、竊

慕水府君之盛蹤、欽仰

皇上經天緯地之明德、首述

帝王本紀、伏載創業守成之洪勳、次記武將傳、文臣奏補天浴日之功、武臣稱干城總緝之績、儒林競華袞之榮、和歌發心地之根、孝子承菽水之歡、貞烈彰節行之異、義勇有松柏之節、方技主岐黃之術、或顯丹青之妙、隱逸遊俠、姦叛逆釋、各取事實、殊載要旨、昭昭

皇化、赴武威、遙布數萬里之蠻夷、終立外國傳、明德以還、四百二十餘年之事跡、瞭如指掌、竊欲使海內人民、知治亂興亡之所以然、榮枯得失之所以繫焉、臣忠彥、草茅愚夫、叨弄禿筆、雖欲取人才不遺一善、獨奈事實泯滅而難覈、簡冊浩繁而莫盡、如臣疎淺、寧免漏逸、雖殫淘汰之勞、尙恐紬繹之短焉、然 大王殿下、垂宥含弘、而照察臣繼志述事之誠意、恭荷殿下之啓發、得塵乙夜之

清覽、一部二百九十一卷、永傳於無窮、以報

國恩、積歲志願、一旦獲伸、則臣雖死、永不朽矣、謹隨牋

上進以

聞、無任激切屏營之至、臣忠彥、誠恐誠惶、謹言、

嘉永四年六月

飯田 忠彥 上牋

豐臣秀吉朱印狀

公爵毛利元道氏所藏

朝鮮國征伐之事、遣前驅、可若篲泛塵塗者、於日域

帝都、預察焉、仍差遣羽柴對馬侍從、小西攝津守、如所思、早一國屬平均、然則大明國、亦頓何不歸掌握乎、如別幅記三列之備、逐日番々、可致先鋒、其外各々、如記錄競進、可攻伐大明、加之、即今渡海諸軍相追隨、而與俱、可出奇策、撫群民、所出號令也、如衆之所知、吾爲小臣時、或五百騎、或千騎、以小擊大、攻伏日本國中、銳士勇將、悉皆命之從、如汝等者、將數十萬之軍卒、可誅伐如處女大明國、可如山壓卵者也、匪啻大明、況亦天竺南蠻、可如此、誰不美乎、於是乃雖欲泛龍船、自爲衆之先、則諸卒不待順風、猥可解纜、若後進者、逢不意之難、則似無仁惠、是故先遣甲兵、而後不經日可航海、蓋變動無常、因敵轉化、勿忽、

文獻元 天正二十年六月三日(秀吉朱印)

羽柴安藝宰相

後光明天皇宸筆御消息

京都府 林丘寺所藏

前日之詩、二首、併梅之詩、一首、致書寫獻候、宜被備

第二節 敬語及び書式 第二款 書式 五

正月十五日

近習之中 被露

上藤局門院侍女上總消息

京都府 石清水八幡宮所藏

(本文、よく候はんとしヨリツツク)
ひろはし様へ、仰しんせられ候、たひく出入御さ候て、ひろはし様にも御きの
とくニ御さ候との事ニて御さ候ゆへ、このたひくと御ししよく當しよくのつ
とめ候わけを、御きんみ候ておかせられ候は、よく候はんと仰しんせられ候御
事にて御さ候、

くわしき御文のやう申あけり、御申あけ候とをり、きんねんは御ししよくのわけ
たちりて、

(東山天皇)
當今様御けんふく、御しよくゐのちふんの御いのり、そなたへ 仰出され候、此四月に
(明正上皇)
本院御所様 御ふれいの御いのりも、そなたへひろはし様より申まいり候か、此九月
ニはしんせんほう寺へ御申つけのよし、いかしたる御事候やと、こなたにもおほ
しめし候、そなた御いゑのとめとも御うつし候て御しん上、御らんあそはし候なを

ひろはし様へ御ないせうより、いかしたる御事候や、きかせられ候て御らんあそ
はし候はんとおほしめし候、ひとひも御ないせうより御たつねあそはし候て御ら
んあそはし候か、其御返事御かつてんまいらす候ゆへ、たゞ今は
本院御所様御機嫌もおもき折からにて候ま、ちと御機けんよきちふん、御きんみ
被成候ておかせられ候は、よく候はんと、と。

(追書)
元祿九子年 十月十六日 中亥ノ日

かつさ

田中法印様

まいる

申給へ

崇傳南禪寺入寺江湖疏

京都府 南禪寺塔頭金地院所藏

江湖 茲審

五山之上、瑞龍山太平興國南禪寺、適虛主席、由是左街 僧錄司、要扶起法門之下

衰、而聞諸

大檀越(德川家康)征夷大將軍、大將軍即降 台帖、敦請

前席建長以心禪師、禪師以其行年未迄不惑、無心于高位師表之尊、以故再三雖拒辭

曰 台命、曰衆望、弗獲免之、遂視象

本寺、此榮遷萬以加焉、可尙矣、仰

大檀越、其本心也、以謙讓爲高、是故降 帖、而後俄然辭 將位而退居矣、雖然其

長子(德川秀忠)內大臣蒙

勅命、特賜

大將軍之徽號、爵位蟬聯、文武相繼者、舉世咸謂幹 父之蠱、匪晉禪門得 大禪師、況

又 將門得

新將軍、師檀之繁榮、今在斯時矣、於是凡江西湖南之間、同結鷗社者、胥議曰、聞斯登

龍門、不可不賀、因綴儷語、以抒微忱云、

何人就功就位、

綠髮將軍領百蠻、斯師參禪參詩、金華仙伯哦七字、大衆普要聽獅吼、群臣悉賀列鸞班、

雖迫賜冰之辰、俄撰開堂之日、 共惟、

新命南禪以心大禪師、龍淵的子、駱社耆英、 松源嚮五千似華山、高峰之原建靈塔、桑城
仰百八代

莧子、加沙之影入

禁池、一色明邊未墜家聲、半夜燈前勤惜金刻、盛名責望、碧眼胡示 以心、新佛出興、烏跋

疊偶現瑞、法筵說第一義、壽算當卅七齡、谷映朱欄、秀山含古木尊、莫鎖春色、風卷白沙旋

江侵平楚、斷願修滙盟、

慶長十年龍集乙巳夏五月 日疏

太政官日誌

(明治元) 慶應四年戊辰三月 第四

二月二十八日

皇帝陛下、親シク列侯ヲ玉座近ク被爲 召、詔曰、朕夙ニ天位ヲ紹キ、今日天下一新ノ

運ニ膺リ、文武一途、公議ヲ親裁ス、國威之立不立、蒼生之安不安、朕力天職ヲ盡不盡

ニ有レハ、日夜不安寢食、甚心思ヲ勞ス、朕不肖ト雖モ、

列聖之餘業、

先帝(孝明)之遺意ヲ繼述シ、内ハ列藩萬姓ヲ撫安シ、外ハ國威ヲ海外ニ耀サン事ヲ欲ス、然ル

ニ德川慶喜不軌ヲ謀リ、天下解體、遂及騷擾、万民塗炭之苦ニ陷トス、故朕不得已、斷然親征之議ヲ決セリ、且已ニ布告セシ通リ、外國交際モ有之上ハ、將來之處置、尤重大ニ付、天下萬姓之爲ニ於テハ、萬里之波濤ヲ凌キ、身ヲ以テ難苦ニ當リ、誓テ國威ヲ海外ニ振張シ、

祖宗、

先帝之神靈ニ對ント欲ス、汝列藩、朕カ不逮ヲ佐ケ、同心協力、各其分ヲ盡シ、奮テ國家ノ爲ニ努力セヨ、

二字擡頭

六 大日本史 進大日本史表

臣治紀 言伏惟、

太陽攸照、率土莫匪

日域、

皇化所被、環海咸仰

天朝、

帝王授受

三器、徵

神聖之謨訓、

寶祚之隆、與天壤無窮、

國家治亂

一統、絕姦宄之窺竅、

威靈之遠、于華夷有光、雖然時運盛衰、蓋譬諸朝暮、是以人事得失、宜鑒於古今、彰往考來、

有述有作、勸善懲惡、或褒或貶、屬辭比事、殊方豈無載籍、詳內略外、正史固存體裁、臣治

紀、誠惶誠恐、頓首頓首、欽惟、

光格 皇帝陛下、紹

天祖之正統、

神明其德、照臨八方、

守聖人之大寶、

寬仁之政、子育羣生、

稽古立事、

恭己無爲

播文化之號於宇內，何人不遵

聖天子之風教

委獎學之任于關東，臣等嘗聞大將軍之家訓，伏念，臣材質愚鈍，學問空疎，徒承父祖餘蔭，

叨膺藩屏重寄，爵忝三位，尸素之譏難免，官帶參議，牆面之陋是慚，惟此國史責在，臣家，

欲竭忠於

本朝，蓋追孝于前人，臣五代祖，光罔，少而好學，勇乎爲義，雖身在外，乃心

王室，每慨舊史之闕文，欲修

歷世之實錄，開館聘士，輯錄名山通邑逸書，購求之切，馳使幣于遠邇，因人傳

奏、

許借

蘭臺石室祕冊，繙閱之勤，忘寢食於晝夜，貫穿馳騁，集衆技以成效，取捨裁斷，發獨得之特

見，紀志表傳，創立一家之言，筆削信疑，庶爲萬世之鑑，起自

神武，至于明德，叙次

一百代，上下二千載，闡幽微顯，原始要終，陞

（皇文天皇）
大友于帝紀，徵老翁之捧日，列

神功于后妃，揭

眞主於

遺腹，西東之爭，南北之亂，正閏

皇統，唯視

神器之在否，逆順之際，忠奸之別，是非人臣，悉由公論而折衷，知我罪我，蓋深自任，刊之正

之，有待將來，爰自高祖，綱條，以至先父，治保，按訂補修，四世之間，無怠，潤色討論，百年之

後稍定，顧此一家之撰，豈云三長之具，徒閱星霜，莫竟功緒，先，臣之所尤苦心，愚，臣何敢

不竭力，曩遭幕府催督，將使史藁上木，竊顧斯書，雖屬私撰，苟傳于世，有係

國體，昔初脫藁，假冒題號，今且鏤版，曷無

奏請，乃因百揆之吹噓，竊取

九重之進止，恭蒙

天意降鑒

許俾書名公行，於是累葉志願，一朝獲伸，踊躍奉承，感激無已，速命剞劂之工，永省繕寫之勞。先^臣所修大日本史，本紀七十三卷，列傳一百七十卷，按訂粗完，雕刻未半，其志表若干，有錄無書者，方且補修，猶未全備。^臣愚以爲，與其遷延歲月，全功告竣，不如嚴立課程，隨成

呈上，故今紀傳二十六卷，刊刻已就者，裝成一函，聊先

上送，餘將續

進，謹隨表以

聞，上塵

天覽，下情無任慚懼，戰汗屏營之至。^臣治紀，誠惶誠恐，頓首頓首，謹言。

文化七年十一月五日

參議從三位左近衛權中將^臣源朝臣^{治紀}上表

日本外史

布衣賴^襄謹再拜白

少將樂翁公閣下，^襄嘗讀宋蘇轍上韓魏公書，愛之，以爲自古進言於當世王侯者，大抵有求而自售，識者所醜，獨轍偉魏公人物，比之名山大川，欲接其言貌以養己作文之氣，

言雖近狂，其澹泊無求可知也，雖然魏公是時，猶當路秉權，人將疑轍之有求焉，

閣下今代之魏公也，而勇退高蹈，久處閑地，使^襄學轍所爲，可以無嫌矣，特貴賤懸絕，不

啻如轍於魏公，則徒仰而心嚮之而已，今茲，

尊嫡君侯膺

幕命，入朝謝

大拜之恩，^襄伏在草莽，側聞盛事，而不圖邸吏帶

閣下之命，來就^襄家，取所著私史，欲賜^襄覽，觀禮意殷勤，愧悚交至，夫^襄不敢求於

閣下，而

閣下求於^襄，^襄之榮大矣，復何所嫌而辭避乎，雖未接^襄警款，聞^襄其詞命，亦可以自壯，

於是忘其蕪穢，出以納下執事，又敢有所瀆告，轍書稱史遷文有奇氣，他日自作古史，則

論遷之疎略，輕信淺陋，無識，夫遷官太史，總領天下文籍，猶不免疎略之譏，況如^襄以寒

陋一書生，獨力罔羅古今，其不自揣而招大方嗤笑必也，然少小嗜讀國乘，每病常藩史

之浩穰，又恨其有闕，至近代之事，與夫

隆治之所由，非無先輩撰著，又未有晰其端緒，綜各家終始者，於是私做遷史世家，而加詳

備斷自源平氏至於

今代間以中興諸將及割據群雄關係治亂者家別紀之或錯而合之要覽其成敗盛衰之狀與臣屬謀戰忠邪之跡取其大體最明確者若夫博引旁搜辨拆錯銖世自有其人以為非襄輩所及也至其義例蓋亦有貽淺陋之嘲者事繫

一姓之下而不有統紀以總之列將家而雜以雄長舉今代而稱謂論說如欠尊崇者是自有說焉夫右族迭興甲起乙仆以成海宇之沿革而事不必關於

王室者我中世以還之國勢也故依實創體以形世變而其中貫以

帝系年號以表條理至大義所繫必用特書雖厠權豪於元帥隨成敗次第而因署題以見統屬而載之事實名分截然讀者自能見之至若今代稱謂則謹據

奕葉名爵天下公行之稱名實輕重按跡可知不敢私撰名號以黷今代而昧後世耳目閱首至尾睹其得失之相形明其分裂統合之所漸則今日無前之

功德有不待言者又不敢喋喋頌贊使人疑其諛與溢自謂敬之至也凡是襄區區撰述之本意不可不為

閣下一言之野人朴直以所謂無求之心著書取其簡約自便省覽始非謀公之世也所

以引据剪裁皆成一家私乘之體至寫錄體貌又一倣古史不肯學輓近之文縞是以拮据二十餘年藏之篋笥未嘗示人今乃得

閣下之寓目以取信於天下後世真意外之幸也襄雖無求於今日而不無求於千百載非經

大賢之鑒識不足以保其傳也然苟得流傳不別今與後其損益於世道人心尤不可不加謹襄也病羸不能効力父母之邦況敢望有益於世然生遭此極盛之運以其庸陋之筆墨裨補萬一焉則不負為太平之民也蘇轍謂魏公苟以為可教而教之則幸矣

閣下其亦有以教襄焉冒瀆尊嚴惶懼無已

文政十年丁亥五月廿一日布衣賴襄謹再拜白

七 太政官日誌

明治紀元戊辰年秋九月 第八十一

九月八日御布告寫

今般 御即位御大禮被為濟先例之通被為改年號候就而八是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ屢改號有之候得共自今

御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可為明治元年旨被 仰出候事

第二節 敬語及び書式 第二款 書式 七

明治以後に
於ける平出
關字

九月

法規分類大全

一 詔敕式 政體門三

外務省上申 (明治) 三年八月日開

外交書法

書翰ノ書法ハ彼我ノ榮辱ニ係ル、慎マスハアルヘカラス、因テ平出闕字ヲ分チ、又俗稱ヲ用ヒ、文格ヲ正シ、規則ヲ設ル左ノ如シ、

第一章

- 皇祖
- 皇祖祀
- 皇考
- 先帝
- 天皇
- 皇帝
- 陛下

- 至尊
- 太上天皇
- 天皇諡
- 太皇太后
- 皇太后
- 皇后

右皆平出

- 大社 陵號 乘輿 車駕 詔書 敕旨 明詔 聖化 天恩 慈旨 中宮 御
- 闕廷(庭) 朝廷 東宮 皇太子 殿下

右ノ類闕字

第二章

外國ニ對シ、其國ノ人員及文物ヲ前章ノ如ク敬稱スルハ、我贈ル所ノ書翰ニ、我闕字平出ノ例ニ倣ヒ書記スヘシ、(下略)

法令全書

明治五年 附錄太政官第十三

第二節 敬語及び書式 第二款 書式 七

八月七日〔式部寮回答〕
〔明法寮宛〕

先般擡頭闕字等之儀御間合有之候處右ハ御一新後未タ一定之御規則モ無之自今記
録ニハ左院見込之通り總テ擡頭平闕等ハ不相用様御治定相成候條此段及御回答候
也〔左院見込書並明
法寮問合書略之〕

太政官日誌

明治九年
第八十三號

○十一月廿二日

(第四百四拾三號布告)

神武天皇御陵御參拜并

孝明天皇御年祭ニ付來十年一月大和國及ヒ京都へ 行幸被 仰出候條此旨布告候
事、

但、横濱神戸ノ間、御往返共 御航海ノ筈ニ候且 御發聲ノ時日ハ、追テ布告スへ
キ事、

○十一月廿三日

本日新嘗祭宮中ニ於テ 御親祭アラセラレ、其式、式部寮七等出仕松尾相永ヲ伊勢
略之、

神宮ニ遺シテ幣帛ヲ奉ラシム去ル十日、班幣
ノ式アリ、如例、

官報

明治二十二年二月十一日
號外

告文

皇朕レ謹ミ畏ミ

皇祖

皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ舊圖ヲ
保持シテ敢テ失墜スルコト無シ願ミルニ世局ノ進運ニ膺リ人文ノ發達ニ隨ヒ宜ク

皇祖

皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ典憲ヲ成立シ條章ヲ昭示シ内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲
シ外ハ以テ臣民翼賛ノ道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益、國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ八洲民
生ノ慶福ヲ増進スヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ制定ス惟フニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス而シテ朕カ躬ニ逮テ
時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ洵ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ皇朕レ仰テ

皇祖

皇宗及

皇考ノ神祐ヲ禱リ併セテ朕カ現在及將來ニ臣民ニ率先シ此ノ憲章ヲ履行シテ愆ラ
サラムコトヲ誓フ庶幾クハ

神靈此レヲ鑒ミタマヘ

法規分類大全

二 政體門三
詔敕式

文部大臣訓示

(明治)二十三年十月三十一日

謹テ惟フニ我カ

(明治)天皇陛下深ク臣民ノ教育ニ軫念シタマヒ茲ニ忝ク

勅語ヲ下シタマフ顯正職ヲ文部ニ奉シ躬重任ヲ荷ヒ日夕省思シテ嚮フ所ヲ愆ラン
コトヲ恐ル今

勅語ヲ奉承シテ感奮措ク能ハス謹テ

勅語ノ謄本ヲ作り普ク之ヲ全國ノ學校ニ頒ツ凡ソ教育ノ職ニ在ル者須ク常ニ聖意
ヲ奉體シテ研磨薰陶ノ務ヲ怠ラサルヘク殊ニ學校ノ式日及其他便宜時日ヲ定メ生
徒ヲ會集シテ

勅語ヲ奉體シ且意ヲ加ヘテ諄諄誨告シ生徒ヲシテ夙夜ニ佩服スル所アラシムヘシ

第三節 御名

第一款 總說

御名に關する制は、上代に在りては明らかならざるもの多し。仁
明天皇より以後は歷代天皇概ね漢風に依り二字の嘉字を御名と
爲したまひ、命名の儀亦次いで備はるに至りたれども、淳和天皇に

至るまでは、御名は總て我が固有の國語に據り、之を記すべき文字は必ずしも整はず、命名の儀も亦一定するに至らざりしが如し。就中、推古天皇以前歷代天皇の御名は、日本書紀の所載と其の他の古書の所載と文字を異にするもの多く、是蓋し後世漢字を以て我が固有の國語に充てたるに由る。其の御名として古書に傳ふる所も、一天皇に付き必ずしも一に止まらざるのみならず、其の中には、果して後世に於けるが如く、御即位前の命名に係るものなりや否や、明らかならざるもの少しとせず。殊に上代天皇の御名には、君主の稜威を稱へ奉る語を用ひたるもの多く、此等は後世の御名とは異なり、御即位の後に他より奉りし尊稱なりしことを推知し得べし。

神武天皇より淳和天皇に至る歷代天皇の御名に付き謹みて按ず

るに、上古に在りては、聖德稜威を稱へ奉る意を表せるもの殊に多し。神武天皇の御名神日本磐余彦を始め、懿德天皇の御名大日本彦耜友、孝安天皇の御名日本足彦國押人、開化天皇の御名稚日本根子彦大日日の如き、何れも日本に君臨したまふことの意を表せる尊稱なりと推せらる。其の外、景行天皇の御名大足彦忍代別、宣化天皇の御名武小廣國押盾、欽明天皇の御名天國排開廣庭、皇極天皇の御名天豐財重日足姬、孝德天皇の御名天萬豐日、天智天皇の御名天命開別、天武天皇の御名天淳中原瀛真人の如き、亦稜威を稱へ奉る美稱なり。

此等の美稱の外に、或は御在所其の他の地名を以て御名と爲したまへるもあり。安康天皇の御名穴穗、雄略天皇の御名大泊瀨、用明天皇の御名池邊は其の例なり。聖德稜威を稱へ奉る美稱の中に

も、神武天皇の御名神日本磐余彦の磐余、綏靖天皇の御名神淳名川耳の淳名川の如く、其の一部に地名を加へたるもの少からず。或は御誕生の緣由又は玉姿の特象に因り御名と爲したまへるもあり。應神天皇の御名譽田、仁德天皇の御名大鷦鷯、反正天皇の御名瑞齒別、清寧天皇の御名白髮、舒明天皇の御名息長足日廣額は其の例なり。或は御名の一部に大小長幼の意を表す語を用ひ、以て父子兄弟等の序次を示せるもあり。景行天皇の御名大足彦忍代別と成務天皇の御名稚足彦、雄略天皇の御名大泊瀨幼武と武烈天皇の御名小泊瀨稚鷦鷯、仁賢天皇の御名億計と顯宗天皇の御名弘計との如き其の例なり。或は御生母の名を以て御名と爲したまへるもあり。舒明天皇の御名田村、弘文天皇の御名伊賀は其の例なり。或は御乳母の姓を以て御名と爲したまへるもあり。

崇峻天皇の御名泊瀨部、天智天皇の御名葛城、孝謙天皇の御名阿倍、平城天皇の御名小殿、嵯峨天皇の御名神野は其の例なり。殊に奈良時代以後は乳母の姓を以て御名と爲す慣習ありしもの、如く、文德實錄には、嵯峨天皇の御名の緣由を記して「天皇誕生、有乳母、姓神野、先朝之制、每皇子生、以乳母姓爲之名焉、故以神野爲天皇諱」と見えたり。

此の時代に於ける命名の制に付いては、資料の徴すべきもの乏しく、正確には之を知るに由なし。古事記垂仁天皇の條に「天皇命詔、其后言、凡子名必母名、何稱是子之御名、爾答曰、今當火燒稻城之時而、火中所生故、其御名宜稱本牟智和氣御子」とあり、古事記傳には之に註して「さて凡て子の名をば、其母の命しことは（中略）神代よりの禮なりけり」と曰へりと雖も、常に然りしや否やは明らかならず。

第五十四代仁明天皇の御名正良を初め、爾來歷代の天皇は何れも二字の漢字より成る御名を名のらせたまふ。神皇正統記に仁明天皇の諱に註して「是よりさき御諱たしかならず、多は乳母の姓などを諱に用られき、是より二字たゞしくませば、のせたてまつる」と見えたり。御名の下文字に仁の字を用ふるの例は、清和天皇の御名惟仁を最初と爲し、後冷泉天皇以後其の例殊に多く、後小松天皇以後に至りては、女帝を除くの外、歷代の天皇何れも其の例に據らせたまへり。

延喜、天曆の頃よりは、命名の儀亦整ふに至れり。皇嗣の命名は親王宣下に際し勅定せらるゝを例とす。其の勅定に當りては、豫め文章博士等をして勘文を上らしめ、更に公卿に勅問ありて後宣下せらる。其の勘文の今日に傳はれるものに據れば、御名の奏薦に

は概ね經書より嘉字を採ると共に、其の和訓をも考査して撰進したることを知るを得べし。親王宣下の事なくして命名ありし例もなきに非ず。一たび御名の撰定ありし後は、御在世中改名の事なきを常例と爲せども、事情に依り時に改名ありし例もなきに非ず。平城天皇の御名は小殿より安殿に、醍醐天皇の御名は維城より敦仁に、稱光天皇の御名は躬仁より實仁に、後陽成天皇の御名は和仁より周仁に、光格天皇の御名は師仁より兼仁に改めたまへり。時としては御名の文字は其の儘に、唯其の和訓を改めたまへる例もあり。後水尾天皇は御名政仁の訓をタダヒトよりコトヒトに、後櫻町天皇は御名智子の訓をサトコよりトシコに改めたまへり。

御名の外に、和歌、詩文、消息等には、時に雅名を用ひたまへる例少か

らず。正親町天皇の此花、天淵、迎春は其の例なり(三)。

明治維新の後、親王宣下に際して命名ありし舊制を改め、皇子の御誕生の後直に命名したまふこと、定めらる。皇室典範第三十三條には、皇族の誕生命名は宮内大臣之を公告すとあり、廣く衆庶をして之を知らしむるの途を開き、更に皇室親族令には、皇子誕生したるときは天皇之に命ずべき名を賜ふと定め、又同令の附式に依り詳に命名の儀を定めたまへり(四)。

一 日本書紀

神代下

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、以其姨玉依姬爲妃、生彦五瀬命、次稻

飯命、次三毛入野命、次神日本書紀彦尊、凡生四男、(中略)

一書曰、(中略)次狹野尊、亦號神日本書紀彦尊、所稱狹野者、是年少時之號也、後撥平天

日本に君臨
したまふ
との意を
せる御名
を日本書
紀に表す

下、奄有八洲、故復加號曰神日本書紀彦尊、

一書曰、(中略)次磐余彦尊、亦號神日本書紀彦火火出見尊、

一書曰、(中略)次神日本書紀彦火火出見尊、

一書曰、(中略)次磐余彦火火出見尊、

日本書紀

神武天皇

神日本書紀彦天皇、諱彦火火出見、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

第四子也、母曰玉依姬、

古事記

中

神倭伊波禮毘古命、

自伊下五

與其伊呂兄五瀬命、

伊呂二

柱、坐高千穗

宮而議云、坐何地者、平聞看天下之政、

日本書紀通釋

二十一

神日本書紀彦尊、此大御名は、天下所知看ての上に、稱奉

れる物なり、次の一書に、しさて神と申し、倭と申すは論なきを、伊波禮としも稱申せる

は、大和の地名に依りし御名なるへし、

古事記傳

十七

神倭伊波禮毘古命、此大御名は、大和の京に遷坐て、天下所知看て

の上に、稱奉れる物なり、書紀一書に、狹野尊、亦號神日本書紀彦尊、所稱狹野者、是年少時之號也、後撥平天下、奄有八洲、故復加號曰神日本書紀彦尊、とあるが如し、狹野は、早稻主